

「弁顯密」教論を読む

長
澤
弘
隆

「弁顯密」教論を読む

目次

■まえがき

■正宗分

◆略釈段

●大綱釈

●引証釈義

●造論釈

◆広釈段

●問答決疑段

○顕密分別

○法身説法の能否

○伝者不談の問答

○顕密の差別を説く経論

○顕密の差別を説く証文

●引証喩釈段

○『釈摩訶衍論』引証喩釈段①

○『釈摩訶衍論』引証喩釈段②

○華嚴宗論章引証喩釈段

○天台宗論疏引証喩釈段

○『楞伽經』引証喩釈段①

○法相宗論章引証喩釈段

○三論宗論釈引証喩釈段

○『大智度論』引証喩釈段

○『釈摩訶衍論』引証喩釈段③

○『菩提心論』引証喩釈段

○『六波羅蜜經』引証喩釈段

○『楞伽經』引証喩釈段②

○『楞伽經』引証喩釈段③

○『五秘密經』引証喩釈段

○『聖位經』引証喩釈段

●引証註解段

○『瑜祇經』引証註解段

○『大日經』引証註解段

○『守護經』『大智度論』引証註解段

●顯密分際段

■あとかぎ

■まえがき

『弁頭密二教論』（以下、『二教論』）は、弘法大師空海（以下、宗祖大師）の主要な著作のうち「比較的前期に」「恐らく弘仁六年以後でもない頃」（勝又俊教『弘法大師著作全集』第一巻 山喜房仏書林）に書かれた立教開宗・教相判釈の書だと言われている。ただし、学術の世界では、台密関係の文献資料の視点から、偽撰説とまでは言わないが、宗祖大師の真作とすることへの疑問が出されている（大久保良峻博士「平安初期における日本密教の樹立と教学交渉」『密教文化』234号）。

『二教論』のテーマは言うまでもなく、師の恵果和尚も不空三藏も金剛智三藏も、中国仏教も、日本の南都仏教も天台の最澄も言わなかった、仏教を顕教と密教とに区分する顕密二教説である。すなわち、法身の説法（法仏の談話）を密教とし、応身の説法（応化の開説）を顕教として、その優劣や深淺を説き明かすこと。具には、密教経典以前の大乗がサトリの境地を言亡慮絶・言語道断としてコトバ（人間世界の言語）を超越し、サトリの境地そのもの（真如）を当体とする法身を人間の言語から遠い絶対の世界に置いたのに対し、宗祖大師は、自性身の法身に自眷属とともに説く「三密」説法を付与し、受用身の法身に自受法樂のために自らに自らのサトリを説くことと、利他方便のために「十地」の菩薩に説くことを付与し、変化身に同じく「十地」以前の菩薩や声聞・縁覚・衆生に対し姿を変えて現われ化導・利益する活動を付与し、また等流身には、観世音菩薩の三十三身のように、等同流類の姿となって化導・利益する活動を付与して、法身の説法（言語・表現）を可能だとした。法身の説法は禪語のような仮有（仮構）のコトバではなく、真実義の発露であり、「空」の「妙有」である。

宗祖大師は、長安で恵果和尚から受法した金胎両部の密教をこの東国日本に伝播するために、改めて自らの密教を創案し、平安時代の新しい国家的仏教エスタブリッシュメントとして打ち出した。その最初が『二教論』である。『二教論』で、宗祖大師は顕教に対する密教の優位性を説いた。その意味では、『二教論』はいわば立教開宗の宣言書であり、自宗の優位を説く教相判釈の書であった。

教判と言え、宗祖大師は、二つの教判書を残した。最初が初期のこの『二教論』、最後に晩年の『秘密曼荼羅十住心論』（略本、『秘蔵宝鑑』）。伝統教学では、『二教論』を横の教判、『十住心論』を豎の教判と言う。この二論とも、顕教と密教の優劣・深淺を説きながら、顕密双方を二項対立の關係で見るとはなく、「二而不二」で見ている。この「二而不二」の視座は宗祖大師に特徴的で、かならずしも自宗の優位にこだわらず、南都仏教や天台という既存の仏教勢力との融合を心がける宗祖大師の「多くを集めて一つにする」総合編集術や、あるいは時代的な鎮護國家の政治感覚が感じられる。

然るに、『二教論』の内容を伝統教学に従ってヘッドラインにすれば、序分と流通分がともになく、正宗分のみから成る。その正宗分に略釈と広釈の二段があり、

略釈段は、大綱釈・引証釈義・造論釈から成り、

広釈段は問答決疑段・引証諭釈段・引証註解段・顕密分際段から成る。

さらに、広釈段の

問答決疑段は、顕密分別・法身説法の能否・伝者不談の問答・顕密の差別を説く経論・顕密の差別を説く証文を説き、

引証諭釈段は、『釈摩訶衍論』引証諭釈段①・『釈摩訶衍論』引証諭釈段②・華嚴宗論章引証諭釈段・天台宗論疏引証諭釈段・『楞伽經』引証諭釈段①・法相宗論章引証諭釈段・三論宗論章引証諭釈段・『大智度論』引証諭釈段・『釈摩訶衍論』引証諭釈段③・『菩提心論』引証諭釈段・『六波羅蜜經』引証諭釈段・『楞伽經』引証諭釈段②・『楞伽經』引証諭釈段③・『五秘密經』引証諭釈段・『聖位經』引証諭釈段を説き、

引証註解段は、『瑜祇經』引証註解段・『大日經』引証註解段・『守護經』引証註解段・『大智度論』引証註解段を説き、

顕密分際段は、顕密の分際を説く。

『二教論』にはまた、顕密二教の優劣・深淺を論証するため、多くの経論が引用されている。それらをここにまとめれば、

- ① 『釈摩訶衍論』。
- ② 『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』（不空訳『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』）。
- ③ 『十地経論』。
- ④ 『成唯識論』。
- ⑤ 『中論』。
- ⑥ 『楞伽阿跋多羅宝経』（『入楞伽経』）。
- ⑦ 『大智度論』。
- ⑧ 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（『五秘密軌』）。
- ⑨ 『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』（『瑜祇経』）。
- ⑩ 『大毘盧遮那成佛神變加持経』（『大日経』）。
- ⑪ 『金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王経』（初会の『金剛頂経』）。
- ⑫ 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（『菩提心論』）。
- ⑬ 『大華嚴契経』（現存しない。伝えによれば、『六十卷華嚴経』（仏駄跋陀羅訳）はこの『大本』から分派したもの）。
- ⑭ 『華嚴五教章』『十玄縁起無碍法門義』。
- ⑮ 『天台止観』（『摩訶止観』）。
- ⑯ 『大乘法苑義林章』『二諦義章』。
- ⑰ 『瑜伽師地論』。
- ⑱ 『般若灯論』。

- ①9 『大般若波羅蜜多經』（『大般若經』）。
- ②0 『菩提場所説一字頂輪王經』（『菩提場經』）。
- ②1 『金剛三昧經』。
- ②2 『大乘起信論』。
- ②3 『大乘理趣六波羅蜜多經』（『六波羅蜜經』）。
- ②4 『菩薩瓔珞本業經』（『瓔珞經』）。
- ②5 『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』。
- ②6 『大樂金剛不空真実三昧耶經 般若波羅蜜多理趣釈』（『般若理趣釈』）。
- ②7 『守護国界主陀羅尼經』（『守護国界經』）。
- ②8 『密迹金剛力士經』（『密迹金剛經』）。

であり、このうち最も多く使われているのが『釈摩訶衍論』である。

然るにこの『釈摩訶衍論』、伝統的には龍樹の作、筏提摩多（後秦）の訳と言われているが、龍樹とはインド大乘中観派の龍樹なのか、真言付法の第三祖の龍猛（龍樹）なのか不明の上、大安寺の戒明によつて長安からもたらされた直後、法相の賢璟（室生寺の開祖）によつて偽書の判定を下され、次いで淡海三船・最澄・安然からも偽撰説が出されたが、宗祖大師はそうした事情を知っていたはずながら、若い日に大安寺で学んだ戒明に付度したか、偽書どころか逆に自らの密教の重要な典拠資料とした。戒明は讃岐出身で、宗祖大師にとっては同郷の先輩にあたる。なお、周知の通り、『釈摩訶衍論』は『大乘起信論』であるが、「不二摩訶衍」など『起信論』とは異なる主張がしばしば目につく。

この『弁頭密』教論』を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正蔵・222）」を用いた。しかしとところどころ誤字があり、電子版「定本 弘法大師全集」所収の「弁頭密』教論』を参照した。古来原本には各種あって、その比較対照研究も試みられているが、私は便宜上「大正新脩大藏經テキストデータベース版」を用い、同時に電子版「定本 弘法大師全集」を参照した。

「原文」に続いて「書き下し」を付けた。ほぼ電子版「定本 弘法大師全集」所収の「弁頭密』教論』に依ったが、私なりに書き下したところもある。この「書き下し」については古来、高野山（古義）系の「南山読み」と新義系の「根来読み」とがあつて、それを「読曲（よみくせ）」と言うが、私の属する真言宗智山派にはまた、智積院（総本山・法流の源泉）なりの「読曲」がある。しかし、この稿は伝統教学の学術論文ではないので、それらの伝統的な「読曲」を頭に置きつつ、敢えて私が修得した漢文読みの「書き下し」を用いたところもある。

「書き下し」に続いて「註記」を付けた。専門語や難解な語の解説である。できるかぎり正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。とても時間を費やしたがご参考になれば幸いである。この「註記」は、先学のご労作にしばしば見られる、現代語訳の不明確さに首をかしげた経験に由来するもので、空海密教初学者の手助けになれば幸いである。

「註記」のあとに「私訳」を付けた。私なりの現代語訳であるが、意識による誤訳を避けるため、できるだけ原文に添って直訳した。これも、失礼ながら、先学の原文から離れた意識や、意味のよくわからない現代語訳にたびたび首をかしげた経験に由来する。

さらに、ご参考までに「付記」をとどころどころ付け、私論を述べさせていただいた。

後期高齢による脳力・視力の衰えのせいかな、パソコンの文字入力や漢字変換のミスに鈍感になった。誤字・脱字がありましたらご容赦のほどを。

最後になったが、那須政隆博士の『『辨顯密二教論』の解説』（成田山仏教研究所）と松長有慶博士の『訳注 弁顯密二教論』には特段にお世話になった。学恩に心からの感謝をささげる次第である。

■「弁頭密二教論」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■「弁頭密二教論」 卷上

■序

◆略釈段

●大綱釈

【原文】

夫佛有三身教則二種。應化開説名曰顯教。言顯略逗機。法佛談話謂之密藏。言祕奧實説。顯教契經部有百億。分藏則有五十一之差。言乘則有一二三四五之別。談行六度爲宗。告成三大爲限。是則大聖分明説其所由。

【書き下し】

夫れ、佛に三身有り。教は則ち二種なり。應化おうけの開説を名づけて顯教と曰う。言は顯略にして機かなに逗えり。法佛の談話だんかい、之を密藏と謂う。言は祕奥にして實説なり。顯教の契經は部に百億有り。藏を分てば則ち一・十・五十一の差有り。乗を言えば則ち一・二・三・四・五の別有り。行を談ずれば六度を宗と爲す。成を生なげれば三大を限りと爲す。是れ則ち大聖の分明に其の由る所を説く。

【註記】

①三身：ここでは法身・応身・化身の三身を言う。この法身に通常の法身と報身を含む。

②應化の開説…応身と化身が説く所。

③法佛の談話…法身の説く所。

④一…法界法輪藏。

⑤三大…三大阿僧祇劫。

【私訳】

そもそも、仏には法身・応身・化身という三種類の仏身がある。(また)教えには顯教と密教の二種類がある。応身・化身の説く所を顯教と言ひ、説くコトバはわかりやすい言葉や文字で簡略であり、聞く人の根機に応じて説かれる。(一方)法身の説く所を密教と言ひ、説くコトバは奥深くてわかりにくい、あらゆるものの真相を説いている。顯教の經典は、部数で言つと百億部、經藏に分ければ一藏・十藏・五十一藏、乗で言へば一乗・二乗・三乗・四乗・五乗の別がある。修行を言へば「六波羅蜜」を主とし、サトリを告げられるのは三大阿僧祇劫を要する。これらは偉大な仏が明らかにそのわけを説いている。

●引証釈義

【原文】

若據祕藏金剛頂經説。如來變化身為地前菩薩及二乘凡夫等説三乘經法。他受用身為地上菩薩説顯一乘等。並是顯教也。自性受用佛自受法樂故與自眷屬各説三密門。謂之密教。此三密門者。所謂如來內證智境界也。等覺十地不能入室。何況二乘凡夫誰得昇堂。故地論釋論稱其離機根。唯識中觀歎言斷心滅。如是絕離並約因位談非謂果人也。何以得知。經論有明鑒故。其明證具列如後。求佛之客庶曉其趣。

【書き下し】

若し祕藏の金剛頂經の説に據らば、如來の變化身は地前の菩薩及び二乘・凡夫等の爲に三乘の經法を説き、他受用身は地上の菩薩の爲に顯の一乗等を説く。並びに是れ顯教なり。自性受用佛は自受法樂の故に自眷屬と各々三密門を説く。之を密教と謂う。此の三密門とは、謂わゆる如來内證智の境界なり。等覺・十地も室に入ること能わず。何ぞ況んや二乘・凡夫の誰か堂に昇ることを得ん。故に地論・釋論には其の機根を離れたると稱し、唯識・中觀は言斷心滅と歎ず。是くの如くの絶離は並んで因位に約して談じ、果人を謂うに非ざるなり。何を以つてか知ることを得ん。經論に明鑒有るが故に。其の明證は具に列ぬること後の如し。求佛の客、庶ば其の趣を曉け。

【註記】

- ①變化身…ここでは通常の法身・報身・變化身。
- ②二乘…ここでは大乘・小乘その他の經法。
- ③自性受用佛…自受用身。
- ④自受法樂…自らのサトリ（自内証）を自分で楽しむこと。
- ⑤如來内證智…如來自らのサトリの智慧。
- ⑥地論…『十地經論』。
- ⑦釋論…『釈摩訶衍論』。
- ⑧言斷心滅…言語道斷と心量絶離。
- ⑨因位…修行位のレベル。
- ⑩果人…果位（サトリの次元）にある人。

【私訳】

もし、密教經典の『金剛頂經』の説によれば、如來の變化身は「十地」以前の菩薩及び声聞・緣覺の「二乗」と凡夫のために大乘・小乗・その他の經法を説き、（報身の）他受用身は「十地」以上の菩薩のために顯教の菩薩一乘を説く。これらが顯教である。自受用身は、自受法樂のために、自分が生み出した眷屬とともに、それぞれ身・口・意の三密行を説く。これを密教と言う。この三密門とはすなわち、如來の内証智の境地である。「等覺」や「十地」の菩薩もその境地に入ることでない。まして声聞・緣覺の「二乗」や凡夫などその境地に昇ることなどできない。だから、『十地經論』や『釈摩訶衍論』にはその機根を超えた次元だと言い、唯識・中觀は言語道斷とか心量絶離と言っている。このような絶離は、それぞれ修行位のレベルで論じ、果位を得た（覺った）人を言うのではない。どのようにしてそれがわかるかと言えば、經典や論書に明確に説いているからである。その明らかな証しはあとに具体的に説いている通りである。仏法を求める人は、その趣旨をよく聴いて欲しいものである。

●造論釈

【原文】

縱使觸顯網以羝蕃壅權關以稅駕。所謂息化城之寶。愛楊葉兒。何能得保無盡莊嚴恒沙已。有。至如棄醍醐而覓牛乳。擲摩尼以拾魚珠。寂種之人膏盲之病醫王拱手甘雨何益。若有善男子善女人一嗅斯芸。秦鏡照心權實氷解。所有明證。雖經論至多。且示一隅。庶有裨於童幼。

【書き下し】

縱使、顯網に觸れて以つて羝蕃し、權關に壅がれて以つて稅駕す。謂わゆる化城に息むの寶、楊葉を愛する兒、何ぞ能く無

盡莊嚴恒沙の已有を保つことを得ん。醍醐を棄てて牛乳を覓め、摩尼を擲げて以つて魚殊ぎよしゆを拾うが如くに至つては、寂種じやくしゆの人、膏盲かうまうの病、醫王手を拱こまねき、甘雨何ぞ益せん。若し善男子・善女人有つて、一たびこの芸かりを嗅かがば、秦鏡しんけい心を照らし、權實氷解す。所有の明證、經論至つて多しと雖も、且く一隅たすけを示す。庶くば童幼たすけを裨たすけること有らん。

【註記】

- ① 羝審し…羝羊が草むらに角を引つかけて動けなくなること。
- ② 權關…仮の關所。足止めを食う所。顯教の意。
- ③ 稅駕…駕籠をおろして休息する。
- ④ 楊葉…枯れかけた黄色い木の葉を黄金とまちがう。
- ⑤ 魚珠…魚の眼球。
- ⑥ 寂種…仏種を失くす。
- ⑦ 膏盲…心臓の部位。
- ⑧ 秦鏡…秦の始皇帝が善惡を照らした鏡。善惡の見識。

【私訳】

たとい、顯教が（我執の）網にかかつて、羝羊が草むらに角を引つかけて動けなくなつたように、仮の關所（顯教）に足止めされて駕籠をおろして休憩する。いわゆる、幻の化城（声聞・緣覺の「二乗」）に休息する過客や、枯れかけた黄色い木の

葉を黄金とまちがつて愛著する幼児が、どうしてよくガンジス河の砂数ほどに尽きないほどに莊嚴された自己を保つことができるのか。美味しい蘇乳を棄てて牛乳を求め、摩尼宝珠を投げ捨てて魚の眼球を拾うのと同様の、仏種を失くした人、心臓を病む人は、名医でも手をこまねき、甘露の慈雨も何の役にもたたない。もし、善男子・善女人がいて、一たびこの密教の香りを嗅いだら、秦の始皇帝が善惡を照らした鏡のように心が照らし出され、仮の教えの顯教と眞の教えの密教とのちがいの疑問が氷解する。その裏付けとなる明確な証しの經論は至つて多いけれども、今はその一端を示すだけである。凡夫・衆生を助けることになるように願っている。

【原文】

問曰。古傳法者廣造論章。唱敷（しやうこ）六宗開演三藏。軸剩（しやくじやう）廣厦人僵卷舒。何勞綴斯篇。利益如何。答。多有發揮所以應纂。先匠所傳皆是顯教。此是密藏人未多解。是故戈鈞經論今爲一手鏡。

【書き下し】

問うて曰わく、「古の傳法者は廣く論章を造つて六宗を唱敷し三藏を開演す。軸は廣厦（こうか）に剩り、人は卷舒（けんじよ）に僵る。何ぞ勞わして斯の篇を綴るや。利益如何ん」と。答う。「多く發揮すること有り、所以に纂（さん）ずべし。先匠の傳ふる所は皆是れ顯教なり。此れは是れ密藏なり。人未だ多く解せず。是の故に經論を戈鈞して、今、一つの手鏡と爲す」と。

【註記】

①論章…論書や註釈書。

②六宗：俱舍・成実・法相・三論・天台・華嚴。

③廣厦：広い家。

④卷舒：卷物の経巻を巻いたり伸ばし広げる。

⑤戈釣：引っかけて取る。

⑥手鏡：解釈書 参考書。

【私訳】

問う人が言うに、「古来、仏法を伝え広める人は広く論章を著作して「六宗」を唱導し、「三蔵」を説いた。経巻の軸は広い家に収まり切らず、人は経巻を伸ばし広げたり巻き戻したりして疲れ果てる。どうしてわざわざこのような論書を綴る労を惜しまないのか。その利益はあるのか」と。答えて言うに、「まだまだ伝え広めることがある。だからこれからも書くつもりである。先師が伝えているのはみな顕教ばかりである。私が伝え広めようとしているのは密教である。世の人々はまだほとんど理解していない。だから経論（から証拠を）を採り上げて、今、一つの註釈書としたのである」と。

■本論

◆広釈段

●問答決疑段

○顯密分別

【原文】

問。顯密二教其別如何 答。他受用應化身隨機之說謂之顯也。自受用法性佛説内證智境是名祕也。

【書き下し】

問う、「顯密二教、其の別は如何」と。答う。「他受用・應化身の隨機の説、之を顯と謂う。自受用法性佛、内證智の境を説く、是れを祕と名づく」と。

【私訳】

問う人が言うに、「顯教と密教の二教は、そのちがいはどういうことか」と。答えて言うに、「他受用身や応身・化身が聞く人の根機に応じて説くのを顯教といい、自受用身の法身が自内証のサトリの境地を説くのが密教である」と。

○法身説法の能否

【原文】

問。應化身説法諸宗共許。如彼法身無色無像。言語道斷心行處滅無説無示。諸經共説斯義。諸論亦如是談。如今何爾談法身説法。其證安在乎答。諸經論中往往有斯義。雖然文隨執見隱。義逐機根現而已。譬如天鬼見別人鳥明暗

【書き下し】

問う、「應化身の説法は諸宗共に許す。彼の法身の如きは色も無く像も無く、言語道斷にして心行處滅し、説くことも無く示すことも無し。諸經は共に斯の義を説き、諸論は亦た是くの如く談ず。如今、何ぞ爾、法身の説法を談するや。其の證、安くに在るや」と。答う、「諸經論の中に往往に斯の義有り。然りと雖も、文は執見に随つて隠れ、義は機根に逐つて現わるのみ。譬えば天鬼の見別、人鳥の明暗の如し」と。

【註記】

① 心行處…心を向ける処。

② 執見…偏った見方。密教を知らない見方。

③ 天鬼の見別…『撰大乘論』巻下や『大日経疏』第一に説かれる「一水四見」の喩え（松長有慶『訳注 弁頭密「教論」』）。

「一処四見」「二境四見」とも言われる。同一の水を、天人は瑠璃宝蔵の池と見、人間は清らかな冷水と見、魚はわが住処と見、餓鬼は膿血と見ること。

④ 人鳥の明暗…『釈摩訶衍論』第四に、六種の「無明」が説かれ、そのなかの「俱是の無明」のところに説かれる喩え。同じ暗闇を、賢い鳥は清浄光明と見、愚かな人間はただの暗黒と見る（前掲書）。

【私訳】

問う、「姿・かたちのある」応身・化身が説法することは仏教各宗が共通して認めている。しかし、かの法身は色もなく形もなく、言葉で表現もできず心を向ける処もない。説明もできず提示もできない。多くの経典は共通してこのように言い、数々の論書もこのように説いている。今、どうしてあなたは、法身が説法することを主張するのか。その証しはこのあるのか」と。答えて言うに、「多くの経論のなかにしばしばこの法身説法は説かれている。しかし、経論の文は（密教がわかっていない人の）偏った見方によつて真意がわからなくなつてしまい、教えの内容は機根によつてちがつて現われるのである。例えば、同じ一つの水が見るものによつて四つに見える「天鬼の見別」や、同じ暗闇も賢い鳥と愚かな人間とは見え方がちがう「人鳥の明暗」のようである」と。

○伝者不談の問答

【原文】

問。若如汝說諸教中有斯義。若如是者何故前來傳法者不談斯義答。如來說法應病投藥。根器萬差針灸千殊。隨機之說權多實少。菩薩造論隨經演義不敢違越。是故天親十地馳因分可說之談。龍猛釋論挾圓海不談之說。斯則隨經興詞非究竟唱。雖然傳顯法將會深義而從淺。遺祕旨而未思。師師伏膺隨口蘊心。弟弟積習隨宗成談。爭募益我之銖未遑訪損己之劍。加以釋教漸東夏自微至著。漢明爲始周天爲後。其中間所翻傳皆是顯教。玄宗代宗之時金智廣智之日。密教鬱起盛談祕趣。新藥曰淺舊病未除。至如楞伽法佛說法之文。智度性身妙色之句。馳胸憶而會文。驅自宗而取義。惜哉古賢不啻醍醐。

【書き下し】

問う、「若し汝の説の如きは、諸教の中に斯の義有り。若し是くの如くならば、何の故に前來の傳法者は斯の義を談ぜざる」と。答う。「如來の説法は病に應じて藥を投ず。根器萬差なれば針灸千殊なり。隨機の説は權多く實少し。菩薩、論を造る」と經に隨つて義を演べ敢えて違越せず。是の故に、天親の十地には因分可説の談を馳せ、龍猛の釋論には圓海不談の説を挾む。斯れ則ち經に隨つて詞を興す。究竟の唱えに非ず。然りと雖も、顯を傳ふる法將は深義に會して淺に従い、祕旨を遺して未だ思わず。師師伏膺して口に隨つて心に蘊み、弟弟積習して宗に隨い談を成す。我を益するの銖を爭ひ募つて未だ己を損するの劍を訪うに違あらず。加以、釋教東夏に漸つて微より著に至る。漢明を始めと爲し周天を後と爲す。其の中間に翻傳する所は皆、是れ顯教なり。玄宗・代宗の時、金智・廣智の日、密教鬱んに起り盛んに祕趣を談ず。新藥は日淺くして舊病は未だ除かず。楞伽の法佛説法の文、智度の性身妙色の句の如くに至つては、胸憶に馳せて文を會し、自宗に驅つて義を取る。惜しい哉、古賢、醍醐を嘗めず」と。

【註記】

- ①天親の十地…唯識思想の大成者・世親（ヴァスバンダウ Vasubandhu）の『十地経論』。
- ②因分可説…修行位については言葉で表現することができる。
- ③龍猛の釋論…龍樹（龍猛）の『釈摩訶衍論』。
- ④圓海不談…円融無礙の法界については言葉で表現することができない。
- ⑤法將…論師。
- ⑥伏膺…師の教えを心に留め置くこと。
- ⑦東夏…中国。
- ⑧漢明…後漢の明帝。
- ⑨周天…周の則天武后。
- ⑩金智・廣智…金剛智三藏や大広智不空三藏
- ⑪楞伽…『楞伽經』。
- ⑫智度…『大智度論』。
- ⑬性身妙色…自性法身は姿・かたちや人格を持っていること。

【私訳】

問う人が言うに、「もし、あなたの言う通りならば、仏教各宗のなかで法身説法が説かれているはずである。もし、そうであるなら、なぜ過去に仏法を伝え広めた人たちはこのことを言わなかったのか」と。答えて言うに、「如來の説法は、例えば、医師が病にに応じて薬を処方するように、根機は千差万別であるから針やお灸も千差万別なのである。しかし、根機に応じて説くのは、仮の説法が多く真実を説くことは少ない。（顕教の）論師は、論書を造るのに經文に従って解釈を述べ、それとは

ちがったり越えることは取えて述べない。だから、世親の『十地經論』には、修行位については言葉で表現できる旨を言い、龍猛の『釈摩訶衍論』には、円融無礙の法界は言葉では表現できないという説をさし挟んでいる。これは經典の内容によって言い方を選んでゐる。究極の言い方ではない。しかし、顕教を伝え広めた論師たちは、奥深い（密教の）教えに出会つても浅い解釈に従い、深秘釈をあとに残してこれを今説こうとは思わなかった。論師たちは口で言つた通りに浅い解釈を心に留め置き、弟子たちはその浅い解釈を習い重ねて各宗の習いに従つて議論してきた。自分を利益する錚を争つて集め、まだ自分を傷つける剣を捜し歩くのに忙しい。そればかりではなく、仏教はインドから東漸して中国に至り、微細な広がりから顕著な広がりに至つた。後漢の明帝から周の則天武后までの間に伝えられ漢訳されたものはみな、顕教であつた。唐の玄宗皇帝・代宗の時代、金剛智三蔵や大広智不空三蔵の時、密教がさかんに伝えられ大いに奥深い教えが論じられた。新しい葉（密教）は日が浅く、古い病（顕教）はいまだに除かれない。『楞伽經』の「法身說法」の經文や『大智度論』の「性身妙色」の句を（顕教の論師たちは）胸中に駆けめぐらせ、その經文を自宗の解釈に合わせている。惜しい哉、古き賢聖たちは醍醐（法身說法の深い意味）を味わつていないのである」と。

○顕密の差別を説く經論の問答

【原文】

問。義若如是者何等經論說顯密差別。答曰。五祕金峯聖位經。遮那楞伽教王等。菩提智度摩訶衍。如是經論簡擇說。

【書き下し】

問う、「義、若し是くの如くならば、何等の經論に顯密の差別を説くや」と。答えて曰わく、「五祕・金峯・聖位經・遮那・楞伽・教王等・菩提・智度・摩訶衍、是くの如くの經論に簡擇して説く」と。

【註記】

- ①五祕：『金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌』（『五祕密軌』）。
- ②金峯：『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（『瑜祇經』）。
- ③聖位經：『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』（『聖位經』）。
- ④遮那：『大毘盧遮那成仏神變加持經』（『大日經』）。
- ⑤教王：『金剛頂一切如來真實撰大乘現証大教王經』（『初会金剛頂經』）。
- ⑥菩提：『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（『菩提心論』）。
- ⑦摩訶衍：『釈摩訶衍論』。

【私訳】

問う、「あなたが説くことがもしその通りであるならば、どんな経論に顕教と密教のちがいが説かれているのか」と。答えて言うに、『金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌』（『五祕密軌』）・『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（『瑜祇經』）・『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』（『聖位經』）・『大毘盧遮那成仏神變加持經』（『大日經』）・『楞伽阿跋多羅宝經』（『楞伽經』）・『金剛頂一切如來真實撰大乘現証大教王經』（『初会金剛頂經』）等、『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（『菩提心論』）・『大智度論』・『釈摩訶衍論』。このような経論に選り分けて説いている」と。

○顕密の差別を説く証文

【原文】

問者曰。請聞其證答曰。然矣。我當爲汝飛日輪而破暗。揮金剛以摧迷。問者曰。唯唯欲聞

【書き下し】

問う者曰わく、「請う、其の證を聞かんことを」と。答えて曰わく、「然なり。我、當に汝の爲に日輪を飛ばして暗を破らん。金剛を揮つて以つて迷を摧かん」と。問う者曰わく、「唯唯として、聞かんと欲す」と。

【私訳】

問う人が言うに、「どうか、その証しを聞かせていただきたい」と。答えて言うに、「わかった。私は、あなたのために、まさに、太陽をあなたのもとに飛ばして暗闇を破ろう。金剛をふるってあなたの迷妄を砕いて見せよう」と。問う人が言うに、「ただただ、それを聞きたいと願っている」と。

●引証喩釈段

○『釈摩訶衍論』引証喩釈段①

【原文】

龍猛菩薩釋大衍論云。一切衆生從無始來。皆有本覺無捨離時。何故衆生先有成佛後有成佛今有成佛。亦有勤行亦有不行。亦有聰明亦有暗鈍。無量差別。同有一覺皆悉一時發心修行到無上道。本覺佛性強劣別故如是差別。無明煩惱厚薄別故如是差別。若言如初者此事則不爾。所以者何。本覺佛性圓過恒沙之諸功德無增減故。若言如後者此事亦不爾。所以者何。一地斷義不成立故。如是種種無量差別皆依無明而得住持。於至理中無關而已。

【書き下し】

龍猛菩薩の釋大衍論に云わく、「一切の衆生、無始このかた從り來、皆、本覺有つて捨離する時無し。何の故にか衆生先に成佛す

る有り、後に成佛する有り、今成佛する有り。亦た勤行する有り、亦た行ぜざる有り。亦た聰明なる有り、亦た暗鈍なる有り。無量の差別あり。同じく一覺有らば、皆悉く一時に發心し修行して無上道に到るべし。本覺の佛性、強劣の別の故に。是くの如く差別あるや。無明の煩惱、厚薄の別の故に。是くの如くの差別あるや。若し、初めの如く言わば、此の事則ち爾らず。所以は何んとならば、本覺の佛性は過恒沙かこうじやの諸々の功德を圓まじんじて、増減無きが故に。若し、後の如く言わば、此の事亦た爾らず。所以は何んとならば、一地斷いちぢだんの義、成立せざるが故に。「是くの如くの種種無量の差別、皆無明に依つて住持することを得。至理の中に於いて關かること無し」と。

【註記】

- ①釋大衍論…伝龍猛作『釈摩訶衍論』。
- ②過恒沙…ガンジス河の砂数を超えるほど無数の。
- ③一地斷…修行段階のある一つの境地において「無明」を斷つ。
- ④至理…究極の眞実。不二摩訶衍（松長有慶『訳注 弁頭密「經論」』）。

【私訳】

（問い）「龍猛菩薩の『釈摩訶衍論』巻五に説く、「一切の衆生、始めのない大昔から現在に至るまで、みな「本来成仏」の本覺を具有し、それから離れ去る時もない。しかし、なぜ衆生は、過去に成仏したり、未來に成仏したり、現在成仏したりするのか。また、修行に精勵する者もあれば、修行を怠る者もある。また聰明な者もあれば、暗愚な者もあつて、差別に限りがない。もし、誰でも同じく一度に覺るならば、みなことごとく一時に發心し、修行して無上の菩提に到るはずである。（し

かし現実にはそうではないのは）本来具有の仏性に優劣の差別があるからなのだろうか。（あるいはまた）「無明」の煩惱に厚い薄い差別があるからなのだろうか。もし、初めの場合で言うならば、そうではない。なぜなら、本来具有の仏性はガンジス河の砂の数を超えるほどのさまざまな功德を満足していて、増えたりとか減ったりとかしないからである。もし、あとの場合で言えば、これもそうではない。なぜならば、修行段階のある一つの境地において、「無明」を断つ意味が成立しないからである」と。（答え）「このような数限りない差別は、みな「無明」に依って保持されるものであり、究極の真実（「不二摩訶衍」）にはかかわりがない」と。

【付記】

『釈摩訶衍論』巻五に説かれる「五重問答」の前の、有覺門における「無明」の「厚薄問答」。

宗祖大師は、「五重問答」を自論の論拠として以下に特出するが、『釈摩訶衍論』のコンテキストからすれば「五重問答」は「有覺門」の最後部分であり、そのあとには「無覺門」が続く流れである。

『釈摩訶衍論』について略記すると、先ず、宗祖大師は龍猛菩薩の作としているが、これには古くから偽作説があり、宗祖大師の少し前の時代、大安寺の留学僧・戒明によつて、宝龜十年（七七九）の頃にもたらされたところ、淡海三船・最澄によつて偽書と批判された。宗祖大師はその事情をよく知っていたはずであるが、なぜか龍猛作説をとる。淡海三船・最澄は中観派の論師・龍樹（ナーガールジュナ Nagārjuna）を想定し、宗祖大師は真言付法の第三祖・龍猛（ナーガールジュナ Nagārjuna）を想定しているように見える。

『釈摩訶衍論』は『大乘起信論』の注釈書としてよく知られているが、『大乘起信論』の注釈書はほかにも『大乘起信論疏』（浄影寺・慧遠）・『大乘起信論疏』（新羅の華嚴僧、元曉）・『大乘起信論義記』（法蔵）（以上、起信の三疏）・法蔵の『義記』註の『大乘起信論疏』（宗密）などがあつて、いずれもタイトルに「大乘（起信論）」とある。これに対し『釈摩訶衍論』は「大乘」ではなく「摩訶衍」（Mahāyāna 「大乘」）の音訳であり、タイトルばかりでなく本文内容においても同様である。

結論を言えば、「大乘」より上に「摩訶衍」を想定している。すなわち、「大乘」を鈍根とし「摩訶衍」を利根とし、「摩訶衍」で新たに創案された概念である「不二摩訶衍」と「十六所入法」をそこに想定している。端的に言えば、「大乘」の上に想定された「摩訶衍」、なにかんずく究極の「不二摩訶衍」を宗祖大師は密教と「アワセ」「カサネ」たのである。

参考までに「摩訶衍」に関する当該の原文を示しておく。

摩訶衍者。總標十六所入法體并及不二摩訶衍體。

摩訶衍者總者。卽是所入根本總體門。卽是根本摩訶衍中有八差別。云何爲八。一者一體一心摩訶衍。二者三自一心摩訶衍。三者無量無邊諸法差別不增不減體大摩訶衍。四者寂靜無雜一味平等不增不減體大摩訶衍。五者如來藏功德相大摩訶衍。六者具足性功德相大摩訶衍。七者能生一切世間因果用大摩訶衍。八者能生一切出世間善因果用大摩訶衍。是名爲八。如是八種摩訶衍法。皆從能入建立其名。マ馬鳴菩薩正攝彼文。是故說言摩訶衍者總。此中總言。於兩處中是總體故。所謂望上及下臨故。

言顯示摩訶衍義。云何爲二門。一者心眞如門。二者心生滅門。云何爲二本法。一者一體摩訶衍。二者自體自相自用摩訶衍。如是所入二種本法。或從能入建立其名。マ答曰。作一法界心眞如門。卽顯示一體摩訶衍法。作一法界心生滅門。能示自體自相自用摩訶衍法。由此義故。當知各具二門二法。

【原文】

若如是者一切行者。斷一切惡修一切善。超於十地到無上地。圓滿三身具足四德。如是行者爲明無明。如是行者無明分位非明分位。

【書き下し】

「若し、是くの如くならば、一切の行者、一切の惡を斷じ一切の善を修し、十地を超え無上地に到り、三身を圓滿し四徳を具足す。是くの如くの行者は、明と爲すや、無明か。」「是くの如くの行者、無明の分位にして明の分位に非ず」。

【註記】

①三身：「法身」「応身」「化身」。

②四徳：「常」「樂」「我」「淨」。

【私訳】

（問うて言うに）「もしそうなら、一切の行者は惡行をすべて断つてあらゆる善行を行い、「十地」を超えてサトリの境地に達し、「三身」を成就し「四徳」を持するが、このような行者は「明」の段階か、それとも「無明」の段階か」と。（答えて言うに）「そのような行者でも、まだ「無明」の段階であつて「明」の段階にはない」と。

【付記】

ここから「五重問答」。その一の「染淨始覺」。

【原文】

若爾清淨本覺從無始來不觀修行非得他力。性徳圓滿本智具足。亦出四句亦離五邊。自然之言不能自然。清淨之心不能清淨。絶離絶離。如是本處爲明無明。如是本處無明邊域非明分位。

【書き下し】

「若し爾らば、清淨の本覺は、無始このかた従り來、修行を觀ぜず他力を得るに非ず。性徳圓滿して本智具足す。亦た四句を出て亦た五邊を離る。自然の言は自然なること能わず、清淨の心は清淨なること能らず。絶離絶離たり。是くの如くの本處は明と爲すや、無明か」。「是くの如くの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず」。

【註記】

①四句…「有」「空」「亦有亦空」「非有非空」。

②五邊…「四句」に「非非有非非空」を加える。

【私訳】

（問うて言うに）「もしそうならば、清淨無垢な「本来成仏」の本覺は、始めのない大昔から現在に至るまで、修行を行うでもなく他人の力を借りるでもなく、本来具わっている仏徳が充分に備わり本来の仏智が身についているのである。すなわち、「四句」を超え「五邊」を離れている。自然という言葉は自然ではなく、清淨な心と言っても清淨ではなく、言葉と絶離している。このような本来の境地は「明」の段階なのか、「無明」の段階なのか」と。（答えて言うに）「このような本来の境地もまだ「無明」の段階であって「明」の段階にはない」と。

【付記】

「五重問答」。その二「清淨本覺」。

【原文】

若爾一法界心非百非背千是。非中非中背天背天。演水之談足斷而止。審慮之量手亡而住。如是一心爲明無明。如是一心無明邊域非明分位。

【書き下し】

「若し爾らば、一法界心は百非に非ず千是に背く。中に非ず、中に非ざれば天に背き、天に背けば、演水の談は足斷つて止まり、審慮の量は手亡くして住す。是くの如くの一心は明と爲すや、無明か」。「是くの如くの一心は、無明の邊域にして明の分位に非ず」。

【註記】

①一法界心…『釈摩訶衍論』が説く真如門及び生滅門のうちの真如門に、さらに真如門と生滅門があり、その生滅門のこと。
無尽法界心（松長有慶『訳注 弁顯密二教論』）。

②百非…百回の否定。

③千是…千回の肯定。

④天…勝義諦・第一義諦。

⑤演水…よどみなく流れる水。

⑥審慮…モノゴトの本質を考えること。

⑦量…心量。

【私訳】

（問うて言うに）「もしそうならば、『釈摩訶衍論』が説く「一法界心」は、（それを説くのに）百回の否定でも足りず千回の肯定でも充分ではない。その中間でもなく、中間でもなければ勝義諦でもない、勝義諦でなければ、よどみなく流れる水のような弁論は足止めとなり、モノゴトの本質を考える心量は手をこまねいたままになる。このような一心は「明」の段階となるのか、「無明」なのか」と。（答えて言うに）「このような一心は、「無明」の段階であって「明」の段階ではない」と。

【付記】

「五重問答」。その三「一法界心」。

【原文】

「三自一心摩訶衍法。一不能一假能入一。心不能心假能入心。實非我名。而目於我。我亦非自唱而契於自。如我立名而非實我。如自得唱而非實自。玄玄又玄遠遠又遠」。「如是勝處爲明無明。如是勝處無明邊域非明分位」。

【書き下し】

「三自一心摩訶衍の法は、一も一なること能わず、能入の一を假る。心も心なること能わず、能入の心を假る。實に我が名に非ざれども、而も我に目す。我亦た自を唱うるに非ざれども、而も自に契う。我の如く名を立つるとも、而も實の我に非ず。自の如く唱うるを得れども、しかも實の自に非ず。玄玄としてまた玄、遠遠としてまた遠なり。是くの如くの勝處は、明と爲すや、無明か」。「是くの如くの勝處は、無明の邊域にして明の分位に非ず」。

【註記】

①三自一心摩訶衍の法…生滅門における「自体」「自相」「自用」の三天を具備した唯一絶対の心。一心。

『大乘起信論』は、生滅門における「自体相用」を説く。「是の心生滅因縁の相は、能く摩訶衍の自体相用を示すが故に」
(松長有慶『訳注 弁頭密「教論」』)。

②能入…法を考察する立場。法は所入。すなわち、三百一心摩訶衍の法。

【私訳】

(問うて言うに)「生滅門における「自体」「自相」「自用」の三大を具備した唯一絶対の三百一心摩訶衍の法は、(一心の)一と言つても(一二三の)一ではなく、仮に所入(三百一心摩訶衍の法)を考察する能入の立場で一と言つのである。(同じく、一心の)心と言つても世間心ではなく、仮に所入(法)を考察する(能入の)立場で心と言つのである。実に、我と言つても(自他の)相対的な我を言うのではなく、大我とみなす。我はまた(自他の)相対的な自を言うのではなく、大我の自と見る。(生滅門は)我という名を立てても大我ではなく、自と言つても大我の自ではないのである。(とは言え、その意味は)玄のまた玄、遠のまた遠である。このようなすぐれた境地は、「明」の段階なのか「無明」の段階なのか」と。(答えて言うに)「このようなすぐれた境地でも「無明」の段階であつて「明」の段階ではない」と。

【付記】

「五重問答」。その四「三百一心摩訶衍」。

【原文】

不二摩訶衍法。唯是不二摩訶衍法。如是不二摩訶衍法爲明無明。喩曰。已上五重問答甚有深意。細心研覈乃能詣極。一一深義不能染紙。審而思之。

【書き下し】

「不二摩訶衍」の法は、唯だ是れ不二摩訶衍の法なり。是くの如くの不二摩訶衍の法は、「明」と爲すや、「無明」か。喩して曰わく。「已上の五重問答、甚だ深意有り。細心研覈けんきやくして乃ち能く極に詣るべし。一一の深義、紙に染むること能わず。審にして之を思え」と。

【註記】

①不二摩訶衍：前の「四重問答」の法は「無明」の段階のあつて因分相對の法であるのに対し、因果を超えた果分である。

②研覈：詳しく調べること。研究。

【私訳】

（問うて言うに）「因果を超えた果分である不二摩訶衍の法は、唯だ不二摩訶衍の法と言うほかない。このような不二摩訶衍の法は、「明」の段階なのか、「無明」の段階なのか。論して言うに、「以上の五重問答には、とても深い意味がある。細心の研究をして究極に至るべきである。一つ一つの深い意味について紙に書き記すことはできない。詳しく調べてよく考えることである」と。

【付記】

「五重問答」。その五「不二摩訶衍」。

【原文】

又曰。何故不二摩訶衍法無因緣耶。是法極妙甚深獨尊。離機根故。何故離機根。無機根故。何須建立。非建立故。是摩訶衍法諸佛所得耶。能得於諸佛。諸佛得不故。菩薩二乘一切異生亦復如是。性德圓滿海是焉。所以者何。離機根故。離教說故。八種本法從因緣起。應於機故。順於說故。何故應機。有機根故。如是八種法諸佛所得耶。諸佛所得。得於諸佛。不故。菩薩二乘一切異生亦復如是。修行種因海是焉。所以者何。有機根故。有教說故。八種本法從因緣起。應於機故。順於說故。何故應機。有機根故。如是八種法諸佛所得耶。諸佛所得。得於諸佛。不故。菩薩二乘一切異生亦復如是。修行種因海是焉。所以者何。有機根故。有教說故。

【書き下し】

又、曰わく、「何が故にか不二摩訶衍の法は因縁無きや」。「是の法は極妙甚深にして獨尊なり。機根を離るるが故に」。「何が故にか機根を離るるや」。「機根無きが故に」。「何ぞ建立もつゝを須るや」。「建立に非るが故に」。「是の摩訶衍の法は諸佛の得る所なるや」。「能く諸佛を得」。「諸佛は得るや」。「不なるが故に、菩薩・二乘・一切異生も亦た復た是くの如し。性徳圓滿海是なり。所以は何んとならば、機根を離るるが故に。教説を離るるが故に」。

「八種の本法は因縁從り起こる。機に應ずるが故に。説に順ずるが故に。何が故にか機に應ずるや」。「機根有るが故に」。「是くの如くの八種の法は諸佛の得らるる所や」。「諸佛の得らるる所なり」。「諸佛を得るや」。「不なるが故に。菩薩・二乗・一切の異生も亦た復た是くの如し。修行種因海、是れなり。所以は何んとならば、機根有るが故に。教説あるが故に」と。

【註記】

①不二摩訶衍の法…『釈摩訶衍論』が説く、機根・相對關係を超えた絶対の教法。

②獨尊…相対的な在り方ではない。

③建立…自己のなかに打ち立てること。

④性徳圓滿海…仏性の功徳を成就している大海。サトリの段階の果海。

⑤八種の本法…『釈摩訶衍論』が説く「三十二門」（十六所入法と十六能入法）のうち「十六所入法」の機根にすぐれた衆生を対象とした「前重八所入法」。すなわち、前に引用した原文にある「一体一心摩訶衍」「三百一心摩訶衍」「無量無辺諸法差別不増不減体大摩訶衍」「寂靜無雜一味平等不増不減体大摩訶衍」「如來藏功徳相大摩訶衍」「具足性功徳相大摩訶衍」「能生一切世間因果用大摩訶衍」「能生一切出世間善因果用大摩訶衍」。

⑥修行種因海…修行すなわち因位の種をまいて、サトリの実りを穫る大海。修行の段階の因海。

【私訳】

また、『釈摩訶衍論』巻一に「問い」「なぜ不二摩訶衍の法には因と縁（因果律）がないのか」。（答え）「この不二摩訶衍の法は意味が深く極めてすぐれた教理で、相対的な在り方ではない。聞く人の機根（能力）を超えているからである」。（問う）「なぜ機根を超えているのか」。（答え）「不二摩訶衍に」機根といった相対関係はないからである」。（問う）「では相対関係を自己のなかに打ち立てる必要があるか」。（答え）「打ち立てる必要はない」。（問う）「この不二摩訶衍の法は諸仏が觀法によつて自己のなかに会得できるものか」。（諸仏が会得するのではなく不二摩訶衍の法が）諸仏を取り込んでゐる」。（問う）「では、生滅門の」諸仏は、不二摩訶衍の法を自己のなかに会得できるか」。（答え）「それはできない。菩薩も二乗も、一切の凡夫・衆生も、それは同じで、仏性の功徳を成就している大海のようである。そのわけは、機根を超えているからであり、機根に応じた相対的な教説を離れているからである」。

（問う）「機根にすぐれた衆生を対象とした「前重八所入法」（八種本法）」は、因縁（因果律）に従つて生起する。機根に応じ教説に順じているからである。なぜ機根に応じるのか」。「機根というものが現にあるからである」。「このような八種の

法は、諸仏が觀法によつて自己のなかに會得できるものか。「諸仏は會得できるものである」。「八種本法」は諸仏を取り込めるか。「それはできない。菩薩も二乘も、一切の凡夫・衆生も、それは同じで、修行すなわち因位の種をまいて、サトリの実りを獲る大海のようなものである。であるから、機根に應じて教説があるのである」。

【付記】

『釈摩訶衍論』に説かれる「不二摩訶衍法」と及び「三十二法門」のうちの「八種本法」が説かれた。

【原文】

又云。諸佛甚深廣大義者。即是通總攝前所説門。所謂通攝三十三種本數法故。此義云何。言諸佛者即是不二摩訶衍法。所以者何。此不二法形於彼佛其德勝故。大本花嚴契經中作如是説。其圓圓海德諸佛勝。其一切佛不能成就圓圓海劣故。若爾何故分流花嚴契經中作如是説。盧舍那佛三種世間爲其身心。三種世間攝法無餘。彼佛身心亦復無有所不攝焉。盧遮那佛雖攝三世間。而攝不攝故。是故無過

【書き下し】

又、云わく、「諸佛甚深廣大の義とは、即ち是れ通總攝前所説門なり。謂わゆる、通じて三十三種の本數の法を攝するが故に。此の義、云何。諸佛と言ふは、即ち是れ不二摩訶衍の法なり。所以は何んとならば、此の不二の法を彼の佛に形らたくぶるに、其の德勝れたるが故に、大本花嚴契經の中に是くの如くの説を作す。其の圓圓海德の諸佛勝れたり。其の一切の佛は圓圓海を成就すること能わず、劣なるが故に」と。「若し爾らば、何故に分流花嚴契經の中に是くの如くの説を作すや。盧舍那佛は三種世間を其の身心と爲す。三種世間に法を攝するに餘り無し。彼の佛の身心も亦た復た攝せざる所有ること無し」と。

「盧遮那佛は三世間を攝すと雖も、而して攝と不攝との故に、是の故に過無し」と。

【註記】

- ①諸佛甚深廣大…諸仏はそのサトリの智慧が奥深く法界に広く遍満している。
- ②通總攝前所説門…前に説いたことと総じて共に包含している法門（教え）。
- ③三十三種の本數の法…「十六所入法」と「十六能入法」の「三十二法門」に「不二摩訶衍法」を加えたもの。
- ④大本花嚴契經 分流花嚴契經…『大本華嚴經』。伝承によれば、現行の『六十卷華嚴經』（仏駄跋陀羅訳）・『八十卷華嚴經』（実叉難陀訳）のほかに「大本華嚴經」があつて、『六十華嚴』は『大本華嚴經』と分かれたもので「分流華嚴經」と言われる（松長有慶『訳注 弁頭密二教論』）。
- ⑤圓圓海…円融無礙の妨げなき大海。

【私訳】

また、『釈摩訶衍論』卷十に説く、「諸仏はそのサトリの智慧が奥深く法界に広く遍満しているという意味は、すなわち前に説いたことと総じて共に包含している法門（教え）である。つまり、通して「三十二法門」に「不二摩訶衍法」を加えた三十三種の根本的な數の法門を包摂しているからである。この意味はどういう意味かと言うと、今言う諸仏とは、すなわち「不二摩訶衍」の法門の仏のことである。なぜならば、この機根・相對關係を超えた絶対の「不二摩訶衍法」を「三十二法門」の仏と比較すると、仏徳がずっと勝れているからであり、『大本華嚴經』のなかに次のように説かれている。「円融無礙の妨げなき大海のような広く深い仏徳を持つ（「不二摩訶衍法」のレベルの）諸仏は勝れていて、「三十二法門」の真如・生滅兩門のレベルにある一切の仏は円融無礙の妨げなき大海のような仏徳を成就することができない。また劣っているからである」と。（問う）「もしそうならば、どうして『六十華嚴經』のなかにこのようなことを説くのか。（華嚴の教主）「盧舍那仏」は

三種世間をその身体とし心としている。（だから）三種世間はあらゆる教法を包含して余りがない。「盧舍那仏」の身心もまた、包含しないものはない」と。（答う）「盧遮那仏」は三世間を包含するといつても、生滅の世界の仏は包摂するが、真如の仏は包摂しないから、まちがってはいない」と。

【原文】

喩曰。所謂不二摩訶衍及圓圓海德諸佛者即是自性法身。是名祕密藏。亦名金剛頂大教王。等覺十地等不能見聞故得祕密號。具如金剛頂經說

【書き下し】

喩して曰わく、「所謂不二摩訶衍及び圓圓海德諸佛とは、即ち是れ自性法身なり。是れを祕密藏と名づく。亦た金剛頂大教王と名づく。等覺・十地等、見聞すること能わざるが故に、祕密の號を得。具には金剛頂經に説くが如し」と。

【註記】

①自性法身…受用身・變化身などあらゆる仏身の本性・本源の仏身。常住不變の法性身。

【私訳】

喩えて言えば、「いわゆる「不二摩訶衍」とか円融無礙の妨げなき大海のような仏徳を持つ諸仏とは、（私が言う）自性法身である。これを祕密藏と言ひ、また金剛頂大教王とも言ふ。「等覺」や「十地」の境地にある菩薩でも、見聞することはできないから、祕密という名号を得ている。具体的には『金剛頂經』に説かれている通りである」と。

○華嚴宗論章引証喻釈段

【原文】

華嚴五教第一卷云。今將開釋迦佛海印三昧一乘教義略作十門。初明建立一乘者。然此一乘教義分齊開爲二門。一別教二同教。初中亦二。一是性海果分。當是不可說義。何以故。不與教相應故。即十佛自境界也。故地論云因分可說果分不可說者是也。二是緣起因分即普賢境界也。

【書き下し】

華嚴五教の第一卷に云わく、「今、將に釋迦佛の海印三昧、一乘教義を開かんに、略して十門を作る。初めに建立一乘を明さば、然も此の一乘教義の分齊を開いて二門と爲す。一に別教、二に同教なり。初の中に亦た二なり。一に是れ性海果分、是れ不可說の義に當る。何を以つての故に。教と相應せざるが故に。即ち十佛の自境界なり。故に地論に「因分は可說にして、果分は不可說なり」と云うは是れなり。二に是れ緣起因分は即ち普賢の境界なり」と。

【註記】

①華嚴五教…『華嚴五教章』。中国華嚴宗の第三祖・法蔵の華嚴論書。

②海印三昧…前述。

③建立一乘…華嚴教義を打ち立てる。

④性海果分…あらゆるものが互いに妨げなく交じり合つて円融無礙の大海のようなサトリの境地。

⑤十佛…華嚴の二種十仏説。華嚴の教義を實踐中の「行境の十仏」と、サトリを得た「解境の十仏」（松長有慶『訳注 弁頭密二教論』）。具には「無著仏」「願仏」「業報仏」「持仏」「涅槃仏」「法界仏」「心仏」「三昧仏」「性仏」「如意仏」。

⑥地論…世親の『十地経論』。

⑦因分は可説にして、果分は不可説なり…菩薩行に励む修行位は言語で説くことができるが、サトリの境地は言語で表現できない。

⑧縁起因分…言語によつては表現できないサトリの境地を世間の縁起生によつて説くこと。

【私訳】

中国華嚴宗の第三祖・法蔵の『華嚴五教章』の第一巻に説く、「今まさに釈尊の姿になった盧遮那仏が、あらゆるものが互いに妨げなく交じり合つて円融無礙の大海のような境地（海印三昧）に入つて、華嚴一乗の教義を開説するのに、略して十種の法門がある。初めに華嚴教義を打ち立てることを明かせば、それもまた、この華嚴教義の内容を開説するに二種の法門がある。一つは三乗を超えたすぐれた教義（別教）と、二つ目は三乗と共通する教義（同教）である。別教にまた二種ある。一つ目は性海果分で、あらゆるものが互いに妨げなく交じり合つて円融無礙の大海のようなサトリの境地。これは言語では表現できないという意味である。なぜかならば、言語による教法の次元ではないからである。すなわち（盧遮那仏の）十仏自らの境地である。だから『十地經論』に「因分は可説にして、果分は不可説なり」と説いている。二つ目は縁起因分で、言語によつては表現できないサトリの境地を世間の縁起生によつて説くことがあるという意味である。それは華嚴の修行位（因分）にある普賢菩薩の境地である」と。

【付記】

ここから、いわゆる華嚴・天台・法相・三論の「四家大乘」を論拠に顕密のちがいを説く。先ず最初に華嚴で、中国華嚴宗の第三祖法蔵の『華嚴五教章』を論拠に、「海印三昧一乗教」（「華嚴の仏一乗教」）を開説すれば「十門」あり、その第一の「建立一乗」を開けば「別教」「同教」があり、その「別教」一乗をひらくと「性海果分」「縁起因分」があり、そのうちの「性海果分」こそが華嚴の教主盧遮那仏の自内証であり、それは教説（言語）で表現できない、すなわち「果分不可説」で

あると説く。

【原文】

又中卷十玄縁起無礙法門義云。夫法界縁起乃自在無窮。今以要門略攝爲二。一者明究竟果證義。即十佛自境界也。二者隨縁約因辯教義。即普賢境界也。初義者圓融自在一切一切即一。不可說其狀相耳。如花嚴經中究竟果分國土海及十佛自體融義等者即其事也。不論因陀羅及微細等。此當不可說義。何以故。不與教相應故。故地論云因分可說果分不可說者即其義也。

【書き下し】

又、中卷の「十玄縁起無礙法門義」に云わく、「夫れ、法界の縁起は乃ち自在無窮なり。今、要門を以つて略攝して二と爲す。一には究竟果證の義を明かす。即ち十佛の自境界なり。二には縁に隨縁約因の教義を辯ず。即ち普賢の境界なり。初めの義は、圓融自在にして一切一切、一切即一なり。其の状相を説くべからず。花嚴經の中の究竟果分の國土海及び十佛の自體融義等の如きは、即ち其の事なり。因陀羅及び微細等を論ぜず。此れ不可説の義に當る。何を以つての故に。教と相應せざるが故に。故に地論に因分可説・果分不可説と云うは、即ち其の義なり」と。

【註記】

- ① 十玄縁起無礙法門…「因陀羅網境界門」などを説く、法藏の代表的な華嚴思想。「十玄縁起」「十玄門」。
- ② 一切一切、一切即一…一のものが一切のものに含まれ、一切のものが一つのものに包摂される「相即相入」の関係。
- ③ 自體融義…十仏それぞれ自身の円融無礙の境地。
- ④ 因陀羅…ヒンドウのインドラ天が発する稲光の電光。仏教に転じて、帝釈天の宮殿を飾る網状の宝飾。

【私訳】

また、『華嚴五教章』中巻の「十玄縁起無礙法門義」に説く、「そもそも、法界縁起はあらゆるものが妨げなく交じり合つて円融自在にして窮まりがない。今、要約し簡略にすべてを含んでそれを説くと二通りある。一つには究極のサトリの果分の境地（「究竟果證」）を明かす。すなわち十仏自らの境地である。二つには世間の縁起生によつて華嚴教義を論じる。すなわち菩薩行に励む普賢菩薩の境地である。最初の内容は、あらゆるものが妨げなく交じり合つて円融自在にして、一は即ち一切、一切は即ち一である。その在り様は言語では表現できない。『華嚴經』ではこれを、究極のサトリの境地における仏国土及び十仏それ自身の円融無礙の境地は、そのことである。（それは）帝釈天の宮殿を飾る宝飾の網の喩えでも、極めて微細な毛孔に三千世界が詰まつている喩えによつても、言語では語ることはできない。これは不可説の意味である。なぜかと言うと。言語による教法と次元を異にするからである。だから、『十地經論』に「因分は可説にして、果分は不可説なり」と説くのは、この意味である」と。

【付記】

続いて、『華嚴五教章』の「十玄縁起無礙法門義」が説く「法界縁起」に「究竟果證」（十仏を具有する盧遮那仏の自内証の境地）と「隨縁約因」（機縁に随ひ修行位に集約して法を説く境地）の二つがあり、そのうち「究竟果證」は言語では表現できない「果分不可説」であり、「一即一切」「一切即一」の相即相入の法性法界であると。

【原文】

問。義若如是何故經中乃說佛不思議品等果耶答。此果義是約縁形對爲成因故說此果。非據究竟自在果。所以然者爲不思議法品等與因位同會而說故。知形對耳。又云問。上言果分離縁不可説相但論因分者。何故十信終心即辯作佛得果法也答。今言作佛者。但初從見聞已去。乃至第二生即成解行。解行終心因位窮滿者。於第三生即得彼究竟自在圓融果矣。由此因體依果成故。

但因位滿者勝進即沒於果海中。爲是證境界故不可說耳

【書き下し】

問う、「義、若し是くの如くならば、何の故に經の中に乃ち佛不思議品等の果を説くや」と。答う、「此の果の義は、是れ縁に約して、形對して因を成ぜんが爲の故に、此の果を説く。究竟自在の果に據るに非ず。然る所以は不思議法品等は因位と同會にして説くが爲の故に。知りぬ、形對するのみ」と。又、云わく、問う、「上に果分は縁を離れて不可說の相なり、但し因分を論ずと言うは、何の故に十信の終心に即ち作佛得果の法を辯ずるや」と。答う、「今、作佛と言うは、但し初め見聞從り已去、乃し第二生に至つて即ち解行を成じ、解行の終心に因位窮滿する者、第三生に於いて即ち彼の究竟自在圓融の果を得。此の因の體は果に依つて成ずるに由るが故に、但し因位の滿ずる者は勝進して即ち果海の中に沒す。是れ證の境界爲るが故に不可說なるのみ」と。

【註記】

- ①佛不思議品等…『華嚴經』の「仏不思議法品」「如來十身相海品」「如來隨好光明功德品」「普賢行願品」「如來出現品」。
- ②形對…對比、比べる。
- ③究竟自在の果…相即相入自在の究極のサトリの境地。
- ④同會…同じ會座。
- ⑤十信の終心…菩薩行の最初の「十信」のうち最後の「信心」。

⑥ 作佛得果…作仏は「仏と作（な）る」＝「成仏」。「得果」はサトリの境地を得ること。

⑦ 解行…思考による仏法理解と菩薩行。

⑧ 果海…果位。究極のサトリの境地。

【私訳】

問う人が言うに、「そういう意味ならば、なぜ『華嚴經』「仏不思議法品」などにサトリの境地（仏果）を説くのか」と。答えて言うに、「このサトリの境地（仏果）の意味は、機縁（菩薩の機根の優劣）に応じ、それを対比して修行位の報果が成ぜられることを表わすために、このサトリの境地（因分可説）を説いたのであり、究極の相即相入自在のサトリの境地（果分不可説）によって言ったのではない。そのわけは、「仏不思議法品」などは修行の段階（因位）を説く品（章）と同じ会座で説かれているからである。菩薩の機縁に対比して修行の報果が得られるだけであると私は思っている」と。

また、『華嚴五教章』巻中「十玄縁起無礙法門義」第三「諸法相即自在門」に説くに、問う、「前に言ったサトリの境地は、相対的な因縁関係を離れ、言語では表現できない境地である。なのに、相対的な修行の報果を論じているに過ぎないと言うのなら、どうして「十信」の最後の「信心」の段階（因分）で成仏しサトリを得ること（果分）を論じているのと同じではないか」と。答えて言うに、「今、成仏と言うのは、この世で初めて仏法を見聞してから、次に生まれた第二生で思考による仏法理解と修行を成就し、その最後の修行の段階で修行位を成満した者が、次に生まれた第三生において、あらゆるものが相即相入自在であり、妨げなくかわり合っている究極のサトリの境地を得ることである。この修行位の本性は修行の結果サトリの報果に顕われるのであるから、修行位を成満してさらに勝進する者だけが究極のサトリの境地に没入する。これは修行位の相対関係を超えた境地であるから、言語では説くことができないのである」と。

【原文】

喩曰。十地論及五教性海不可説文。與彼龍猛菩薩不二摩訶衍圓圓性海不可説言懸會。所謂因分可説者顯教分齊。果性不可説即是密藏本分也。何以知然。金剛頂經分明説故。有智者審思之

【書き下し】

喩して曰わく、「十地論及び五教の性海不可説の文と、彼の龍猛菩薩の不二摩訶衍の圓圓性海不可説の言と、懸はるかに會かなえり。謂わゆる、因分可説とは顯教の分齊、果性不可説は即ち是れ密藏の本分なり。何を以つてか然るを知るとならば、金剛頂經に分明に説くが故に、有智の者は審かに之を思え。

【私訳】

喩して言うに、「『十地經論』及び『華嚴五教章』の法性の果海（究極のサトリの境地）は言語で説くことができないという文と、龍猛菩薩（『釈摩訶衍論』）の「不二摩訶衍」の円融無礙の妨げなき大海は不可説であるという論と、その立場は遠く離れていても意味は一致している。すなわち、修行位の境地は言語で説くことができる（因分可説）とは顯教のレベルであり、サトリの境地は言語では表現できない（果性不可説）とは密教のレベルである。なぜと言え、『金剛頂經』に明らかに説かれているからで、智慧ある者は詳しくこれを考えるべきである」と。

【付記】

華嚴の最後で、これまでに引証とした『華嚴五教章』などの「性海不可説」や『釈摩訶衍論』の「不二摩訶衍」、すなわち「果分不可説」は密教のレベルであると。

○天台宗論疏引証喻釈段

【原文】

天台止觀第三卷云。此三諦理不可思議無決定性實不可說。若爲緣說不出三意。一隨情說即隨他意語二隨情智說即隨自他意語三隨智說即隨自意語云何隨情說三諦。如盲不識乳爲說具絛雪鶴四譬。四盲各各作解執起四諍。凡情愚翳亦復如是。不識三諦大悲方便而爲說有門空門空有門非空非有門。是諸凡夫終不能見常樂我淨眞實之相。各執空有互相是非如彼四盲所以常途解二諦者二十三家。家家不同各各異見執自非他。雖飲甘露傷命早夭云云

【書き下し】

天台止觀の第三卷に云わく、「此の三諦の理は、不可思議にして決定の性無し。實に不可說なり。若し縁の爲に說かば三つの意を出ず。一つは隨情說、即ち隨他意語なり。二つは隨情智說、即ち隨自他意語なり。三つは隨智說、即ち隨自意語なり。云何が隨情說の三諦とならば、盲の乳を識らざれば、爲に具・絛・雪・鶴の四つの譬えを說くに、四盲各々に解を作して、執して四つの諍いを起すが如く、凡情の愚翳ぐえいも亦た復た是くの如し。三諦を識らざれば大悲方便もて爲に有門・空門・空有門・非空非有門を說く。是の諸々の凡夫、終に常・樂・我・淨の眞實の相を見ることが能わず。各々空有に執し互相に是非すること彼の四盲の如し。所以に、常途じょうつに三諦を解する者は二十三家なり。家家不同にして各々に異見し自に執して他を非す。甘露を飲むと雖も命を傷つけて早く夭えいず」と云々。

【註記】

①天台止觀…天台宗の開祖・智者大師智顗の『摩訶止觀』。インド中觀派の龍樹が説いた「空・仮・中」の「三諦」を凡夫・

衆生の日常心（一心）に観じる慧文の「一心三觀」をもとにした「一念三千」を説く。一念は凡夫・衆生の日常心。三千は「六道」に「声聞」「縁覺」「菩薩」「仏」の「十界」が各々他の九界を含んで「百界」。その「百界」に「相如是」「性如是」「体如是」などの「十如是」があつて「千界」。その「千界」が三種世間ごとにあつて「三千」。

②三諦：龍樹の『中論』に説かれる「空・仮・中」の「三諦」。

③隨情説：聞く人の宗教的な心情に従つて説く方法。

④隨智説：聞く人の宗教的な心情に従いつつ、自己のサトリの智慧まで導く方法。

⑤隨智説：自己のサトリの智慧まで導く方法。

⑥貝・糝・雪・鶴：牛乳の色の譬え。

⑦愚翳：愚かで陰りがある人。

⑧有門・空門・空有門・非空非有門：諸法は「有」、諸法は一切「空」、「空有」の「仮」、「非空非有」の「中」。

【私訳】

天台大師智顗の『摩訶止觀』第三卷に説くに、「この「空・仮・中」の「三諦」、すなわち諸法は無自性・「空」であるという「空諦」、諸法は縁起によつて生じ、言葉によつて名づけられはじめて存在たり得る仮構という意味で「仮諦」、仮構であるから「有」のでもなく「無」いのでもない「中諦」は、通常の思考では理解できないもので、決つた本性があるわけでもなく、言語では表現できない。もし、機縁に応じてこれを説くとすれば三つの説を出ない。一つは聞く人の宗教的な心情に従つて説く隨情説（隨他意語）。二つは聞く人の宗教的な心情に従いつつ、自己のサトリの智慧まで導く隨智説（隨自他意語）。三つは自己のサトリの智慧まで導く隨智説（隨自意語）である。

隨情説の「三諦」はどうかと言うと、例えば、牛乳を知らない盲者のために、貝や米粉や雪や鶴といった譬えを説いても、四種をそれぞれに盲者は解釈し、それに執着して四つの争いことを起すように、凡夫の愚かで陰りがある人もこれと同じで

ある。「三諦」を知らないので、大悲方便によって、諸法は「有」、諸法は一切「空」、「空有」の「仮」、「非空非有」の「中」が説かれたのである。（これに對し）これらの凡夫は、いつになつても、この現象世界は「無常」ではなく「常」、「苦」ではなく「樂」、「無我」ではなく「我」、「不淨」ではなく「淨」だという眞實の眞相を見ることができず、それぞれに「空有」の仮構に執着し、お互いに肯定否定すること四盲の如しである。であるから、通常、「空諦」「仮諦」の二諦を理解する論者は二十三である。それぞれの論者がそれぞれに異なる見解を主張し自説に執着して他説を非難している。甘露水（正しい教え）を飲む（修得する）といつても、命を傷つけて早逝するようなものである」と云々。

【付記】

「四家大乘」の二番目の天台である。天台を代表する天台大師智顗の『摩訶止観』をもとに、インド中観派の龍樹が『中論』で説いた「空・仮・中」を「隨情説」「隨情智説」「隨智説」の説き方で説く。

先ず最初の「隨情説」では、愚迷の凡夫・衆生は「三諦」の眞實相がわからないので、大悲方便によつて變えて仮に「諸法は「有」、諸法は一切「空」、「空有」の「仮」、「非空非有」の「中」と説くが、みな自説に執着していると言う。

【原文】

隨智説三諦者、從初住去非但說中絶於視聽。眞俗亦然。三諦玄微唯智所照。不可示不可思。聞者驚怪。非内非外非難非易。非相非非相非是世法無有相貌。百非洞遣四句皆亡。唯佛與佛乃能究盡。言語道斷、心行處滅。不可以凡情圖想。若一若二皆絶情望尚非二乘所測。何況凡夫。如乳眞色眼開乃見。徒費言語盲終不識。如是說者名爲隨智説三諦相。即是隨自意語也

【書き下し】

「隨智説の三諦とは、初住従り去、但し中を説くに視聽を絶するのみに非ず。眞と俗も亦た然り。三諦は玄微にして唯だ智の照らす所なり。示すべからず、思ふべからず。聞く者驚き怪しまん。内に非ず外に非ず、難に非ず易に非ず。相に非ず非相に非ず。是れ世法に非ず、相貌有ること無し。百非洞遣し四句皆亡す。唯だ佛と佛のみ乃し能く究盡す。言語道斷し心行處滅す。凡情を以つて圖り想うべからず。若しは一、若しは三、皆情望を絶つ。尚し二乗の測る所に非ず。何ぞ況んや凡夫をや。乳の眞色を眼開けて乃ち見、徒に言語を費すも、盲終に識らざるが如し。如是くの如くの説を、名づけて隨智説の三諦の相と爲す。即ち是れ隨自意語なり」と。

【註記】

- ①初住従り去…菩薩の修行位「十住」の初地「灌頂住」から五十二位の「妙覺」まで。
- ②玄微…意味が深遠で微妙。
- ③百非洞遣…百回否定して拒否する。
- ④四句…「有」「無」「一」「異」。

【私訳】

「隨智説の「三諦」と言うのは、菩薩の修行位「十住」の初地「灌頂住」から五十二位の「妙覺」までの段階で、「非有非空」の「中」を説くのに見たり聞いたりを超えているだけでなく、真・すなわち「空」も、俗・すなわち「仮」も同様に言語を超えている。「三諦」は、意味が深遠で微妙であり、ただ仏智のみが照ら出せるものである。仏以外に明示できないし、考えることもできない。聞く人は驚いて怪しむにちがいない。心中にも心外にもなく、（理解が）難しいとか易しいというものでもなく、姿・かたちを持っているのでもなく、姿・かたちを持っていないのでもない。これ世間の理法ではなく目に見える

ものでもない。百回否定して（言語表現を）拒否し（百非洞遣）、「有」「無」「一」「異」の四句（言語表現）もみな消滅する（四句皆亡）。ただ仏と仏の間のみ（唯仏与仏）が究め尽くせる境地（乃能究盡）で、言語で表現することはできず（言語道断）、心のはたらきもみな消滅する（心行処滅）。凡夫・衆生などが意図して考えることもできない。もし「中」の一であっても、「空・仮・中」の三であっても、みな凡夫・衆生の情欲（我執）を超えている。ましてや「声聞」「縁覺」二乗も推し測ることはできない。どうして凡夫・衆生にできようか。牛乳のほんとうの色を目を開けて見、やたらコトバを勞したとて、盲者はとうとう知らずに終わるのと同じである。このような説を、隨智説の「三諦」の様相と言う。すなわち、これが隨自意語である」と。

【付記】

二番目の「隨情智説」は省略されている。「空・仮・中」の「三諦」は「言語道断」で言語表現を超えているという。

【原文】

喩曰。此宗所觀不過三諦。一念心中即具三諦。以此爲妙。至如彼百非洞遣四句皆亡。唯佛與佛乃能究盡。此宗他宗以此爲極。此則顯教關楔。但眞言藏家以此爲入道初門不是祕奧。仰覺薩埵不可不思

【書き下し】

喩して曰わく、「此宗の所觀は三諦を過ぎず。一念の心中に即ち三諦を具す。此れを以つて妙と爲す。彼の百非洞遣・四句皆亡・唯佛與佛・乃能究盡の如くに至つては、此宗・他宗。此れを以つて極と爲す。此れ則ち顯教の關楔^{かんけつ}なり。但し眞言藏家

には此れを以つて入道の初門と爲す。是れ祕奥ならず。仰覺ぎようかくの薩埵、思わざるべからず。

【註記】

- ①一念の心中に即ち三諦を具す..
- ②關楔..關はかんぬき、楔はくさび。要所・要点・要件。
- ③仰覺の薩埵..

【私訳】

喩して言うに、「この天台宗の見所は「三諦」を超えず、凡夫・衆生の日常の一念のなかに「空・仮・中」という三つの真実「三諦」が具わっているということにある。これを妙境と言う。今述べた「百非洞遣」「四句皆亡」「唯佛與佛」「乃能究盡」を、天台とその他の宗では究極とする。頭教の要点である。しかし、真言宗では入門初期である。これは秘奥ではないからである。サトリを求めて修行する凡夫・衆生は、よくよく考えておくべきである」と。

【付記】

『摩訶止観』に説かれる隨智説の「三諦」（「言語道断」）を「果分不可説」と見て、宗祖大師は真言の入門初期だと認めた。ただこの程度の「三諦」の論述では、中観派（三論）が説く「三諦」と天台智顗が言う「三諦」のどこがちがうのか、『中論』の研究者や天台教学の専門家から見ると首をかしげるかもしれない。天台の「一心三観」や「一念三千」はどこにいったのかも、宗祖大師に聞いてみたい。

○『楞伽經』引証喻釈段①

【原文】

楞伽經云。佛告大惠。我爲曾行菩薩行諸聲聞等依無餘涅槃而與授記。大惠我與聲聞授記者。爲怯弱衆生勇猛心。大惠此世界及餘佛國。有諸衆生行菩薩行而復樂聲聞法行。爲轉彼心取大菩提。應化身佛爲應化聲聞授記。非報佛法身佛而授記別

【書き下し】

楞伽經に云わく、「佛、大惠に告ぐ。「我、曾、菩薩行を行ぜし諸聲聞等の無餘涅槃に依るが爲に、而も授記を與う。大惠、

我、聲聞に授記を與うるは、怯弱の衆生に勇猛心を生ぜんが爲なり。大惠、此の世界中及び餘の佛國に、諸々の衆生、菩薩行を行じて復た聲聞法の行を樂うもの有り。彼の心を轉じて大菩提を取らんが爲なり。應化身の佛、應化の聲聞の爲に授記す。報佛・法身佛にして記別を授くるに非ず」と。

【註記】

①楞伽經…『楞伽經』。唯識説を説くが世親などのインド大乘の唯識説と異なるところがある。特徴的なのは、アーラヤ識と如来蔵を同一視するなど、唯識と如来蔵を融合させていることである。その際、声聞と大乘を一貫して区別している。

漢訳に『楞伽阿跋多羅宝經』（求那跋陀羅訳）・『入楞伽經』（菩提流支訳）・『大乘入楞伽經』（実叉難陀訳）の三本があり、サンスクリット原典には南條文雄博士校訂の『梵文入楞伽經』がある。

②大惠…説法会座で聴衆の首座・上首・代表。大徳。

③無餘涅槃…煩惱から生理的欲求まですべてが生滅したサトリの境地。

④授記…仏が弟子の成仏について予め詳しく書き記すことを「記別」と言い、「記別」を弟子に授与すること。

⑤怯弱…臆病。

⑥勇猛心…サトリを求めて励む心。

⑦記別…④に前述。

【私訳】

（声聞と大乘を一貫して区別する）『入楞伽經』（菩提流支訳）に説くに、「仏が会座の上首（大恵）に告げて言うに、「私は昔、すでに大乘の菩薩として菩薩行を行じながら、姿は小乗の声聞となつてゐる応化の声聞が、煩惱も生理的欲求も消滅したサトリの境地（無余涅槃）を願つてゐるので、それで彼らの成仏を予め詳しく書き記し（「記別」、それを授与（授記）した。大恵よ、私が小乗の声聞に（本来やるべきでない）「授記」を与えたのは、意志薄弱な凡夫・衆生にサトリを求めて励む心（勇猛心）を起すためであつた。大恵よ、この世界中あるいは他の仏国土に、諸々の凡夫・衆生のなかに、大乘の菩薩行を行じながら小乗の声聞の教法の修行を願う者がゐるので、彼らの心を転換して大いなるサトリが得られるようにするためである、応化身の仏が、応化身の声聞のために「授記」を授けるのであつて、報身の仏や法身の仏が「記別」を授けるのではない」と。

【原文】

喩曰。依此文法華經者是應化佛所説。何以故。爲應化聲聞等佛授記別故。或者談法身説。甚誣罔而已。

【書き下し】

喩して曰わく、「此の文に依らば、法華經は是れ應化佛の所説なり。何を以つての故に。應化の聲聞等の爲に、佛記別を授く

るが故に。或る者、法身の説と談ず。甚だ誣罔なるのみ。

【私訳】

喩して言うに、「この（『入楞伽經』）文によれば、『法華經』は応化の仏の所説である。なぜかと言えば、『法華經』「授記品」に）姿を声聞に変えた弟子たちに釈尊が「記別」を授けているからである。ある人は、法身の説と言うが、甚だしいつわりである」と。

【付記】

『入楞伽經』「變化品」が説く仏の「授記」は応化身の仏の大悲方便によるもので、法身の説法ではないこと。それは『妙法蓮華經』「方便品」に説かれる釈尊の弟子に対する「授記」と同じで、応化身の慈悲行であると言う。すなわち、『法華經』一乗を説く天台は応化身の仏が説く顕教であると言うのである。

○法相宗論章引証喩釈段

【原文】

慈恩法師二諦義云。瑜伽唯識二諦各有四重。世俗諦四名者。一世間世俗諦亦名有名無實諦二道理世俗諦亦名隨事差別諦三證得世俗諦亦名方便安立諦四勝義世俗諦亦名假名非安立諦勝義諦四名者。一世間勝義諦亦名體用顯現諦二道理勝義諦亦名因果差別諦三證得勝義諦亦名依門顯實諦四勝義勝義諦亦名廢詮談旨諦前三種名安立勝義諦。第四一種非安立勝義諦。又云。勝義勝義者。體妙離言迥超衆法名爲勝義。聖智內證過前四俗復名勝義諦。又云。第四勝義勝義諦者。謂非安立廢詮談旨一眞法界也。

【書き下し】

慈恩法師の「二諦義」に云く、「瑜伽・唯識の二諦に各々四重有り。世俗諦の四名とは、一つに世間世俗諦、亦た有名無實諦と名づく。二つに道理世俗諦、亦た隨事差別諦と名づく。三つに證得世俗諦、亦た方便安立諦と名づく。四つに勝義世俗諦、亦た假名非安立諦と名づく。勝義諦の四名とは、一つに世間勝義諦、亦た體用顯現諦と名づく。二つに道理勝義諦、亦た因果差別諦と名づく。三つに證得勝義諦、亦た依門顯實諦と名づく。四つに勝義勝義諦、亦た廢詮談旨諦と名づく。前の三種を安立勝義諦と名づく。第四の一種は非安立勝義諦なり」と。又、云く、「勝義勝義とは、體妙離言にして迥かに衆法を超えたるを名づけて勝義と爲す。聖智の内證にして前の四俗に過ぎたるを復た勝義諦と名づく」と。又、云く、「第四の勝義勝義諦とは、謂わく非安立・廢詮談旨・一眞法界なり」と。

【註記】

①慈恩法師：中国法相宗の初祖・慈恩大師窺基。『成唯識論述記』『瑜伽論略纂』『大乘法苑義林章』『因明入正理論疏』などの注釈がある。

②「二諦義」：『大乘法苑義林章』卷二の「二諦義章」。

③世間世俗諦：我執に染まる世法に執着する人間の経験世界という真実理。

④有名無實諦：無実体・「空」で、存在するものはみな仮名に過ぎないという真実理。

⑤道理世俗諦：「五蘊」「六根」「十二処」「十八界」など因縁所生の法を説いて、相對二項の差別に凡夫・衆生が執着していることを明かす真実理。

⑥隨事差別諦：⑤に同じ。

⑦證得世俗諦：「苦」「集」「滅」「道」の「四諦」。

⑧方便安立諦…「苦」「集」「滅」「道」が凡夫・衆生をサトリに導く方便だという真実理。

⑨勝義世俗諦…「人法」「空」など無自性・「空」を説くが、仮構の表現で実体がないことを明かす真実理。

⑩假名非安立諦…⑨に同じ。

⑪世間勝義諦…人間の経験世界を無自性・「空」と見る真実理。

⑫體用顯現諦…無自性・「空」でも、有名無実ではなく体・用が現に顯われているという真実理。

⑬道理勝義諦…「苦」「集」「滅」「道」と「知」「斷」「証」「修」の因果差別相を明かす真実理。

⑭因果差別諦…⑬に同じ。

⑮證得勝義諦…⑨に同じ。

⑯依門顯實諦…⑨に同じ。

⑰勝義勝義諦…本源的に言語を超えていて、はるかに凡夫・衆生の世法を超え、仏の内証智であり前の四つの世俗諦を超えている真実理。

⑱廢詮談旨諦…相対的な詮議をやめて真如の本源が説かれるという真実理。

⑲體妙離言…本源的に言語を超えている。

⑳一眞法界…唯一絶対の眞実の法性世界。

【私訳】

中国法相宗の初祖・慈恩大師窺基の、『大乘法苑義林章』卷二の「二諦義章」に説くに、『瑜伽師地論』『成唯識論』が説く「世俗諦（俗諦）」と「勝義諦（真諦）」の（「真俗」二諦）にそれぞれ四種がある。（そのうち）世俗諦の四つの名は、一つに「世間世俗諦」、「有名無實諦」とも言う。二つに「道理世俗諦」、「隨事差別諦」とも言う。三つに「證得世俗諦」、「方便安立諦」とも言う。四つに「勝義世俗諦」、「假名非安立諦」とも言う。勝義諦の四つの名は、一つに「世間勝義諦」、「體用

顯現諦」とも言う。二つに「道理勝義諦」、「因果差別諦」とも言う。三つに「證得勝義諦」、「依門顯實諦」とも言う。四つに「勝義勝義諦」、「廢詮談旨諦」とも言う。前の三種を「安立勝義諦」と言い、第四の一種を「非安立勝義諦」と言う」と。また、説くに、「勝義勝義」というのは、本源的に言語を超えていて（體妙離言）、はるかに凡夫・衆生の世法を超えているのを勝義と言う。仏の内証智であり前の四つの世俗諦を超えているのをまた勝義諦と言う」と。また、説くに、「第四の勝義勝義諦というのは、言語を離れ、主觀客觀を離れ、靜寂無為（非安立）であり、相対的な詮議をやめて真如の本源が説かれる（廢詮談旨）、唯一絶対の眞實の法性世界（一眞法界）である」と。

【原文】

喩曰。此章中勝義勝義廢詮談旨聖智內證一眞法界體妙離言等。如是絶離即是顯教分域。言因位人等四種言語皆不能及。唯有自性法身以如義眞實言能説是絶離境界。是名眞言祕密教。金剛頂等經是也

【書き下し】

喩して曰わく、「此の章中の勝義勝義・廢詮談旨・聖智內證・一眞法界・體妙離言等は、是くの如くの絶離は即ち是れ顯教の分域なり。言わく、因位に人等の四種の言語、皆及ぶこと能わず。唯だ自性法身のみ有つて、如義眞實の言を以つて能く是れ絶離の境界を説く。是れを眞言祕密の教と名づく。金剛頂等の經、是れなり。

【私訳】

喩して言うに、「この『二諦義章』のなかに説かれる「勝義勝義」「廢詮談旨」「聖智內證」「一眞法界」「體妙離言」などは、このような絶離はすなわち、顯教の次元である。いわば、修行位にある人たちの「無始言語」「相言語」「夢言語」「執着言語」の四種の言語はみな言い表すことができない。ただ、自性法身のみが、（第五の）「如義眞實の言語」によつてよくこの絶離

の境界を説くことができる。これを真言秘密教と言う。『金剛頂経』などの経がそれである。

【付記】

宗祖大師は、法相宗の論拠として、インド大乘の唯識論ではなく、中国法相宗の『大乘法苑義林章』（窺基）の「二諦義」が説く「真俗二諦」の四重解釈を用い、最上の「勝義勝義諦」も顕教のレベルだとした。しかし、宗祖大師には恐縮至極ながら、「真俗二諦」はインド中観派（龍樹の『中論』ほか）や中国三論宗のテーマであり、インド瑜伽行唯識派・中国法相宗の主テーマはアーラヤ識をはじめとする「有と無との対論」である。ここは、例えば世親の『唯識三十頌』『三性論』『中辺分別論』『大乘莊嚴經論』の「三性」とか、『解深密経』の「三無性」とか、「有相唯識」「無相唯識」とか、『大乘起信論』が説くアーラヤ識の和合識のようなことが説かれるべきではなかったか。応化仏によって世俗の言説で説かれる顕教の同じ次元の議論なのだから。

○三論宗論釈引証喩釈段

【原文】

智度論第五云。不生不滅不斷不常不一不異不去不來。因縁生法滅諸戲論。佛能説是我今當禮。乃至諸法不生不滅非不生非不滅。非非不生滅亦非非不生滅。已得解脫非空非不空。如是等捨滅諸戲論。言語道斷深入佛法。心通無礙不動不退名無生忍。是助佛道初門又三十二云。復次離有爲則無無爲。所以者何。有爲法實相即是無爲。無爲相者則非有爲。但爲衆生顛倒故。分別説有爲相者生滅住異。無爲相者不生不滅不住不異。是爲入佛法之初門。

【書き下し】

智度論の第五に云わく、「不生不滅・不斷不常・不一不異・不去不來なり。因縁生の法は諸々の戲論を滅す。佛、能く是れを

説く。我、今、當に禮すべし。乃至、諸法は生ぜず滅せず、生ぜざるに非ず滅せざるに非ず。生滅せざるに非ざるに非ず、亦た生滅せざるに非ざるに非ざるに非ず。已に解脱を得たれば、空に非ず空ならざるに非ず。是くの如き等は諸々の戲論を捨滅し、言語道斷して深く佛法に入る。心通無礙にして不動不退なり、無生忍と名づく。むしようにん是れ助佛道の初門なり」と。又、三十一に云わく、「復た次に、有爲を離れて則ち無爲無し。所以は何とならば、有爲法の實相は即ち是れ無爲なり。無爲の相は則ち有爲に非ず。但し、衆生は顛倒するが爲の故に、分別して、有爲の相は生・滅・住・異、無爲の相は不生・不滅・不住・不異と説けり。是れを入佛法の初門と爲す」と。

【註記】

- ①智度論・龍樹の『大智度論』。『三万五千頌般若経』（『大品般若』）の注釈。
- ②不生不滅・不斷不常・不一不異・不去不來・龍樹の『中論』に説かれる「八不（中道）」。
- ③心通無礙・心中に妨げるものがなく円融無礙の境地。
- ④無生忍・「八不中道」の理を覺る智慧（松長有慶『訳注 弁頭密二教論』）。
- ⑤助佛道・仏道修行の助けとなる。
- ⑥生・滅・住・異・生・住・異・滅の「四相」。

【私訳】

龍樹の『大智度論』の第五に説くに、「諸法はすべからず（不生）滅せず（不滅）・斷たれず（不斷）常ならず（不常）・同一でもなく（不二）異なるのでもなく（不異）・行くのでもなく（不去）来るのでもない（不來）のである。因縁によつて生ずる（無自性・「空」の）諸法は、概念化された言葉の仮構（戲論）を否定する。仏はよくこのことを説かれた。私

は今、稽首礼せずにはいられない。すなわち、諸法は（それ自ら）生じることなく滅することなく、生じないものでもなく滅しないものでもない。生滅しないものでもなくはなし、生滅しないものでもなくはないでもない。すでに解脱を得ているから、空ではなく空ではなくもない。このような「八不（中道）」の境地は、概念化された言葉の仮構（戲論）を捨てて否定し、言語を断つて奥深い仏法の真実に迫る。心中に妨げるものがなく円融無礙の境地であり、動かず退かずの堅固な境地で、「八不中道」の理を覺る智慧（無生忍）とも言う。これは仏道修行の助けとなる最初の門である」と。また、同じく第三十一に説くに、「また次に、諸法が因縁によつて生滅する私たちの経験世界（有爲）を離れて因果律を超えたサトリの境地（無爲）はない。なぜならば、経験世界（有爲法）の真実の在り様は、因果律を離れたサトリの境地（無爲）にほかならない。（しかし）因果律を離れたサトリの境地（無爲）の在り様を経験世界（有爲）だと言っているわけではない。凡夫・衆生は逆さまにモノゴトを考えるから、区分けして、経験世界（有爲）の在り様は生・滅・住・異、サトリの境地（無爲）の在り様は不生・不滅・不住・不異と言っている。これを（密教の次元には及ばないが）仏道修行の最初の門とする」と。

【付記】

宗祖大師は、この三論宗の論拠にインド中観派の祖・龍樹の『大智度論』第五に説かれる「八不（中道）」を引いた。前段の法相の論拠にはインド大乘唯識派の論書ではなく中国法相宗の『大乘法苑義林章』を引きながら、この三論の論拠においては中国三論宗の嘉祥大師吉蔵の『三論玄義』や『大乘玄論』などではなくインド中観派の龍樹の論書を用いる。私はインド大乘の唯識・中観と中国仏教の法相・三論の根本的なちがいが気になるが、宗祖大師はそんなことには無関心のようにある。ちなみに、龍樹が説く「八不（中道）」は『中論』の冒頭に説かれたものがオリジナルで、『大智度論』のものは『中論』の引用である。

【原文】

龍猛菩薩般若燈論觀涅槃品頌云彼第一義中 佛本不說法

佛無分別者 說大乘不然 化佛說法者 是事則不然

佛無心說法 化者非是佛 於第一義中 彼亦不說法

無分別性空 有悲心不然 衆生無體故 亦無有佛體

彼佛無體故 亦無悲愍心

分別明菩薩釋云。此中明第一義者。一相故所謂無相。無佛亦無大乘。第一義者是不二智境界。汝說偈者正是說我佛法道理。今當爲汝說如來身。如來身者雖無分別。以先種利他願力。爲大誓莊嚴熏修故。能攝一切衆生。於一切時起化佛身。因此化身有文字章句次第出聲。不共一切外道聲聞辟支佛故。而爲開演二種無我。爲欲成就第一義波羅蜜故。爲欲成就最上乘者故。名爲大乘。有第一義佛故。依止彼佛而起化身。從此化身起於說法。由第一義佛爲說法因故。不壞我所立義。亦不壞世間所欲。又云。第一義中如幻如化。誰說誰聽。以是故如來無處所。無一法爲說。

【書き下し】

龍猛菩薩の般若燈論・觀涅槃品の頌に云わく、

「彼の第一義の中 佛は本より說法せず 佛は無分別にして 大乘を説くこと然らず

化佛の說法は 是の事則ち然らず 佛は心に說法無し 化は是れ佛に非ず

第一義の中に於いて 彼亦た說法せず 無分別性 空にして 悲心有ること然らず

衆生は無體の故に 亦た佛體有ること無し 彼の佛は無體の故に 亦た悲愍の心無し」と。

分別明菩薩の釋に云わく、「此の中に第一義を明かさば、一相の故に謂わゆる無相なり。佛無く亦た大乘も無し。第一義とは、

是れ不二智の境界なり。汝が説く偈は、正しく是れ我が佛法の道理を説く。今當に、汝の爲に如來の身を説くべし。如來身とは無分別なりと雖も、先に利他の願力を種えたるを以つて、大誓の莊嚴熏修するが爲の故に、能く一切の衆生を攝して、一切時に於いて化佛の身を起す。此の化身に因つて、文字章句有つて次第に聲を出す。一切の外道・聲聞・辟支佛と共にならざるが故に、而も爲に二種の無我を開演す。第一義波羅蜜を成就せんと欲するが爲の故に、最上乘者を成就せんと欲するが爲の故に、名づけて大乘と爲す。第一義の佛有るが故に、彼の佛に依止して化身を起す。此の化身従り説法を起す。第一義の佛、説法の因と爲るに由るが故に、我が所立の義を壞せず。亦た世間の所欲も壞せず」と。又、云わく、「第一義の中には、幻の如く化の如く、誰か説き誰か聽かん。是れを以つての故に如來は處所無し。一法爲に説くこと無し」と。

【註記】

①龍猛菩薩の般若燈論…伝統教学では、龍猛菩薩（おそらく真言付法の第三祖の龍猛ではなく、インド大乘中觀派の初祖・龍樹の意味）に十万頌の『大無畏論』があり、それから五百行の偈を取り出して解釈したものに青目の『中論』・無著の『順中論』（無著）・羅睺羅跋陀羅の『中論』・清弁（分別明）の『般若灯論』があり、その『般若灯論』の釈の本頌のことを指すと言う。

僭越ながら、『般若灯論』は正式名が『般若灯論釈 Prajñāpradīpa』で、インド大乘中觀派の初祖・龍樹の『中論』（正式には『根本中頌 Mūla-madhyamaka-kārikā』）を、同じ中觀派の論師清弁（Bhāva-viveka、分別明）が注釈したものである。

②頌…龍樹の『中論』にある偈。

③第一義…第一義諦・勝義諦。

④佛…法身。

⑤無體…実体がない。

⑥分別明菩薩…清弁論師。

- ⑦一相…相対的・二項対立のない一なる在り様。
- ⑧無相…相対的な二項の区別がない在り様。
- ⑨如來身…如來（法身）の身体。
- ⑩大誓…大誓願。
- ⑪二種の無我…「人法二空」。
- ⑫處所…說法処。
- ⑬一法…わずかな教法。

【私訳】

インド大乘中觀派の初祖・龍樹の『中論』を同じ中觀派の論師清弁（分別明）が注釈した『般若灯論釈』『觀涅槃品』の頌に説くに、

「このサトリの境地の真実理（第一義諦）において、法身仏はもともと説法をしない。

法身仏はモノゴトを相対・二項のように対立的に見ず（無分別）、大乘を説くこともない。

応化仏が大乘を説法するかと言うと、それはそうではない。法身仏は心に説法などなく、

応化仏は化身であって実身の仏ではない（から大乘を説くことはできない）。

サトリの境地の真実理（第一義諦）において、応化仏が説法することはない。

モノゴトを相対・二項のように対立的に見ず（無分別）、無自性・「空」であり、慈悲心も実体としてない。

凡夫・衆生は実体がないから、仏の実体もない。

この応化仏は実体がないから、悲愍の心も実体としてない」と（龍樹の『中論』に説く外道の説）。

清弁論師（分別明菩薩）の『般若灯論釈』に説くに、「この頃のなかの「第一義」という語を明かすと、相対的な二項対立のない一なる在り様であるから、相対的な二項の区別がない。生仏の仏もなく小乗大乘の大乘もない。第一義とは、不二の智慧の境地である。汝（外道の論師）が説く偈は、正しく私（清弁）の仏法の教理を説いている。今まさに、汝のために如来の身体について説こうと思う。如来の身体とは（真如をその身体とする法身で）相対的な二項対立を超えた境地であるが、修行の段階において利他の願力を身に植え付け、大誓願で身を飾って何度も熏じるから、一切の凡夫・衆生を接受し、あらゆる時に応化の仏身を現わす。この応化の仏身によって文字や章句を用い、次第に説法をするようになる。あらゆる外道・声聞・縁覚（辟支仏）と同じような（「空」の）説法ではなく、二種の無我（人法二空）を開陳する。（このように）第一義の彼岸の境地を（凡夫・衆生に）成就させようと願うから、最上の教えである大乘の成就させようと願うから、大乘と言うのである。相対的な二項の区別がない第一義の境地に法身仏がおられるから、その法身仏を依り所として応化の仏身を現わし、この応化の仏身によって説法を行うのである。（すなわち）第一義の法身仏を説法の拠り所とするから、私たちが主張する「人法二空」の教義を否定するのでもなく、外道など世間の依り所も否定するものではない」と。また、同じく「観邪見品」に説くに、「相対的な二項の区別がない第一義の境地は、幻や化物のようで実体がないから、誰が説き誰が聴くだろう。だから法身仏は説法する場所もないし、わずかな教法でも説くことはない」と。

【原文】

又観邪見品云。般若中説。佛告勇猛極勇猛菩薩。知色非起見處亦非斷見處。乃至受想行識非起見處亦非斷見處者。是名般若波羅蜜。今以無起等差別緣起令開解者。所謂息一切戲論及一異等種種見悉皆寂滅。是自覺法。是如虛空法。是無分別法。是第一義境界法。以如是等眞實甘露而令開解。是一部論宗

【書き下し】

又、觀邪見品に云わく、「般若の中に説く。「佛、勇猛極勇猛菩薩に告ぐ。「色は見を起す處に非ず、亦た見を斷つ處に非ず。乃至、受・想・行・識も見を起す處に非ず、亦た見を斷つ處に非ず」と知るは、是れを般若波羅蜜と名づく」と。今、起等の差別縁起無きを以つて開解せしむるは、所謂、一切の戲論及び一異等の種種の見を息めて悉く皆寂滅す。是れ自覺の法なり。是れ如虛空の法なり。是れ無分別の法なり。是れ第一義の境界の法なり。是くの如き等の眞實の甘露を以つて、開解せしむ。是れ一部の論宗なり」と。

【註記】

①般若…玄奘訳の『大般若經』六百卷。

②起等の差別縁起…執見を起す斷つといったちがいの因果關係。

【私訳】

また、同じく「觀邪見品」に説くに、『大般若經』のなかに（取意的に）次のように説かれている。「仏世尊が、勇猛菩薩や極勇猛菩薩に告げて言った。「物質的な現象態（色）は（本来「空」の故に）それへの執見を起す所ではなく、また、色への執見を斷つ所でもない。同じく、受も想も行も識も執見を起すところではなく、またそれらへの執見を斷つ所でもない」と知るのを、般若波羅蜜と言う」と。今、執見を起す斷つといったちがいの因果關係はないことを凡夫・衆生に開示してわからさせることは、一切の戲論や一と異などの相対的な執見をなくして、ことごとくすべてを寂靜で煩惱が滅した境地にする。これが自ら覺る教法であり、虚空のように広大で妨げのない教法であり、相対的な二項対立を超えた教法であり、相對關係を超えた唯一不二の境地（第一義）の教法である。このように、眞實の教法によつて、凡夫・衆生に開示し理解させるのが『大般若經』を説く一部の人たち（宗）である」と。

【原文】

喩曰。今依斯文。明知。中觀等息諸戲論寂滅絕離以爲宗極。如是義意皆是遮情之門。不是表德之謂。論主自斷入道初門。有意智者留心九思之。

【書き下し】

喩して曰わく、「今、斯の文に依らば、明らかに知りぬ。中觀等は諸戲論を息めて寂滅絶離なるを以つて宗極と爲す。是くの如きの義の意は、皆是れ遮情の門なり。是れ表德の謂ならず。論主自ら入道の初門と斷ず。意有る智者は心を留めて之を九思せよ。

【註記】

- ①中觀：中觀派。
- ②宗極：宗の究極。
- ③遮情之門：否定の法門。
- ④表德之謂：高低の説。
- ⑤九思：君子の九思。よくよく心がけるべきこと。

【私訳】

喩して曰うに、「今、この文によって、明白にわかった。中觀派は諸々の概念化された言葉の仮構をやめ、寂靜で煩惱も滅し我執から遠く離れていることを以つて自分たち（宗）の究極としている。（しかし）このような考えの真意は、みな否定の法門（遮情門）であり、肯定の説（表德門）ではない。『大智度論』の論主（龍猛菩薩）は自ら入道入門の最初と斷じて

いる。心ある智慧者は、このことに留意して君子のようによくよく考えるべきである。

【付記】

宗祖大師はインド大乘中觀派の論師清弁の『般若灯論』から論拠を引用した、僭越ながら、インドの中觀派には清弁と時代を同じくして月称(チャンドラ・キールティ Candrakīrti)という論師がいて、『ブラスンナ・パダー Prasama-padā』(『淨明句論』)という有名な『中論』注を残している。インド中觀派はその後、清弁の論証方法を継ぐ「スヴァータントリカ Svāntarika 自立論証派」と、月称の論法を継承する「ブラスンギカ Prasāṅgika 帰謬論証派」とが競い合つて、二大学派を形成した。そんなことは宗祖大師のよく知るところだったにちがいないが、清弁を出して月称を出さないことは、私には不可解である。

○『大智度論』引証喻釈段

【原文】

龍樹菩薩大智度論三十八云。佛法中有二諦。一者世諦。二者第一義諦。爲世諦故說有衆生。爲第一義諦故說衆生無所有。復有二種。有知名字相。有不知名字相。譬如軍立密號有知者有不知者。復有二種。有初習行有久習行。有著者有不著者。有知他意有不知他意者離有言辭知其寄言以自宣理爲不知名字相初習行著者不知他意者故說無衆生。爲知名字相久習行不著知他意者故說言有衆生

【書き下し】

龍樹菩薩の大智度論三十八に云わく、「佛法の中に二諦有り。一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の爲の故に衆生有るを説き、第一義諦の爲の故に衆生有る所無しを説く。復た二種有り。名字の相を知る有り。名字の相を知らざる有り。譬えば軍の密號を立つるに、知る者有り、知らざる者有るが如し。復た二種有り。初めて習行する有り、久しく習行する有り。著

する者有り、不著せざる者有り。他意を知る有り、他意を知らざる者有り。言辭を知るありと雖も、其の言に寄せて以つて自ら理を宣ふ。名字の相を知らず、初めて習行し、著する者、他意を知らざる者の爲の故に衆生無きを説く。名字の相を知り、久しく習行し、著せず、他意を知る者の爲の故に、説いて衆生有るを言う」と。

【註記】

①軍の密號…軍隊の秘密の暗号。

②言辭…他者の言葉。

【私訳】

インド大乘中觀派の論師龍樹の『大智度論』第三十八に説くに、「仏法のなかに二種類の眞実理（二諦）がある。一つは世俗の言葉（仮構）で表現する眞実理（世諦）、二つは世俗の言葉を超えたサトリの境地の眞実理（第一義諦）である。世俗の言葉で説く世諦では衆生が存在すると説き、サトリの境地の第一義諦では衆生が存在しないと説く。また二種類あつて、言葉の意味や表現の眞実相を知る人と、それを知らない人がいる。譬えば、軍隊で秘密の暗号を使うとして、それを解読できる人とできない人がいるように。また二種類あつて、初めて修行する人と、長く修行している人があり、モノゴトに執著する人と、執著しない人があり、他者の心中がわかる人と、わからない人がいる。他者の言葉を知っても、その言葉に左右されて自分の理屈を言う。言葉の意味や表現の眞実相を知らず、初めて修行し、執著する人、他者の心中がわからない人のために、衆生は存在しないと説き、言葉の意味や表現の眞実相を知り、長く修行し、執著せず、他者の心中がわかる人のために、（仮有として）衆生は存在すると説くのである」と。

【原文】

喩曰。初重二諦與常談同。次二諦有八種人。爲不知名字相等四人說眞諦中無佛無衆生。爲後四人故說眞諦中有佛有衆生。審思之。所謂密號名字相等義。眞言教中分明說之。故菩提場經云文殊白佛言。世尊以幾所名號於世界轉。佛言。所謂名帝釋名梵王。名大自在名自然名地。名寂靜名涅槃。名天名阿蘇羅名空。名勝名義名不實名三摩地。名悲者名慈。名水天名龍名藥叉名仙名三界主。名光名火名鬼主。名有名不有名分別名無分別。名蘇彌盧名金剛。名常名無常。名眞言名大眞言。名海名大海。名日名月名雲名大雲。名人主名大人主。名龍象名阿羅漢害煩惱。名非異名非不異。名命名非命名山名大山。名不滅名不生名眞如名眞如性。名實際名實際性。名法界名實名無一名有相。文殊師利。我於此世界成就五阿僧祇百千名號。調伏成就諸衆生。如來無功用無量種眞言色力事相而轉

【書き下し】

喩して曰わく、「初重の二諦は常の談と同じなり。次の二諦に八種にんの人有り。名字の相を知らざる等の四人の爲に、眞諦の中に佛無し衆生無しと説く。後の四人の爲の故に、眞諦の中に佛有り衆生有りと説く。つまひらか審に之を思え。所謂、密號の名字の

相等の義。眞言教の中に分明に之を説く。故に菩提場經に云わく、「文殊、佛に白して言さく。「世尊、幾所いくほくの名號を以ってか世界に於いて轉ずるや」と。佛、言わく、「謂わゆる、帝釋と名づけ、梵王と名づけ、大自在と名づけ、自然と名づけ、地と名づけ、寂靜と名づけ、涅槃と名づけ、天と名づけ、阿蘇羅と名づけ、空と名づけ、勝と名づけ、義と名づけ、不實と名づけ、三摩地と名づけ、悲者と名づけ、慈と名づけ、水天と名づけ、龍と名づけ、藥叉と名づけ、仙と名づけ、三界主と名づけ。光と名づけ、火と名づけ、鬼主と名づけ、有と名づけ、不有と名づけ、分別と名づけ、無分別と名づけ、蘇彌盧と名づけ、金剛と名づけ、常と名づけ、無常と名づけ、眞言と名づけ、大眞言と名づけ、海と名づけ、大海と名づけ、日と名づ

け、月と名づけ、雲と名づけ、大雲と名づけ、人主と名づけ、大人主と名づけ。龍象と名づけ、阿羅漢（害煩惱）と名づけ、非異と名づけ、非不異と名づけ、命と名づけ、非命と名づけ、山と名づけ、大山と名づけ、不滅と名づけ、不生と名づけ、眞如と名づけ、眞如性と名づけ、實際と名づけ、實際性と名づけ、法界と名づけ、實と名づけ、無二と名づけ、有相と名づく。文殊師利、我、此の世界に於いて五阿僧祇百千の名號を成就し、諸衆生を調伏し成就す。如來は功用無くとも無量種の眞言色力の事相もて轉ず」と。

【註記】

- ①自然…造られたものではなく、自ずからの法爾自然。
- ②地…万物の拠り所。能生。
- ③天…光明が自在に照らす。
- ④阿蘇羅…阿修羅・アスラ。非天・天に似ているが天ではない。
- ⑤空…妨げがない・無礙。
- ⑥勝…最勝。
- ⑦義…法性の眞実義。
- ⑧不實…法性の眞実に非ざること。
- ⑨藥叉…ヒンドウの鬼神。仏教の護法神。
- ⑩三界主…欲界・色界・無色界の主。
- ⑪鬼主…餓鬼道の主・閻魔王。
- ⑫有…実有。
- ⑬不有…空。

⑭蘇彌盧・須弥山・スメール。

⑮金剛・須弥山を囲む八金山。

⑯常・無為。

⑰無常・有為。

⑱眞言・転輪王（応化身）の眞言。

⑲大眞言・究極の法身の眞言。

⑳海・大海・須弥山を囲む海。

㉑日・月・日天、月天。

㉒雲・大雲・顕色の一つ。

㉓人主・大人主・王と大王。

㉔龍象・徳のある賢聖。

㉕非異・非不異・同異。

㉖命・非命・有情と無情。

㉗實際・實際性・眞実の辺際とその本性。

㉘實・眞実。

㉙有相・森羅万象の在り様。

㉚五阿僧祇百千・果てしなく多くの。

㉛功用・救済のはたらき。

㉜眞言色力・『菩提場所説一字頂輪王經』では「色身」とあつて誤写とも言われている。この件について、伝統教学ではさま

ざまな見解が出されている（松長有慶『訳注 弁頭密「教論」』）。

③2事相：現在言われる「教相」「事相」の「事相」ではない（前掲書）。私は「現実化」とした。

【私訳】

喩して言うに、「初めの二諦は通常の解釈でいい。次の二諦に八種の人があり、名字の相を知らざる人などの四人には、真諦（第一義諦）においては仏も衆生も存在しないと説き、名字の相を知る人など後の四人には、真諦においては仏も衆生も存在すると説くのである。つまびらかにこれを考えるべきである。いわゆる、秘密の名号の意味や表現の真実相の深い内容については、真言密教が明らかに説いている。であるから、不空訳の『菩提場所説一字頂輪王経』に次のように説かれている、「文殊菩薩が仏世尊に問うには、「世尊よ、（あなたは）いくつの名号によって世俗の世界で説法されているのか」と。仏が答えて言うに、「言ってみれば、帝釈天・梵天・大自在天、自然・大地、寂靜・涅槃、天・阿修羅、空・勝、義・不實、三摩地、悲者・慈、水天・龍・藥叉、仙・三界主、光・火、鬼主、有・不有、分別・無分別、蘇彌盧、金剛、常・無常、真言・大真言、海・大海、日・月、雲・大雲、人主・大人主、龍象・阿羅漢・害煩惱、非異・非不異、命・非命、山・大山、不滅・不生、眞如・眞如性、實際・實際性、法界、實、無二、有相という名号（はそのほんの一部）である。文殊師利よ、私は、この世俗の世界で果てしなく多く（五阿僧祇百千）の名号を身に付け、諸々の凡夫・衆生を化導したのである。如來は眞如そのものであるから直接的な救済のはたらき（功用）が見えないかもしれないが、かぎりなく多くの種類の真言の具体的な威力の功用を展開しているのである」と。

○『釈摩訶衍論』引証喩釈段③

【原文】

龍樹釋大衍論云。言說有五種。名字有二種。心量有十種。契經異說故。論曰。言說有五。云何爲五。一者相言說。二者夢言說。三者妄執言說。四者無始言說。五者如義言說。楞伽契經中作如是說。大慧相言說者。所謂執著色等諸相而生。大慧夢言

說者。念本受用虛妄境界依境界夢。覺已知依虛妄境界不實而生。大慧執著言說者。念本所聞所作業生。大慧無始言說者。從無始來執著戲論煩惱種子勳習而生。三昧契經中作如是說。舍利弗言。一切萬法皆悉言文。言文之相即非爲義。如實之義不可言說。今者如來云何說法佛言我說法者。以汝衆生在生說故說不可說。是故說之。我所說者義語非文。衆生說者文語非義。非義語者皆悉空無。空無之言無言於義。不言義者皆是妄語。如義語者。實空不空。空實不實。離於二相中間不中。不中之法離於三相。不見處所。如如如說故。如是五中前四言說虛妄說故不能談眞。後一言說如實說故得談眞理。馬鳴菩薩據前四故作如是說離言說相。心量有十。云何爲十。一者眼識心。二者耳識心。三鼻識心。四舌識心。五身識心。六意識心。七末那識心。八阿梨耶識心。九者多一識心十一一識心。如是十中初九種心不緣眞理。後一種心得緣眞理而爲境界。今據前九作如是說離心緣相

【書き下し】

龍樹の釋大衍論に説くに、「言説に五種有り。名字に二種有り。心量に十種あり。契經の異説の故に。論じて曰わく。言説に五有り。云何が五と爲すや。一には相言説、二には夢言説、三には妄執言説、四には無始言説、五には如義言説なり。楞伽契經の中に是くの如くの説を作す。「大慧、相言説とは、謂わゆる、色等の諸相に執著し。而も生ず。大慧、夢言説とは、本受用虚妄の境界を念じ、境界に依つて夢みる。覺り已つて虚妄の境界に依つて不實を知り、而も生ず。大慧、執著言説とは、

本所聞所作の業を念じて、生ず。大慧、無始言説とは、無始從り來、戲論に執著し、煩惱の種子勳習し、而も生ず」と。
このかた

三昧契經の中に是くの如くの説を作す。「舍利弗の言さく、「一切の萬法は皆、悉く言文なり。ごんもん言文の相は即ち義と爲るに非ず。如實の義は言説すべからず。今、如來は云何が説法するや」と。佛、言わく、「我が説法とは、汝、衆生は生に在つて説くを以つての故に不可説と説く。是の故に之を説く。我が所説とは義語にして文に非ず。衆生の説とは文語にして義に非ず。

義語に非ざるは皆、悉く空無なり。空無の言は義を言うこと無し。義を言わざるは皆、是れ妄語なり。如義語とは、實空にして不空なり。空、實にして不實なり。二相を離れて中間に中らず、不中の法は三相を離れたり。處所を見ず、如如如説の故に。是くの如くの五つの中の前の四言説は虚妄の説なるが故に、眞を談ずること能わず。後の一言の説は如實の説なるが故に、眞理を談ずることを得。馬鳴菩薩は前の四つに據るが故に、是くの如くの説を作し、言説の相を離れたり。心量に十有り、云何が十と爲す。一には眼識心、二には耳識心、三には鼻識心、四には舌識心、五には身識心、六には意識心、七には末那識心、八には阿梨耶識心、九には多一識心、十には一一識心なり。是くの如くの十の中の初めの九種心は、眞理を縁ぜず。後の一種心は眞理を縁じて、而も境界と爲すことを得。今、前の九に據つて是くの如くの説を作し、心縁の相を離れたり」と。

【註記】

- ①釋大衍論…『釈摩訶衍論』。
- ②楞伽契經…『入楞伽經』（菩提流支訳）。
- ③本受用虚妄…過去に経験した事実ではない幻想。
- ④本所聞所作の業…過去に聞いたり行ったりした行為。
- ⑤三昧契經…『金剛三昧經』。水野弘元博士に中国撰述の偽經説がある。
- ⑥義語…眞実義を言い表す言葉。如義語。
- ⑦文語…人為的につくられた仮構の言葉。
- ⑧二相…空の實と不實。
- ⑩三相…實と不實と中間。

⑪ 如如如説…そうあるべくしてある法如を説く。

⑫ 馬鳴菩薩…『大乘起信論』の作者とされるが、古くから疑義がある。『大乘起信論』については前述。

⑬ 眼識心…「六識」の境地。

⑭ 末那識心…「末那識」の境地。

⑮ 阿梨耶識心…「アーラヤ識」の境地。

⑯ 多一識心…「多即一」「一即多」の相対的一如の境地。『釈摩訶衍論』は「八識」の上に「多一識心」と「一一識心」を説く。

⑰ 一一識心…絶対的な不二一如の真如の境地。

【私訳】

龍樹の『釈摩訶衍論』に次のように説かれている。「人の言説には五種類があり、その言説の意味や表現には二種類があり、心の在り様には十種類がある。仏教經典には異った説が説かれているからである。それらを説明すれば、先ず言説に五種類があり、何かと言うと、一に相言説、二に夢言説、三に妄執言説、四に無始言説、五に如義言説である。（それについては）『楞伽經』卷二に次ぎのように説かれている。「大慧よ、相言説とは物質的なものの形や色など目に見える姿（色）に執著して生じる。大慧よ、夢言説とは過去に経験した事実ではない幻想を思い浮かべ、覚ったあとでその幻想は事実ではないと知って生じる。大慧よ、執著言説とは、過去に聞いた行ったりした行為を思い浮かべて生じる。大慧よ、無始言説とは始めのいの過去から現在に至るまで、概念化された仮構の言葉に執著し、煩惱の種子がその匂いが染み込んだ深層意識から生じる」と。（また）『金剛三昧經』『真性空品』にはこのように説かれている。「舍利弗が言うに、「あらゆる法門は、ことごとく言葉や文字で説かれている。言葉や文字は外見ではその意味を表わしてはいない。（その言葉や文字の）真実（如實）義は言説では表現できない。（であるが）今、如來はどのようにして説法をするのか」と。仏、答えて言うに、「私の説法とは、あなたは、凡夫・衆生は今、現実世界に生きていて世俗の言葉で説くと考えるから、真実（如實）義は説くことができな

いと言っているのである。だから以下のように言っているのである。私の所説は真実そのままを言う言葉で、人為的な仮構の文句ではない。凡夫・衆生の所説は人為的な仮構の文句であつて、真実義を表現していない。真実そのままを言う言葉でないものは、ことごとく空虚である。空虚は言葉は真実義を言い表すことはできない。真実義を言い表せないものみな妄語である。真実義を言い表す言葉とは、絶対空（真空）であり、さらに妙有（不空）でもない。空と言っても、絶対空に即した実有（実）であつて固定的な実有ではない（不実）。（また、実と不実の）二相を離れた中間でもなく、この不中の法は（実・不実・中間の）三相も離れている。抛り所もない。（ただそのようにあるべくしてある）法如を説いているからである。このように、五種類の言説のうち、前の四つの言説は虚偽の説であるから、真実を述べることはできない。あとの一つの言説は真実義を説くから、真実義を説くことができる。馬鳴菩薩は『大乘起信論』で、前の四つの言説によつて、このように説いて、如来は言説の外見から離れているのである。心の在り様に十種類があると言つたが、何が十かと言うと、一に眼識心、二に耳識心、三に鼻識心、四に舌識心、五に身識心、六に意識心、七に末那識心、八に阿梨耶識心、九に多一識心、十には一一識心である。この十のうち初めの九種の心は、（相対的な対立関係の立場なので）真実義を縁とせず、あとの一種心のみが真実義を縁として、サトリの境地とすることができる。今は、前の九種心によつてこのように説いたが、心縁の相を離れる（離心縁相）というのである」と。

【原文】

喩曰。言語心量等離不離之義此論明説。顯教智者詳而解迷。

【書き下し】

喩して曰わく、「言語と心量等の離・不離の義は、此の論に明らかに説けり。顯教の智者は詳にして迷いを解け。

【私訳】

喩して言うに、「言葉と心の在り様との離・不離の関係性については、この『大乘起信論』に明らかに説かれている。顕教の智慧ある人は、それらを詳しく考えて迷いを解くことである。

○『菩提心論』引証喩釈段

【原文】

金剛頂發菩提心論云。諸佛菩薩昔在因地發是心已。勝義行願三摩地爲戒。乃至成佛無時暫忘。惟眞言法中即身成佛故是說三摩地法。於諸教中闕而不書

【書き下し】

金剛頂發菩提心論に云わく、「諸々の佛・菩薩、昔、因地に在^{いま}して是の心を發し已わり、勝義・行願・三摩地を戒と爲し、乃し成佛に至るまで、時として暫らく忘るること無し。惟し眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を説く。諸教の中に於いて闕して書かず。

【註記】

①金剛頂發菩提心論…通称、龍樹作『菩提心論』（不空訳）。不空作という説もある。

②因地…菩薩の修行位。

③勝義・行願・三摩地…『菩提心論』が言う修行者の戒。眞実義・大悲利他・三昧の境地。

【私訳】

『金剛頂發菩提心論』（通称『菩提心論』）に説くに、「諸々の仏・菩薩が、昔、修行位に在った時この菩提心を発して以来、真実義（勝義）・大悲利他（行願）・三昧の境地（三摩地）を持戒とし、成仏するまで一時も忘れたことがない。ただ真言の教法によってのみ即身成仏するから瑜伽觀法を説くが、顯教においてはこれを欠いていてどこにも書かれていない」と。

【原文】

喩曰。此論者龍樹大聖所造千部論中密藏肝心論也。是故顯密二教差別淺深。及成佛遲速勝劣皆説此中。謂諸教者他受用身及變化身等所説諸顯教也。是説三摩地法者。自性法身所説祕密眞言三摩地門是也。所謂金剛頂十萬頌經等是也

【書き下し】

喩して曰わく、「此の論は、龍樹大聖所造の千部の論の中の密藏肝心の論なり。是の故に顯密二教の差別・淺深。及び成佛の遲速・勝劣、皆此の中に説けり。謂わく、諸教とは他受用身及び變化身等所説の諸々の顯教なり。是れ三摩地の法を説くとは、自性法身所説の祕密眞言三摩地門、是れなり。謂わゆる、金剛頂十萬頌經等、是れなり」と。

【註記】

①金剛頂十萬頌經・十萬頌の『金剛頂經』、すなわち「広本」。

【私釈】

喩して言うに、「この『菩提心論』は、偉大な龍樹論師が著した千部からの論書のなかで、密教の肝要な部分を論じたものである。だから顯密二教の教理のちがいや深い浅い、及び成仏の速い遅いや優劣がみな、このなかに説かれている。すなわち、

諸教とは、他受用身や變化身等が説く諸々の顯教であり、瑜伽觀法を説くとは、自性法身が説く秘密の真言法の三摩地の法門である。いわゆる十万頌の『金剛頂經』などがこれである」と。

■「弁頭密」教論」卷下

○『六波羅蜜經』引証喻釈段

【原文】

六波羅蜜經云法寶自性恒清淨 諸佛世尊如是説

客塵煩惱之所覆 如雲能翳日光明

無垢法寶衆德備 常樂我淨悉圓滿

法性清淨云何求 無分別智而能證

第一法寶即是摩訶般若解脫法身。第二法寶謂戒定智慧諸妙功德。所謂三十七菩提分法。乃至以修此法而能證彼清淨法身。第三法寶者所謂過去無量諸佛所説正法及我今所説。所謂八萬四千諸妙法蘊。乃至調伏純熟有緣衆生。而令阿難陀等諸大弟子一聞於耳皆悉憶持。攝爲五分。一素咀纚。二毘奈耶。三阿毘達磨。四般若波羅蜜多。五陀羅尼門。此五種藏教化有情。隨所應度而爲説之。若彼有情樂處山林常居閑寂修靜慮者。而爲彼説素咀纚藏。若彼有情樂習威儀護持正法。一味和合令得久住。而爲彼説毘奈耶藏。若彼有情樂説正法分別性相。循環研覈究竟甚深。而爲彼説阿毘達磨藏。若彼有情樂習大乘眞實智慧離於我法執著分別。而爲彼説般若波羅蜜多藏。若彼有情不能受持契經調伏對法般若。或復有情造諸惡業四重八重五無間罪謗方等經一闡提等種種重罪使得銷滅。速疾解脫頓悟涅槃。而爲彼説諸陀羅尼藏。此五法藏譬如乳酪生蘇熟蘇及妙醍醐。契經如乳調伏如酪。對法教者如彼生蘇。大乘般若猶如熟蘇。總持門者譬如醍醐。醍醐之味乳酪蘇中微妙第一。能除諸病令諸有情身心安樂。總持門者契經等中最爲第一。能除重罪令諸衆生解脫生死速證涅槃安樂法身。復次慈氏我滅度後。令阿難陀受持所説素咀纚藏。

其鄔波離受持所說毘奈耶藏。迦多衍那受持所說阿毘達磨藏。曼殊室利菩薩受持所說大乘般若波羅蜜多。其金剛手菩薩受持所說甚深微妙諸總持門

【書き下し】

六波羅蜜經に云わく、

「法寶の自性は恒に清淨なり、諸佛世尊は是くの如く説けり。

客塵煩惱の覆う所は、雲の能く日の光明を翳すが如し、

無垢の法寶は衆徳備わり、常・樂・我・淨は悉く圓滿す。

法性の清淨なるを云何が求めん、無分別智のみ而も能く證す。

第一の法寶とは、即ち是れ摩訶般若解脫法身なり。第二の法寶とは、謂わく戒・定・智慧の諸々の妙功德なり。謂わゆる、三十七菩提分法なり。乃至、此の法を修するを以つて、而も能く彼の清淨法身を證す。第三の法寶とは、謂わゆる、過去の無量の諸佛所説の正法、及び我が今の所説なり。謂わゆる八萬四千の諸々の妙法蘊なり。乃至、有縁の衆生を調伏し純熟す。

而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞いてみな悉く憶持せしむ。攝して五分と爲す。一に素怛纒そたらん、二に毘奈耶びなや、三に

阿毘達磨、四に般若波羅蜜多、五に陀羅尼門なり。此の五種藏もて有情を教化し、度すべき所に随つて而も爲に之を説く。若し彼の有情、山林に處し、常に閑寂に居して靜慮を修するを樂わば、彼の爲に素怛纒藏を説く。若し彼の有情、威儀を習つて正法を護持し、一味和合して久住するを得せしめんと樂わば、彼の爲に毘奈耶藏を説く。若し彼の有情、正法を説いて

性相しやうさう

研けん覈ぎやく

性相を分別し、循環研覈して甚深究竟せんと樂わば、彼の爲に阿毘達磨藏を説く。若し彼の有情、大乘眞實の智慧を習い、我法の執著の分別を離れんと樂わば、彼の爲に般若波羅蜜多藏を説く。若し彼の有情、契經・調伏・對法・般若を受持する

こと能わず、或いは復た有情、諸々の惡業の四重・八重・五無間罪・謗方等經・一闡提等の種種の重罪を造るを銷滅しょうめつする

ことを得せしめ、速疾に解脫し涅槃を頓悟するを樂わば、彼の爲に諸陀羅尼藏を説く。此の五つの法藏は、譬えば、乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙醍醐の如し。契經は乳の如く、調伏は酪の如く、對法教は彼の生蘇の如く、大乘般若は猶し熟蘇の如く、總持門は譬えば醍醐の如し。醍醐の味は乳・酪・蘇のなかの微妙第一にして、能く諸病を除き、諸々の有情をして身心安樂ならしむ。總持門は契經等のなかの最も第一爲り。能く重罪を除き、諸々の衆生をして生死を解脫し、速かに涅槃の安樂の

法身を證せしむ。復た次に、慈氏、我が滅度ののちに、阿難陀をして所説の素怛纒藏を受持せしめ、其の鄔波離うぱりをして所説

の毘奈耶藏を受持せしめ、迦多衍那かたえんなをして所説の阿毘達磨藏を受持せしめ、曼殊室利菩薩をして所説の大乘般若波羅蜜多を

受持せしめ、其の金剛手菩薩をして所説の甚深微妙の諸々の總持門を受持せしむ。

【註記】

①六波羅蜜經・般若三藏訳『大乘理趣六波羅蜜多經』卷一の「歸依三宝物」。「三宝」のうち三種の「法宝」を説く。圍繞された二頌八句は、經全体に説かれる二十二頌のうちの第十九と第二十の頌文である。第十九の「法宝の自性」は「客塵覆淨」と科す。「在纏本有」（凡夫・衆生が本来具有している法宝）という意味。第二十の「無垢の法宝」は「智能証理」と科す。「出纏修生」（まとわりつく煩惱から解脫した法宝）である（那須政隆博士『弁頭密「教論」の解説』）。

②法寶…「三宝」の「法宝」。凡夫・衆生に本来具有されている仏性。

③常・樂・我・淨…涅槃の「四徳」。

④法性…ここは仏性と同義。

⑤無分別智…相対的な二項の対立関係を超えた区別意識のない智慧。

⑥摩訶般若解脱法身…摩訶般若とはサトリの智慧。解脱法身は一切の煩惱を解脱してサトリの境地にある眞実を体とする法身。

⑦戒・定・智慧…「戒・定・慧」の「三学」。

⑧三十七菩提分法…サトリを得る行法の徳目。具には「四念処」「四正断」「四神足」「五根」「五力」「七覚支」「八聖道」。

「四念処」は、「身念処」「受念処」「心念処」「法念処」。

「四正断（四正勤）」は、「断断」「律儀断」「随護断（防護断）」「修断」。

「四神足」は、「欲神足」「勤神足」「心神足」「観神足」。

「五根」は、「信根」「精進根」「念根」「定根」「慧根」。

「五力」は、「信力」「精進力」「念力」「定力」「慧力」。

「七覚支」は、「念覚支」「择法覚支」「精進覚支」「喜覚支」「軽安覚支」「定覚支」「捨覚支」。

「八聖道」は、「正見」「正思惟」「正語」「正業」「正命」「正精進」「正念」「正定」。

⑨八萬四千…多くの。

⑩妙法蘊…すぐれた法門の集り。

⑪阿難陀…釈尊の十大弟子の一人、阿難。

⑫素怛纒…スートラ (sūtra)、経蔵。

⑬毘奈耶…ヴィナヤ (vinaya)、律蔵。

⑭阿毘達磨…アビダルマ (abhidharma)、論蔵。

⑮般若波羅蜜多：プラジュニャーパ・ラミター (prajña-paramita)、般若藏、大乘。

⑯陀羅尼門：ダーラニー (dhāraṇī)、真言藏、密教。

⑰一味和合：一致協力。

⑱性相：諸法の本性と現実の在り様。

⑲循環研覈：くり返し詳しく調べる。

⑳對法：阿毘達磨。「對」は阿毘 (āpī)、[法]は達磨 (ダルマ dharma)。

㉑四重・八重：比丘の「四重禁戒」・比丘尼の「八重禁戒」。

「四重禁戒」は、「淫」「盜」「殺人」「大妄語」。

「八重禁戒」は、「四重禁戒」に「摩觸」(愛欲によつて男の身体に触れること)・「八事」(愛欲によつて男と手をつなぐなど八つのこと)・「覆尼」(他の比丘尼の破戒を知つても言わないこと)・「隨拳」(忠告) (諫められても悪見の男に従うこと)を加えたもの。

㉒五無間罪：母を殺すこと・父を殺すこと・阿羅漢を殺すこと・僧伽 (サンガ) の和合を破ること・仏身を傷つけること。

㉓一闡提：仏法を誹謗したりして成仏に縁なき者。

㉔慈氏：弥勒菩薩。

㉕鄢波離：釈尊の弟子ウ・パリ。

㉖迦多衍那：釈尊の弟子

㉗曼殊室利菩薩：文殊菩薩。

㉘金剛手菩薩：金剛薩埵。

『大乘理趣六波羅蜜多經』卷一の「帰依三宝品」に説くに、

「凡夫・衆生に本来具有されている仏性の本性は常に清浄であると、諸々の仏世尊はそうように説く。

六塵（認識対象）によって汚された煩惱に（仏性が）覆われのは、雲が太陽の光りを隠してしまうのと同じである。無垢なる仏性は（世俗に在って）多くの徳が備わり、涅槃の境地の常・樂・我・淨の「四徳」もみな成就している。

この清浄な仏性（法宝）をいかにして求めるか、相対的な二項の対立関係を越えた智慧だけがそれを成就する。

第一の仏性（法宝）とは、すなわち、一切の煩惱を解脱してサトリの境地にある眞実を体とする法身のことである。第二の仏性（法宝）とは、いわゆる戒・定・慧の「三学」の諸々のすぐれた功德のことである。（別な言い方で言うなら）サトリを得る行法の三十七の徳目（「三十七菩提分法」）である。また、この「三十七菩提分法」を修すること、先に言った清浄の法身をよく成就する。第三の法宝とは、過去の限らない諸々の仏が説く正法、及び私（釈尊）が今説く所である。いわゆる八万四千の諸々のすぐれた法門の集りである。またそれは、仏道に関心を持った凡夫・衆生を化導しよく馴らすことである。これらの法門を阿難（アーナンダ）などのすぐれた弟子たちに聞かせ、一度聞いたることごとく憶えるようにした。それらを集約して五種類に分けた。一には経蔵（素怛纒）、二には律蔵（毘奈耶）、三には論蔵（阿毘達磨）、四には般若蔵（大乘般若波羅蜜多）、五には真言蔵（密教、陀羅尼門）である。この五種の蔵によつて生ある者（有情）を教化し、導くべき機根によつてこれらを説いた。すなわち、もしその有情が、山林に棲み常に閑寂に住して、一点集中の禪定（靜慮）を行いたいと願うなら、彼のために経蔵を説き、もし彼が、行・住・坐・臥の規範を習得し正しい教法を護り身に付けて、僧の集団（僧伽・サンガ）が一致（一味和合）して永く存続するようにしたいと願うなら、彼のために律蔵を説き、もし彼が、正法を説いて諸法の本性と現実の在り様（性相）を分析し、くり返し詳しく調べて諸法の実相を明かそうと願うのなら、彼のために論蔵（阿毘達磨蔵）を説き、もし彼が、大乘の眞実の智慧を習得し、我執による相対的な二項対立の意識を離れたいと願う

なら、彼のために般若藏（大乘、般若波羅蜜多藏）を説き、もし彼が、今言つた経藏（契經）・律藏（調伏）・論藏（阿毘達磨・對法）・般若藏を受持することができず、あるいはまた彼が、諸々の惡業、すなわち四重禁戒・八重禁戒・五無間罪などを犯し、あるいは大乘經典（方等經）を謗り、あるいは仏法を謗つたりして仏法に縁がないなど、種々の重罪を犯すことを抑滅して、速かに煩惱から解脱し涅槃をすばやく得たいと願うなら、彼のために諸々の真言藏（陀羅尼藏）を説くのである。これら五つの法藏は、譬えば、乳・酪・生蘇・熟蘇と妙醍醐のようである。経藏（契經）は牛乳のようであり、律藏（調伏）はバター（酪）のようであり、論藏（阿毘達磨・對法教）は生チーズ（生蘇）のようであり、大乘の般若藏は熟成のチーズ（熟蘇）のようであり、真言藏（總持門）は醍醐のようである。醍醐の味は乳・酪・蘇のなかでは美味第一で、よく諸々の病を除き、諸々の生ある者の身心を安樂にさせる。真言藏（總持門）は、経藏（契經）などのなかで第一である。よく重罪を除き、諸々の凡夫・衆生を生死の輪廻から解脱させ、速かに涅槃の安樂の境地の法身を成就させる。

また次に、弥勒菩薩は、私（釈尊）がこの世を去つたのちに、阿難（アーナンダ）に所説の経藏を受持せしめ、優波離（ウパリ）に所説の律藏を受持せしめ、迦旃延（カーティヤヤナ）に所説の論藏（阿毘達磨藏）を受持せしめ、文殊室利菩薩に所説の般若藏（大乘、般若波羅蜜多）を受持せしめ、金剛薩埵に所説の甚だ秘奥ですぐれた諸々の真言藏（總持門）を受持せしむ」と。

【原文】

喩曰。今依斯經文。佛以五味配當五藏。總持稱醍醐四味譬四藏。振旦人師等。爭盜醍醐各名自宗。若鑒斯經則掩耳之智不待剖割。

【書き下し】

喩して曰わく、今、斯の經文に依らば、佛は五味を以つて五藏に配當す。總持を醍醐と稱し、四味を四藏に譬えたり。振旦

の人師等、争つて醍醐を盗み、各々自宗と名づく。若し斯の經に鑑れば則ち掩耳えんじの智、剖割ぼうかつを待たず。

【註記】

①振旦…中国。

②掩耳…掩耳盜鐘の譬え。鐘を盗んでも鐘が鳴るのを耳をふさいで恐れること。

③剖割…断ち割る。

【私釈】

喩して言うに、今、この經文に依れば、仏は乳などの五味を経蔵などの五蔵に配当した。真言蔵（総持門）を醍醐と言い、四つの味を律蔵など四蔵に譬えた。中国の論師たちは、競つて醍醐を盗み、それぞれが自宗と言った。もし、この經に鑑みれば、鐘を盗んでも鐘が鳴るのを耳をふさいで恐れるようなもの（「掩耳盜鐘」）で、そのような智慧は断ち割る必要もない」と。

○『楞伽經』引証喩釈段②

【原文】

楞伽經云。我乘内證智。妄覺非境界。如來滅世後。誰持爲我說。如來滅度後。未來當有人。大慧汝諦聽。有人持我法。於南大國中。有大德比丘。名龍樹菩薩。能破有無見。爲人說我乘。大乘無上法

【書き下し】

楞伽經に云わく、「我が乗たる内證智は、妄覺の境界に非ず。如來滅世の後、誰か持して我が爲に説かん。如來滅度の後、未來に當に人有るべし。大慧、汝、諦かに聽け。人有りて我が法を持す。南大國の中に於いて、大德比丘有り。龍樹菩薩と名づく。能く有無の見を破し、人の爲に我が乗を説く。大乘の無上の法なり」と。

【註記】

①内證智…法身如來の内なるサトリの智慧。

②誰か持して「我」が爲に説かん…この「我」とは誰か、古來二説ある。一つは、この部分を次に出てくる「大慧」の問いと解釈し、「我」即ち「大慧」ととる。二つ目は、「我」を最初の「我の乗たる」の「我」と同じく「法身」ととる（那須政隆『《弁頭密》「教論」の解説』。私は前者をとった。

③如來滅度の後…仏滅後八百年頃（前掲書）。

④南大國…南インド。

⑤龍樹菩薩…「人有りて我（法身如來）が法を持す」は真言付法の第三祖・龍猛を思わせ、「能く有無の見を破し」はインド大乘中觀派の祖・龍樹を思わせる。二人は本来別人であるが、真言付法の第三祖・龍猛を意味している氣配がある。

⑥有無の見…「実有」と「実無」の相対的「二項対立の妄見」。

【私釈】

『入楞伽經』の第九に説くに、「私（法身大日）の内なるサトリの智慧は、相対的な二項対立を覚った境地ではない。（大慧が法身如來に問うて言うに）「如來（釈尊）が世を去ったのち、誰が（その智慧を）受持して私（大慧）のために説いてくれるのだろうか」と。（法身如來が答えて言うに）「如來（釈尊）が世を去ってのち、先の世にかならず然るべき人が現われるにちがいない。大慧よ、よくよく聴きなさい。（実際に）然るべき人が出て、私（法身大日）の教法を受持した。南インドに

広大な徳を具えた比丘が現われ、その名を龍樹菩薩と言う。よく「実有」と「実無」の相対的三項対立の妄見を退け、人のために私（法身如来）の内なるサトリの智慧を説いた。すなわち大乘のこの上ない教法である」と。

【原文】

喩曰。言我乘内證智者。是則示眞言祕密藏。如來明記若人説通。有智之人不須狐疑

【書き下し】

喩して曰わく、「我が乗たる内證智とは、是れ則ち眞言祕密藏を示す。如來明らかに記す、若くの如き人、説通すべし、と。有智の人、狐疑すべからず。

【註記】

①狐疑…疑い深いキツネのように疑う。

【私釈】

喩して言うに、「我が乗たる内證智」とは、すなわち眞言祕密藏のことである。如來（法身大日）が明らかに予言した通り、この（龍樹の）ような然るべき人が現われて、如来と同じ説を説いたのである。智慧ある人はこそ疑つてはならない。

○『楞伽經』引証喩釈段③

【原文】

楞伽第二又云。復次大惠法佛報佛説。一切法自相同相故。以執著虚妄體相因分別心勳習故。大惠是名分別虚妄體相。大惠是

名報佛說法之相。大惠法佛說法者。離心相應體故。內證聖行境界故。大惠是名法佛說法之相。大惠應化佛所作應佛說。施戒忍精進禪定智慧故。陰界入解脫故。建立識想差別行故。說諸外道無色三摩拔提次第相故。大惠是名應佛所作應佛說法相。復次大惠法佛說法者。離攀緣離能觀所觀故。離所作相量相故。非諸聲聞緣覺外道境界故又第十卷云。大惠應化佛作化衆生事異眞實相說法。不說內所證法聖智境界

【書き下し】

楞伽第二に、又、云わく、「復た次に、大惠、法佛の報佛は一切法の自相・同相を説くが故に、虚妄の體相に執著するを以つて、分別の心動習するに因るが故に、大惠、是れを分別虚妄の體相と名づく。大惠、是れを報佛說法の相と名づく。大惠、法佛の說法とは、心相應の體を離るるが故に、內證・聖行の境界なるが故に、大惠、是れを法佛說法の相と名づく。大惠、應化佛の所作、應佛の説は、施・戒・忍・精進・禪定・智慧の故に、陰界入解脫の故に、識想の差別の行を建立するが故に、諸々の外道の無色三摩拔提の次第の相を説くが故に、大惠、是れを應佛の所作、應佛說法の相と名づく。復た次に、大惠、

法佛の說法とは、攀緣へんねんを離れ能觀・所觀を離るるが故に、所作の相と量の相を離るるが故に、諸々の聲聞・緣覺・外道の境界に非ざるが故に」と。

又、第十卷に云わく、「大惠、應化佛は化衆生の事を作すこと、眞實相の說法に異り、內所證の法、聖智の境界を説かず」と。

【註記】

①楞伽…『入楞伽經』。

②聖行…大悲利他行。

③無色三摩拔提…無色は「無色定」、「三摩拔提」は「等至 samāpatti」。「禪定」を色界と無色界の二つに分け、色界を「初禪」

「二禪」「三禪」「四禪」の四段階に、「無色界」「空無辺処」「識無辺処」「無所有処」「非想非非想処」の「無色定」四段階とする。「無色定」の「等至」（心一境性）の意。

④攀縁・執著や執念の対象。

【私釈】

『入楞伽經』の第二に、また説くに、「また次に、大恵よ、法身仏から變化した報身仏は、一切諸法の独自の外見や共通の外見を相対的に説くから、また相対的な二項対立の本性や外見に執著するから、さらに相対的な対立意識が深層の潜在意識に染み込むから、大恵よ、これを相対的な二項対立の本性や外見と言う。大恵よ、これを報身仏の説法の特徴と言う。大恵よ、法身仏の説法とは、心の変化に相應する本性を離れているから、また（法身）の内なるサトリやそれに基づく大悲利他行の境地であるから、大恵よ、これを法身仏の説法の特徴と言う。大恵よ、応化身仏の利他行、あるいは説法は、（具に言えば）布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の「六波羅蜜」、すなわち利他の菩薩行であり、五蘊（陰）・十八界（界）・十二処（入）・八解脱を説くのであるから、また「六識」・末那識・アーラヤ識、以上八識の概念の異なった意識作用を明かすのであるから、さらには、諸々の外道が説く「無色定」の「等至」の修習次第の特徴を説くのだから、大恵よ、これを応化身仏の利他行、あるいは説法の特徴と言う。また次に、大恵よ、法身仏の説法とは、執著や執念の対象を離れ、観じる主体と観じられる客体の相対関係を離れるから、利他行（所量）と思量（能量）の特徴を離れるから、諸々の声聞・縁覺・外道の境地ではないからである」と。

また、同じく『入楞伽經』の第十に説くに、「大恵よ、応化身仏は衆生の化導を現実化するため、真実の特性については説法せず、法身仏の自内証の教法である無分別智の境地も説かない」と。

【原文】

喩曰。今依此經。三身說法各有分齊。應化佛者不說內證智境界明也。唯有法身佛說此內證智。若攬後文斯理即決之

【書き下し】

喩して曰わく、「今、此の經に依らば、三身の說法に各々分齊ぶんざい有り。應化佛は内證智の境界を説かざること明らかなり。ただ法身佛のみ有つて此の内證智を説く。若し後の文を攬とれば、斯の理即ち之を決すべし。」と。

【註記】

①分齊：内容・範圍・程度。

【私釈】

喩して言うに、「今、この『入楞伽經』によれば、法・報・応の「三身」の說法には、それぞれに応じた内容や程度がある。応化身仏は内なるサトリの智慧の境地を説かないことは明らかであり、ただ法身仏だけがこの内なるサトリの智慧の境地を説く。もし、あとに引用する文をまとめてみれば、この道理を納得できるはずである。」と。

○『五秘密經』引証喩釈段

【原文】

金剛頂五秘密經說。若於顯教修行者。久經三天無數劫然後證成無上菩提。於其中間十進九退。或證七地以所集福德智慧迴向聲聞緣覺道果。仍不能證無上菩提。若依毘盧遮那佛自受用身所說內證自覺聖智法。及大普賢金剛薩埵他受用身智。則於現生

遇逢曼荼羅阿闍梨。得入曼荼羅。爲具足羯磨以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中。由加持威德力故。於須臾頃當證無量三昧耶無量陀羅尼門。以不思議法能變易弟子俱生我執種子。應時集得身中一大阿僧祇劫所集福德智慧。則爲生在佛處。纔見曼荼羅則種金剛界種子。具受灌頂受職金剛名號。從此已後受得廣大甚深不思議法。超越二乘十地。

【書き下し】

『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（通称『五秘密儀軌』）に説くに、「若し顯教に於いて修行する者は、久しく三大無數劫を経て、然る後に無上の菩提を證成す。其の中間に於いて十進んで九退く。或いは、七地を證して集むる所の福德・智慧を以て聲聞・緣覺の道果に迴向し、仍し無上菩提を證すること能わず。若し、毘盧遮那佛の自受用身説く所の内證自覺の聖智の法、及び大普賢金剛薩埵の他受用身の智に依らば、則ち現生に於いて曼荼羅阿闍梨に遇逢し、曼荼羅に入ることを得て、羯磨を具足することを爲し、普賢三摩地を以て金剛薩埵を導入し、其の身中に入る。加持の威德力に依るが故に、

須臾の頃しゅゆ あいだに於いて、當に無量の三昧耶、無量の陀羅尼門を證すべし。不思議の法を以て、能く弟子の俱生の我執の種子を變易し、時に應じて身中に一大阿僧祇劫に集めし所の福德・智慧を集得すれば、則ち佛處に生在すると爲す。纔に曼荼羅を見れば則ち金剛界の種子を種え、具に灌頂受職の金剛名號こんこうみょうごうを受く。此れ従り已後、廣大甚深の不思議の法を受得して、一乘・十地を超越す」と。

【註記】

①金剛頂五秘密經…不空訳『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（通称『五秘密儀軌』）。

②三大無數劫…三大阿僧祇劫。果てしなく長い時間。

③七地…菩薩の「十地」の第七「遠行地」。凡夫・衆生の世間や声聞・縁覚の二乗の境地を遠く超えた段階。

④道果…修行の報果。

⑤大普賢…堅固な菩提心を持つ、の意。

⑥曼荼羅阿闍梨…行者を曼荼羅に導き入れる阿闍梨。大阿。

⑦羯磨…受戒作法。灌頂の際の「三昧耶戒」。

⑧普賢三摩地…普賢三昧耶。

⑨須臾の頃…少しの間・しばらくの間。

⑩佛處…仏の境地。

⑪灌頂受職…灌頂を受けた証し。

⑫金剛名號…灌頂名。

【私釈】

『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（通称『五秘密儀軌』）に説くに、「もし顯教で修行する人は、三大阿僧祇劫という果てしなく長い時間を経て、そののちに無上の菩提を成就する。その長い期間の間では十歩進んでも九歩退くような困難がある。あるいは、菩薩の「十地」の第七段階「遠行地」を成就したとしても、それまで積み重ねた福德や智慧を声聞・縁覚の報果として回してしまい、よってこの上ないサトリを得ることができない。もし、毘盧遮那仏（大日如来）の自受用身が説く自らの内なるサトリのすぐれた智慧の教法や、堅固な菩提心を持つ金剛薩埵の他受用身の智慧によれば、この今生において曼荼羅に導き入れてくれる灌頂阿闍梨に会い逢うて、曼荼羅に入ることができ、（三昧耶戒の）受戒作法（羯磨）を身に付け、普賢三昧耶の印言をもって金剛薩埵を曼荼羅海会に引入し、金剛薩埵の身中に入る。金剛薩埵が行者に成就の力

を加える加持の威徳力によって、速やかに、限らない「生仏一如」（三昧耶）や無数の真言の法門（陀羅尼門）を成就することができる。このような顯教ではあり得ない不思議な教法によって、弟子が生きると共に生起する我執の種子をよく変質させ、時に応じて身中に一大阿僧祇劫の時間をかけて集めた福德や智慧を積み重ねれば、仏の境地に生きることが出来る。（灌頂道場に入つて）わずかでも曼荼羅を見れば、すなわち金剛界の種子が弟子の心中に種えられ、具に灌頂を受けた証としての灌頂名を授かるのである。それ以後は、広大にして奥深い不思議な教法を受持して、二乗の声聞・縁覺や「十地」の菩薩の境地を超えていく」と。

【付記】

ここに説かれた『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（通称『五秘密儀軌』）の引用部分（「若依毘盧遮那佛自受用身・超越二乘十地」）は、灌頂などの秘儀（事作法）に言及するので、伝統教学では「不読段」とする。

【原文】

喩曰顯教所談言斷心滅之境者。所謂法身毘盧遮那内證智境界也。若依瓔珞經。毘盧遮那是理法身。盧遮那則智法身。釋迦名化身。然則是金剛頂經所談毘盧遮那佛自受用身所說内證自覺聖智法者。此則理智法身之境界也

【書き下し】

喩して曰わく、「顯教の談する所の言斷心滅の境とは、謂わゆる、法身毘盧遮那の内證智の境界なり。若し瓔珞經に依れば、毘盧遮那は理法身、盧遮那は則ち智法身、釋迦を化身と名づく。然れば則ち、是の金剛頂經の談する所の毘盧遮那佛の自受用身説く所の内證自覺の聖智の法とは、此れ則ち理智法身の境界なり。

【註記】

① 瓔珞經…『菩薩瓔珞本業經』。中国で撰述された偽経説がある。

② 理法身…胎藏界大日如来。現象世界の背後にある宇宙的な真理と、その真理によつて凡夫・衆生を化導する大悲心を胎藏する法身。

③ 智法身…金剛界大日如来。現象世界の背後にある宇宙的な真理である「法界体性智」「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」の「五智」を具有する法身。

宗祖大師の『秘藏記』に、「胎藏とは理なり、金剛とは智なり」「理智相離れず、理より智用起こり、智より大悲起こる」とある。

【私釈】

喩して説くに、「顯教が言う言葉では言い表せず心意識も滅した境地とは、いわゆる、法身毘盧遮那（大日如来）の内なるサトリの智慧の境地である。もし、『菩薩瓔珞本業經』によれば、毘盧遮那は理法身、盧遮那は智法身、釈尊を變化身と言う。であるから、この『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』が説く毘盧遮那仏の自受用身の自らの内なるサトリの智慧の境地の教法とは、すなわち理法身と智法身の境地の両方である」と。

【原文】

又金剛頂瑜祇經云。「金剛界遍照如来以五智所成四種法身。於本有金剛界金剛心殿中。與自性所成眷屬乃至微細法身秘密心地超過十地身語心金剛等云云又云。諸地菩薩無有能見俱不覺知云云。又分別聖位經云。自受用佛從心流出無量菩薩皆同一性。謂金剛性。如是諸佛菩薩自受法樂故各說自證三密門云云。如是等文並是自性自理智法身之境。是法身等自受法樂故說此內證智境界。與彼楞伽法身說內證智境應化不說文冥會也。此則顯教所絕離之處也。若有智人纔目斯文。雲霧忽朗關鑰自開。井

底之鱗逸泳巨海。蕃離之翼翰飛寥廓。百年生盲乍辨乳色。萬劫暗夜頓舉日光。

【書き下し】

又、金剛頂瑜祇經に云わく、「金剛界遍照如來、五智所成の四種法身を以って、本有の金剛界金剛心殿の中に於いて、自性所成の眷屬、乃至微細法身の祕密心地の十地を超過せる身・語・心の金剛等と與なりき」云云と。又、云わく、「諸地の菩薩も能く見ること有ること無し。俱に覺知せず」云云と。又、分別聖位經に云わく、「自受用佛は、心従り無量の菩薩を流出す。皆、同一の性なり。謂わく、金剛の性なり。是くの如くの諸佛・菩薩は、自受法樂の故に各々自證の三密門を説く」云云。是くの如く等の文は、並びに是れ自性・自用の理智法身の境なり。是の法身等は自受法樂の故に、此の内證智の境界を説く。彼の楞伽の「法身は内證智の境を説き、應化は説かず」の文と冥會なり。此れ則ち顯教の絶離する所の處なり。若し有智の人、纔に斯の文を目せば、雲霧忽ち朗かんじ關鑰自ら開く。井底の鱗、逸に巨海を泳ぐ。蕃離の翼、翰く寥廓に飛ぶ。百年の生盲、乍ち乳の色を辨え、萬劫の暗夜、頓に日光を舉ぐ」と。

【註記】

- ①金剛頂瑜祇經…金剛智詔『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』。
- ②遍照如來…大日如來。
- ③金剛心殿…堅固な菩提心の樓閣。
- ④分別聖位經…伝不空詔『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』。大正藏經では不空詔『略述金剛頂瑜伽修證法門儀』。
- ⑤楞伽…『入楞伽經』。

⑥ 關鑰：疑問の鍵。

⑦ 蕃籬：駕籠に閉じ込められている。

【私釈】

また、『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（通称『瑜祇經』）に説くに、『金剛界の遍照如來（大日如來）は、「法界体性智」「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」の「五智」から成る「四種法身」（「自性身」「受用身」「變化身」「等流身」）によって、金剛界の本来具有の堅固な菩提心の樓閣のなかで、自性身から生じた脇侍仏や極めて微細な法身の秘密の境地で、菩薩の「十地」をはるかに超えた段階の、堅固な身・語・心の「三密」に住している」云々と。また、同じく説くに、「十地」の諸々の修行段階にある菩薩もそれを見ることはできない。それぞれ覚ることもない」云々と。また、『金剛頂瑜伽三千七尊分別聖位法門』に説くに、「自受用身の法身仏は、心中から数限りない（十六大菩薩などの）菩薩を流出する。みな、同一の本性を持ち、堅固な本性を持っている。このような、諸々の仏・菩薩は、自らのサトリを樂しむために、それぞれ自らのサトリの身・語・心を説く」と、云云。

以上の文は、それぞれ自性身・自受用身の理法身・智法身の境地を言っている。この法身は自らのサトリを樂しむために、この内なるサトリの智慧の境地を説く。あの『入楞伽經』の「法身は内なるサトリの智慧の境地を説き、応化身は説かない」という文と一致している。これはすなわち、頭教がはるかにかけ離れている次元である。もし、智慧ある人なら、わすかでもこの文を目にすれば、雲や霧がたちまち晴れ、疑問の鍵は自ら開く。井戸の底の魚たちも、ほしいままに大海を泳ぐ。駕籠に閉じ込められていた鳥たちも、高く広大な空を飛ぶ。生まれつき目が見えない人も、たちまちに乳の色をさぐり当て、久しく長い暗夜も、すぐに日の光が差す」と。

【付記】

ここに説かれた『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（通称『瑜祇經』）の引用部分（「金剛界遍照如來身語心金剛等」）ならびに「諸地菩薩俱不覺知」は、灌頂などの秘儀（事作法）に言及するので、伝統教学では「不誦段」とする。

○『聖位經』引証喻釈段

【原文】

金剛頂分別聖位經云。眞言陀羅尼宗者。一切如來祕奧之教自覺聖智修證法門。亦是入一切如來海會壇受菩薩職位。超過三界受佛教勅三摩地門。具是因緣頓集功德廣大智慧。於無上菩提皆不退轉。離諸天魔一切煩惱及諸罪障。念念消融證佛四種身。謂自性身受用身變化身等流身。滿足五智三十七等不共佛法門此標宗大意然如來變化身於閻浮提摩揭陀國菩提道場成等正覺。爲地前菩薩聲聞緣覺凡夫說三乘教法。或依他意趣說。或依自意趣說。種種根器種種方便如說修行得人天果報。或得三乘解脫果。或進或退於無上菩提。三無數大劫修行勤苦方得成佛。王宮生雙樹滅遺身舍利。起塔供養感受人天勝妙果報及涅槃因此略表釋迦如來之教及得益文。不同報身毘盧遮那於色界頂第四禪阿迦尼吒天宮。雲集盡虛空遍法界一切諸佛。十地滿足諸大菩薩證明。驚覺身心頓證無上菩提此表他受用身說法得益自受用佛從心流出無量菩薩皆同一性。謂金剛性。對遍照如來受灌頂職位。彼等菩薩各說三密門。以獻毘盧遮那及一切如來。便請加持教勅。毘盧遮那佛言。汝等將來於無量世界爲最上乘者。令得現生世出世間悉地成就。彼諸菩薩受如來勅已。頂禮佛足圍繞毘盧遮那佛已。各還本方本位成爲五輪持本標幟。若見若聞若入輪壇。能斷有情五趣輪轉生死業障。於五解脫輪中從一佛至一佛供養承事。皆令獲得無上菩提成決定性。猶如金剛不可沮壞。此即毘盧遮那聖衆集會。便爲現證萃都婆塔。一一菩薩一一金剛各住本三昧住自解脫。皆住大悲願力廣利有情。若見若聞悉證三昧。功德智慧頓集成就矣。

【書き下し】

金剛頂分別聖位經に云わく、「眞言陀羅尼宗とは、一切如來の祕奥の教、自覺聖智の修證の法門なり。亦た、是れ一切如來

の海會の壇に入つて菩薩の職位しきいを受け、三界を超過して佛の教勅を受くる三摩地門なり。是の因縁を具すれば頓に功德廣大の智慧を集め、無上菩提に於いて皆、退轉せず。諸々の天魔、一切の煩惱、及び諸々の罪障を離れ、念念に消融し佛の四種身を證す。謂わく、自性身・受用身・變化身・等流身なり。五智・三十七等の不共の佛の法門を滿足す」「(亦是く仏法門、不讀段、此れ宗の大意を標す)。

然も、如來の變化身は、閻浮提、摩揭陀國の菩提道場に於いて等正覺を成じ、地前の菩薩・聲聞・緣覺・凡夫の爲に三乗の教法を説く。或いは他意趣に依つて説き、或いは自意趣に依つて説く。種種の根器・種種方便もて説の如く修行すれば人天の果報を得。或いは三乗の解脱の果を得。或いは進み或いは退いて、無上菩提に於いて、三無數大劫に修行し、勤苦して方に成佛を得。王宮に生まれ雙樹に滅して身の舍利を遺す。塔を起てて供養すれば、人天の勝妙の果報、及び涅槃の因を感受す(此れ、略して釋迦如來の教及び得益を表わす文なり)。

報身毘盧遮那の色界の頂、第四禪の阿迦吒天宮に於いて、雲集せる盡虛空・遍法界の一切の諸佛、十地を滿足せる諸大菩薩を證明とし、身心を驚覺して頓に無上菩提を證するに同じからず(此れ、他受用身の説法の得益を表わす)。

「自受用佛は心従り無量の菩薩を流出す、皆同一の性なり。謂わゆる金剛の性なり。遍照如來に對して灌頂の職位を受く。

彼等の菩薩、各々三密門を説いて以つて毘盧遮那及び一切如來に獻じ、便ち加持・教勅を請う。毘盧遮那佛が言さく、「汝等、將來無量の世界に於いて、最上の乗者の爲に、現生に世出世間の悉地成就を得せしむべし」と。彼の諸々の菩薩、如來の勅を受け已つて佛足に頂禮し、毘盧遮那佛を圍繞し已つて、各々本方本位に還り五輪たるを成じ本標幟を持す。若し見、若し聞き、若し輪壇に入らば、能く有情の五趣輪轉の生死の業障を斷じ、五解脱輪の中に於いて一佛従り一佛に至るまで供養承事して、皆、無上菩提を獲得し決定の性を成せせしむ。猶、金剛の沮壞そえすべからざるが如し。此れ即ち毘盧遮那聖衆の集會なり。便ち現證の窣都婆塔と爲る。一一の菩薩、一一の金剛、各々本三昧に住し自解脱に住す。皆、大悲願力に住して廣く

有情を利す。若しは見、若しは聞き、悉く三昧を證し、功德・智慧、頓に集つて成就す」と。(此れ、自性身・自受用身の說法及び得益を説く)。

【註記】

- ①眞言陀羅尼宗…眞言・陀羅尼を説き唱える宗。眞言密教。眞言宗。
- ②一切如來…大日如來。
- ③自覺聖智…自内証智。内なるサトリの智慧。
- ④修證の法門…内なるサトリの智慧を實際に説き明かす法門。
- ⑤海會の壇…曼荼羅(海會)の壇。
- ⑥菩薩の職位…菩薩という修行位階。
- ⑦三摩地門…本尊と行者が無二体(三昧耶)となる法門。
- ⑧因縁…因果律・因果關係。
- ⑨天魔…欲界の「六欲天」の第六「魔王波旬」。「他化自在天」。
- ⑩四種身…「四種法身」。
- ⑪三十七…金剛界三十七尊。
- ⑫閻浮提…人間が住む大陸。須弥山の南方にある島、南閻浮提。
- ⑬地前…菩薩の「十地」より以前の修行位。
- ⑭王宮…釈尊が生まれたインド・コーサラ国の属国カピラヴァストウの王宮。
- ⑮雙樹…インド・クシナガラ、釈尊入滅の地の沙羅双樹。
- ⑯塔…仏舍利塔。

①⑦阿迦尼吒天宮…色界の最上「色究竟天」。

①⑧本方本位…曼荼羅の本来の位置。

①⑨五輪…五解脱輪。五仏の円輪（月輪）。

②⑩本標識…五鈷杵など自らを象徴する持物。

②⑪沮壞…壊す。

②⑫現證の窣都婆塔…金剛界大日如来が現に顕われた窣都婆塔（法界塔婆）

【私釈】

『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』（通称《分別聖位經》）に説くに、「真言陀羅尼宗と言うのは、大日如来（一切如来）の奥深い深秘の教法であり、内なるサトリの智慧を実際に説き明かす法門である。《また、これは大日如来の曼荼羅（海会）の壇に入つて、菩薩という修行位階を受け、三界を超えて、仏の教勅を受ける生仏不二の法門である。この因果律を保持すれば、すみやかにその功德が広大な智慧を積み重ね、この上ないサトリの境地に在つて元には戻らない。諸々の天魔や、あらゆる煩惱や、諸々の罪障を離れ、時々刻々それらは消えてなくなり。四種の仏身を成就する。すなわち、自性身・受用身・變化身・等流身である。『五智』や『金剛界三十七尊』といった顕教にはない仏の法門を満たしている」と。

然るに、法身如来の變化身（釈尊）は、人間が住む南閻浮提の、（インドの）マガダ（摩揭陀）国の菩提道場においてサトリ（等正覺）を開き、「十地」以前の菩薩・声聞・縁覺・凡夫のために三乗の教法を説いた。時には自分以外の人の意向に沿つて説き、時には自らの意向に従つて説いた。さまざまな機根に随い、さまざまな方便によつて、釈尊の説く所の通りに修行すれば、人間界や天界に生じる報果が得られ、あるいは「三乗」の段階において解脱の報果が得られる。（その修行は）あるいは進みあるいは退いて、この上ないサトリの境地をめざし、三大阿僧祇劫の果てしなく長い時間を修行し、刻苦勉強してまさに成仏が得られるものである。（釈尊は）インド・コーサラ国の属国カピラヴァストウの王宮に生まれ、クシナガラ

羅双樹の下で入滅し、その身体の骨（舍利）を遺した。仏舍利塔を建てて供養すれば、人間界・天界のすぐれた報果や、涅槃の因種を感受することができる（これは、略して釈迦如來の教法と得益を表わす文である）。

報身の毘盧遮那は、色界の頂きにある第四禪「色究竟天」（阿迦尼吒天宮）において、湧き出る雲のように集まった、虚空を尽くし（盡虚空）遍く法界を満たす（遍法界）あらゆる仏や、「十地」を成就した菩薩たちをその証明とし、その仏・菩薩の身心を奮い起こさせ、速やかにこの上ないサトリの境地を成就させるが、それは今述べた釈尊の變化身のことと同じではない（これは、他受用身の説法の得益を表わす）。「自受用身仏は、心中から限りなく多くの菩薩を流出する。みな同一の本性を持ち、堅固な本性を持っている。大日如來によつて灌頂を受ける資格を与えられている。これらの菩薩は、それぞれに生仏一如の「三密」の法門を説いて、大日如來や一切の如來たちに獻じ、加持と教勅を請うのである。大日如來が言うに、「あなた方は、將來の限りなく多くの世界において、最上の教法を修學する人のために、今の生において、世俗と世俗を超えた煩惱のない世界におけるサトリの境地を成就させなければならない」と。この諸々の菩薩は、大日如來の教勅を受けて、その足元にひざまずき、足の甲に頭をつけて礼拝し、如來を囲んで、それぞれ曼荼羅の本来の位置に戻り、中央の大日、四方の四仏の五つの月輪のなかに入り、自らを象徴する持物を持った。もし誰か、これを見、これを聞き、曼荼羅壇（の五解脱輪という月輪）に入るなら、生ある者が生死をくり返す五つの輪廻の宿業の妨げを断ち、五解脱輪に住する一仏から一仏へと供養して仕え従い、みなこの上ないサトリを得て、成仏が決定している仏性を成就させる。金剛石を壊すことができないのと同じである。五解脱輪は、中央の大日如來を囲む諸仏の集会である。すなわち、これが金剛界大日如來が現に顕われた摩訶婆塔（法界塔婆）である。一尊一尊の菩薩、一体一体の金剛は、それぞれ本来の三昧に住し、自らの解脱に住し、みな、大悲の誓願力に住して、広く生ある者を利益する。あるいはこの菩薩や金剛を見、あるいはその説法を聞いて、ことごとく深い瞑想の境地（三昧）を成就し、その功德や智慧を、すぐに集めてそれらを成就する」と。（此れ、自性身・自受用身の説法及び得益を説く）と。

【付記】

ここに説かれた『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』（通称『分別聖位經』）の引用部分（「自受用佛く證三密門」「亦是入一切く共佛法門」「自受用佛く頓集成仏矣」）は、灌頂などの秘儀（事作法）に言及するので、伝統教学では「不読段」として解説しない。

【原文】

喩曰。此經明説三身説法差別淺深成佛遲速勝劣。與彼楞伽三身説法相義符合。顯學智人皆遵法身不説法。此義不然。顯密二教差別如此。審察審察。

【書き下し】

喩して曰わく、「此の經に明らかに三身の説法の差別・淺深、成佛の遲速・勝劣を説く。彼の楞伽の三身説法の相と義符合す。顯學の智人、皆、法身は説法せずと導^いう。此の義、然らず。顯密二教差別は此の如し。審に察し審に察せよ」と。

【私釈】

喩して言うに、「この『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』に、明らかに自性・受用・變化の「三身」の説法のちがいや深い浅い、また成仏の速い遅いや優劣を説いている。先の『入楞伽經』の「三身」説法の内容や意味と符合する。顯教を学ぶ智慧ある人はみな、法身は説法しないと云うが、それはそうではない。顯密二教のちがいは以上の通りである。詳しく考察してくれるように」と。

●引証註解段

○『瑜祇經』引証註解段

【原文】

金剛頂一切瑜祇經云。一時薄伽梵金剛界遍照如來此以總句歎諸尊德以五智所成四種法身謂五智者。一大圓鏡智。二平等性智。三妙觀察智。四成所作智。五法界體性智。即是五方佛也。如次東南西北中配知之。四種法身者。一自性身。二受用身。三變化身。四等流身。此四種身具豎橫二義。橫則自利豎則利他。深義更問於本有金剛界此明性德法界體性智自在大三昧耶此則妙觀察智也自覺本初平等性智大菩提心普賢滿月大圓鏡智也不壞金剛光明心殿中謂不壞金剛者總歎諸尊常住身。光明心者歎心之覺德。殿者明身心互爲能住所住。中者語密亦離邊義。此是三密。離彼五邊百非獨住非中之中。等覺十地不能見聞。所謂法身自證之境界也。亦是成所作智。三密業用皆從此生。已上五句總明住處。住處名則五佛祕號妙德也。密意可知也與自性所成眷屬金剛手等十六大菩薩。及四攝行天女使金剛內外八供養金剛天女使。各各以本誓加持自住金剛月輪持本三摩地「標幟」。皆以微細法身祕密心地超過十地身語心金剛此明三十七根本自性法身內眷屬智各於五智光明峯杵出現五億俱胝微細金剛遍滿虛空法界。諸地菩薩無有能見俱不覺知。熾然光明自在威力此明三十七尊根本五智各具恒沙性德。若約次第有出現之文。若據本有俱時圓滿如是諸德常於三世不壞化身利樂有情無時暫息謂三世者三密也。不壞表金剛。化者業用。言常以金剛三密業用亘於三世令自他有情受妙法樂也以金剛自性阿閼佛印光明遍照寶光佛印清淨不染清淨法界身印種種業用羯磨智身印方便加持方便受用身印救度有情大慈悲德也演金剛乘說法智德唯一金剛圓滿壇德智慧能斷煩惱利智德也。已上九句即是五印四德也。一一佛印各具四德。自受用故常恒演說金剛智慧一乘以此甚深祕密心地普賢自性常住法身攝諸菩薩此明自性法身攝自眷屬。又通攝他舉自兼他也唯此佛利盡以金剛自性清淨所成密嚴華嚴謂密者金剛三密。華者開敷覺華。嚴者具種種德。言以恒沙佛德塵數三密莊嚴身土。是名曼荼羅。又金剛表智清淨表理。自性通二。言彼諸尊各具自然理智以諸大悲行願圓滿有情福智資糧之所成就謂上所稱恒沙諸尊各具普賢行願方便以五智光照常住三世。無有暫息平等智身言五智者五大所成智。一一大各具智印。三世者三密三身。無有暫息者如此諸尊業用無間。以此佛業利樂自他。平等智身者。智者心用。身者心體。平等者普遍。言五大所成三密

智印其數無量。身及心智遍滿遍滿三種世間。勤作佛事剎那不休。如此文句一文二一句皆是如來密號也。二乘凡夫但解句義不能解字義。但解字相不得知字之密號。覽之智人以顯句義莫傷祕意。若見薩埵釋經此義可知。莫怪莫怪

【書き下し】

金剛頂一切瑜祇經に云わく、「一時、薄伽梵、金剛界遍照如來、（此れ、總句を以つて諸尊の徳を歎ず）五智所成の四種法身を以つて（謂く、五智とは、一に大圓鏡智、二に平等性智、三に妙觀察智、四に成所作智、五に法界體性智なり。即ち是れ五方の佛なり。次の如く東・南・西・北・中に配して之を知れ。四種法身とは、一に自性身、二に受用身、三に變化身、四に等流身なり。此の四種身に豎横の二義を具す。横は則ち自利、豎は則ち利他なり。深義は更に問え）。本有の金剛界（此れ、性徳法界體性智を明かす）、自在大三昧耶（此れ則ち妙觀察智なり）、自覺本初（平等性智）。大菩提心普賢滿月（大圓鏡智なり）不壞金剛光明心殿の「中」に於いて（謂わく、不壞金剛とは、總じて諸尊の常住の身を歎ず。光明心とは、心の覺徳を歎ず。殿とは、身心互いに能住・所住と爲るを明かす。「中」とは、語密亦た離邊の義なり。此れは是れ三密なり。彼の五邊・百非を離れて獨り非の中に住す。等覺・十地も見聞すること能わず。謂わゆる法身自證の境界なり。亦た是れ成所作智なり。三密の業用、皆此れ従り生ず。已上の五句は總じて住處を明かす。住處の名は則ち五佛の祕號妙徳なり。密意知りぬべし）。自性所成の眷屬、金剛手等の十六大菩薩、及び四攝行の天女使、金剛の内外の八供養金剛天女使と與なり。各々本誓の加持を以つて、自ら金剛月輪に住し、本三摩地の標幟を持す。皆以つて、微細法身祕密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり。（此れ、三十七の根本自性法身の内眷屬の智を明かす）。各々、五智の光明峯杵に於いて、五億俱胝の微細金剛を出現して、虚空法界に遍滿せり。諸地の菩薩も能く見ること有ること無し。俱に覺知せず。熾然の光明、自在の威力あり。（此れ、三十七尊の根本の五智に各々恒沙の性徳を具すことを明かす。若し次第に約さば、出現の文有り。若し本有に據らば、俱時に是くの如くの諸徳を圓滿す）。常に三世に於いて、不壞の化身もて有情を利樂して、時として暫く息むこと無し。（謂わく、

三世とは三密なり。不壞とは金剛を表わす。化とは業用^{ごうよう}なり。言わく、常に金剛の三密の業用を以つて、三世に亘つて自他の有情をして妙法の樂を受けしむ。金剛自性（阿閼佛の印）と光明遍照（寶光佛の印）と清淨不染（清淨法界身の印）と種業用（羯磨智身の印）と方便加持（方便受用身の印）を以つて、有情を救度し（大慈悲の徳なり）、金剛乘を演べたり（説法の智徳）。唯一の金剛（圓滿壇の徳、智慧なり）もて能く煩惱を斷ず。（利智の徳なり。已上の九句は即ち是れ五印四徳なり。一一の佛印に各々四徳を具す。自受用の故に常恒に金剛智慧の一乘を演説せり）。此の甚深祕密心地、普賢自性、常住法身を以つて、諸々の菩薩を攝す（此れ、自性法身の自眷屬を攝することを明かす。又、通じて他を攝す。自らを擧げて他を兼ねるなり）。唯し、此の佛刹は盡く金剛自性清淨を以つて成じる所の密嚴華嚴なり。（謂く、密とは金剛の三密なり。華とは開敷覺華なり。嚴とは種種の徳を具す。言わく、恒沙の佛徳・塵數の三密を以つて身土を莊嚴す。是れを曼荼羅と名づく。又、金剛は智を表わし清淨は理を表わし、自性は二に通ず。言わく、彼の諸尊に各々自然の理智を具す）。諸々の大悲・行願圓滿するを以つて、有情の福智資糧の成就する所なり。（謂わく、上に稱する所の恒沙の諸尊に各々普賢行願の方便を具す）。五智の光照、三世に常住するを以つて、暫く息むこと有ること無き平等の智身なり。（五智と言うは、五大所成の智なり。一の大に各々智印を具す。三世とは三密・三身なり。暫く息むこと有ること無しとは、此くの如くの諸尊、業用無間なり。此の佛業を以つて、自他を利樂す。平等の智身とは、智とは心の用、身とは心の體なり。平等とは普遍なり。言わく、五大所成の三密の智印は、其の數無量なり。身及び心智、三種世間に遍滿遍滿し、佛事を動作して刹那も休まず。此くの如くの文句、一一の文、一一の句、皆、是れ如來の密號なり。二乘・凡夫は但だ句義を解し字義を解すこと能わず。但だ字相を解し字の密號を知ることを得ず。之を覽る智人、顯の句義を以つて祕意を傷つけること莫れ。若し薩埵の釋經を見れば、此の義知るべし。怪しむ莫れ怪しむ莫れ」と。

①本有の金剛界…本来身に具有している金剛界。

②自在大三昧耶…自在にあらゆる凡夫・衆生を化導し尽そうとする仏の本誓。

③自覺本初…本来は凡聖不二・自他平等の自覺。

④大菩提心普賢満月…堅固で満月のように円い菩提心。

⑤不壞金剛光明心殿…金剛石のように堅固で壊れることなく、仏智の光明の輝きに満ちた心の宮殿。

以上の五句は「五智」の住処。

⑥非中の中…単に対立二項の間ではない「中」。

⑥自性所成の眷屬…自性身（大日如来）の眷屬（「五仏」）。

⑦金剛手等の十六大菩薩…金剛界の十六大菩薩。「金剛薩埵」「金剛王」「金剛愛」「金剛喜」（東方）、「金剛宝」「金剛光」「金剛幢」「金剛笑」（南方）、「金剛法」「金剛利」「金剛因」「金剛語」（西方）、「金剛葉」「金剛護」「金剛牙」「金剛拳」（北方）。
⑧四攝行の天女使…「四摂」の女菩薩。「金剛鉤」「金剛索」「金剛鎖」「金剛鈴」。凡夫・衆生をマンダラに導き入れる四門護の菩薩。

⑨内外の八供養金剛天女使…大日如来が四仏を供養するために流出した内供養の四女菩薩（「金剛嬉」「金剛曼」「金剛歌」「金剛舞」）と、四仏が大日如来を供養するために流出した外供養の四女菩薩（「金剛香」「金剛華」「金剛燈」「金剛塗」）。

⑩微細法身秘密心地…極めて微妙な法身の秘密の境地

⑪峯杵…五鉈杵の先端・突先。

⑫五億俱胝…十の七乗×五億。数えきれないほどの無数の。

⑬恒沙…ガンジス河の砂の数ほどの無数の。

⑭出現の文…『金剛頂分別聖位經』や『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』の經文。

⑮本有…仏・菩薩がもともと具有している。

①⑥業用…はたらき。

①⑦金剛自性…堅固な菩提心という本性。

①⑧光明遍照…智慧の光明が遍く照らすこと。

①⑨清淨不染…本来清淨で煩惱に染まらない。

②⑩種種業用…①⑥に同じ。種々のはたらき。

②⑪方便加持…大悲方便の加持（はたらきかけ）。

②⑫金剛乘…真言密教。

②⑬佛印…仏の象徴。

②⑭普賢自性…普賢菩薩の堅固な自性。

②⑮密嚴華嚴…花で莊嚴された密嚴国土。

②⑯開敷覺華…花開いたサトリの花。

②⑰行願…菩薩行の慈悲利他の誓願。

②⑱資糧…集めて積む。備え。準備。

②⑲普賢行願の方便…②⑰に同じ。

③⑰智印…智慧の標幟。

③⑱佛業…菩薩行。

③⑳三種世間…「衆生世間」「国土世間」「五陰世間」。

③㉑佛事…③⑱に同じ。

③㉒密號…如来の説法。

③㉓智人…学僧・学匠。

③⑥ 顯・顯教。

③⑦ 薩埵の釋經…金剛薩埵の境地を説いた『理趣釈(經)』。

【私釈】

『金剛頂一切瑜祇經』に説くに、「教主大日如来とその説法を聞く諸眷属の気持ちが一致したその時、世尊(薄伽梵)、大日如来(金剛界遍照如来)(これは、総徳の本尊大日を説く句で諸眷属の徳を讃嘆する)は、「五智」から成る「四種法身」によつて(「五智」とは、一に大円鏡智、二に平等性智、三に妙觀察智、四に成所作智、五に法界体性智である。つまり五方の五仏である。東・南・西・北・中央に配して知るがよい。「四種法身」とは、一に自性身、二に受用身、三に變化身、四に等流身である。この「四種法身」に豎と横の二つの意味がある。横とは自利、豎とは利他である。それ以上の深い意味は然るべき依止師に問うように)、本来身に具有している金剛界(これは、本来的な仏徳である法界体性智を明かす)、自在にあらゆる凡夫・衆生を化導し尽そうとする仏の本誓(自在大三昧耶)(これは、妙觀察智である)、本来は凡聖不二・自他平等の自覺(自覺本初)(平等性智)、堅固で満月のように円い菩提心(大菩提心普賢満月)(大円鏡智である)、金剛石のように堅固で壊れることなく、仏智の光明の輝きに満ちた心の宮殿(不壊金剛光明心殿)のなかで(不壊金剛とは、總体的に「五仏」の常住仏身を讃嘆し、光明心とは、心のサトリの智慧の仏徳を讃嘆し、殿とは、身・心がお互いに住するものと住されるものの主客関係となることを明かし、「中」とは、語密の言語道断のことであり、また相對二辺を離れているという意味である。以上、身・心で身密・意密、語密で口密の「三密」である。あの二項対立の五辺や百回の否定を離れ、単に対立二項の間ではない非中の「中」の境地である。この境地は、菩薩の修行位の「等覺」や「十地」に有つても見聞することはできない。いわゆる、法身の内なるサトリ(自内証)の境地である。これは成所作智である。「三密」の実際のはたらきは、みなこの智から生じる。以上の「五智」を説く句は、総じて「五仏」の住する境地を明かしたのである。その名称は「五仏」の秘密の名号でありすぐれた仏徳である。秘奥の意味を知っておくことである)、自性身(大日如来)の眷属(「五仏」)は、自からが

流出した金剛手菩薩など十六大菩薩や、四摂の女菩薩や、堅固な内外の八供養の女菩薩などとともに在って、それぞれに本誓として具する加持力によって、自ら堅固な菩提心の月輪のなかに住し、本来のサトリの境地を表わす象徴物（三昧耶）を持っている。みな、極めて微妙な法身の秘密の境地で、菩薩の「十地」をはるかに超越した身・語・心の「三密」の堅固さを意味している（これは、三十七尊の根本である大日如来（自性法身）の内なる眷属の智慧を明かしたものである）。（三十七尊は）それぞれ「五智」の光明が輝く五钴金剛杵の突っ先から、五億俱胝の数えきれないほどの微妙で堅固なサトリの智慧を放ち、虚空の法界に満ち溢れさせている。それは、諸々の「十地」の菩薩には見ることができない。誰にも知ることができないのである。明々とした智慧の光明、融通無碍の自在な威神力がある。（これは、三十七尊の根本である「五智」にそれぞれガンジス河の砂数ほどの無数の仏徳を具えていることを明かしたものである。もし、次第に沿っての説明なら、すでに現出している『金剛頂分別聖位經』や『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』といった経文がある。もし、仏・菩薩がもともと具有しているという意味で言えば、ともにこのような仏徳を身に付けているという意味である）。

常に三十七尊は、過去・現在・未来の「三世」において、堅固な変化身となつて生ある者を利益し、一時も休むことがない（「三世」とは「三密」である。不壊とは堅固（金剛）の意味である。化とは変化身のはたらき、化導の意味である。すなわち、常に堅固な「三密」のはたらきで、過去・現在・未来の「三世」において、自他の生ある者にすぐれた教法の楽しみを受けさせるという意味である）。堅固な菩提心という本性（金剛自性）（阿閼如来の象徴）と、智慧の光明が遍く照らすこと（光明遍照）（宝生如来の象徴）と、本来清浄で煩惱に染まらない（清浄不染）（阿弥陀如来の象徴）と、種々のはたらき（種々業用）と大悲方便の加持（方便加持）（不空成就如来の象徴）によって生ある者を救済し（大慈悲の徳である）、真言密教の教えを説き（説法の智慧）、唯一の堅固な智慧（円壇（曼荼羅）の徳、すなわち智慧）によってよく煩惱を断つ（鋭利な智慧の徳である。以上の九つの句は、五つの象徴と四つの智慧を説いた。一つ一つの仏の象徴にそれぞれ四つの智慧を具有する。自受用法楽のために常に堅固な内なるサトリの智慧、その一乗を説いている）。この甚だ意味深い秘密の境地において、普賢菩薩の堅固な自性によって、常住の自性法身（大日如来）は諸々の菩薩を流出してそれを自らに包摂している（これ、自性

法身（大日如来）が自らの眷属を包摂することを明かしている。また、共通して他の眷属も摂している。自眷属を挙げて、他の眷属のことを兼ねている）。ただし、この仏国土はことごとく堅固で本性清浄な、花で飾られ（華嚴）、堅固な「三密」の徳で莊嚴された仏国土である。（密とは、堅固な身・口・意の「三密」である。華とは、花開いたサトリの花である。嚴とは、種々の仏徳を具有する意味である。すなわち、ガンジス河の砂数ほどの無数の仏徳が、塵の数ほどの「三密」に具有されて仏の浄土を莊嚴しているという意味である。これを曼荼羅と言う。また、金剛とは智を表わし、清浄とは理を表わし、自性とは理智の二つに通じる。すなわち、これら三十七尊にそれぞれ本然的に客観的な理と主観的な智を具すということである。（三十七尊は）諸々の大悲心と菩薩行の誓願を成就して、生ある者に福德と智慧を集め積むことを成就させる。（すなわち、上述のガンジス河の砂数ほどの無数の諸尊に、それぞれ普賢菩薩の堅固な菩薩行の誓願という方便を具有しているという意味）。「五智」の光明は過去・現在・未来の「三世」に常住するから、一時も休むことなく遍く法界に遍満し、慈悲化導する智慧の仏身である（「五智」と言うのは、「五大」から成る智慧である。一つ一つの「大」にそれぞれ「五智」の標幟を具有する。「三世」とは身・口・意の「三密」であり、自性・受用・変化の「三身」である。暫く息むことと有ること無しとは、三十七尊はそのはたらきに間断がないことである。この菩薩行によって自らと他者を利益する。平等の智身と言うのかの、智とは心のはたらき、身とは心の本体である。平等とは、法界に遍満しているという意味である。言えば、「五大」から成る「三密」の智慧の標幟は、その数が無数である。身も心も智慧も三種世間に遍満し、菩薩行を行って一瞬も休まない。このような経文の、一つ一つの文や一つ一つの句はみな、大日如来の凡夫・衆生には気がつかない説法（密号）であって、声聞。縁覚の「二乗」や凡夫は、ただ経文の意味を理解するだけで、経文の文字の深い意味を理解することはできない。ただ、文字の外見だけを理解し、文字の奥にある秘せられた如来の説法を知ることがない。密教經典を閱覽する学僧は、顕教の語句解釈で奥に隠れている深い意味を傷つけてはならず、もし金剛薩埵のサトリの境地を説く『般若理趣釈（経）』を見れば、この意味がわかるはずである。疑うことはない」と。（以上、不読段）

【付記】

ここに説かれた『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（通称『瑜祇經』）の引用部分（「一時薄伽梵、平等智身」）は、灌頂などの秘儀（事作法）に言及するので、伝統教学では「不読段」として解説しない。

○『大日經』引証註解段

【原文】

大毘盧遮那經云。一時薄伽梵住如來加持廣大金剛法界宮。一切持金剛者皆悉集會。其金剛名曰虛空無垢執金剛乃至金剛手祕密主。如是上首十佛刹微塵數等持金剛衆俱。及普賢菩薩妙吉祥菩薩乃至諸大菩薩。前後圍繞而演說法。所謂越三時如來之日加持故。身語意平等句法門此明自性身說法時彼菩薩普賢爲上首。諸執金剛祕密主爲上首。毘盧遮那如來加持故。奮迅示現身無盡莊嚴藏。如是奮迅示現語意平等無盡莊嚴藏此明受用身說法非從毘盧遮那佛身或語或意生。一切處起滅邊際不可得。而毘盧遮那一切身業一切語業一切意業。一切處一切時於有情界宣說眞言道句法此明變化身說法又現執金剛普賢蓮華手菩薩等像貌。普於十方宣說眞言道清淨句法此明等流身說法。言等者舉金剛蓮華手。兼等外金剛部諸尊。此經四種法身亦具豎橫二義。文勢可知也又云。爾時毘盧遮那世尊告執金剛祕密主。若入大覺世尊大智灌頂地。自見住於三三昧耶句。祕密主入薄伽梵大智灌頂。即以陀羅尼形示現佛事。爾時大覺世尊隨住一切諸衆生前。施作佛事演說三三昧耶句。佛言。祕密主觀我語輪境界。廣長遍至無量世界清淨門。如其本性表示隨類法界門。令一切衆生皆得歡喜。亦如今者釋迦牟尼世尊流遍無盡虛空界。於諸刹土勤作佛事此文明大日尊三身遍諸世界作佛事。亦如釋迦三身。釋迦三身大日三身各各不同。應當知之。

【書き下し】

大毘盧遮那經に云わく、「一時、薄伽梵、如來の加持せる廣大にして金剛の法界宮に住す。一切の持金剛は、皆悉く集會す。

しゅうこんじう

其の金剛を名づけて虚空無垢執金剛、乃至は金剛手・祕密主と曰う。是くの如くを上首として、十佛刹の微塵數等の持金剛衆と俱なり。及び普賢菩薩・妙吉祥菩薩、乃至諸大菩薩、前後に圍繞して而も法を演説す。謂わゆる、三時を越えたる如來の日、加持の故に、身・語・意平等の句の法門なり（此れ、自性身の説法を明かす）。時に、彼の菩薩は普賢を上首と爲し、諸々の執金剛は祕密主を上首と爲す。毘盧遮那如來の加持の故に、奮迅して身の無盡莊嚴藏を示現す。是くの如く、奮迅して語・意平等の無盡莊嚴藏を示現す（此れ、受用身の説法を明かす）。毘盧遮那佛の身、或いは語、或いは意従り生ずるには非ず。一切處に起滅邊際不可得なり。而も毘盧遮那の一切の身業・一切の語業・一切の意業は、一切處、一切時に、有情界

に於いて、眞言道の句の法を宣説す（此れ、變化身の説法を明かす）。又、執金剛・普賢・蓮華手菩薩等の像貌を現じ、普

せんぜつ

ぞうみやう

く十方に於いて眞言道の清淨句の法を宣説す（此れ、等流身の説法を明かす。等と言うは、金剛蓮華手を擧げ、兼ねて外金剛部の諸尊を等しくす。此の經の四種法身は、亦た豎横の二義を具す。文勢知りぬべきなり」と。又、云わく、「爾の時、毘盧遮那世尊、執金剛・祕密主に告げて言うに、「若し、大覺世尊の大智灌頂の地に入らば、自ら三昧耶の句に住するを

だらにぎよう

見る。祕密主、薄伽梵の大智灌頂に入らば、即ち陀羅尼形を以て佛事を示現す。爾の時、大覺世尊、隨つて一切の諸々の衆生の前に住して、佛事を施作し、三昧耶の句を演説す」と。佛言わく、「祕密主、我が語輪の境界を觀するに、廣長にして遍く無量の世界に至る清淨門なり。其の本性の如く、隨類の法界を表示する門なり。一切衆生をして皆歡喜を得せしむ」と。亦た、「今の釋迦牟尼世尊の無盡の虚空界に流遍して、諸々の刹土に於いて佛事を勤作するが如し」と。（此の文は、大日尊の三身の、諸々の世界に遍じて佛事を作すこと、亦た釋迦の三身の如くなることを明かす。釋迦三身、大日三身は、各々同じからず。應に之を知るべし）」と。

【註記】

- ①持金剛…堅固な菩提心を持つ密教の菩薩たち。
- ②執金剛…持金剛の代表（上首）。
- ③虚空無垢執金剛…虚空のように清浄無垢な持金剛菩薩。
- ④金剛手・祕密主…金剛手菩薩。祕密主とともに金剛薩埵の別称。
- ⑤十佛刹…十の仏国土。
- ⑥妙吉祥菩薩…文殊菩薩。
- ⑦身・語・意平等…仏と行者の「三密」が不二一如であること。
- ⑧奮迅して…奮い立って。
- ⑨身の無盡莊嚴…この上なく莊嚴された仏身。
- ⑩邊際…時空の限界。
- ⑪眞言道の句…眞言密教の道筋。「句」をサンスクリットの「pada」と考え「道筋」ととった。
- ⑫蓮華手菩薩…蓮華を手を持つ菩薩。観音菩薩。金剛手菩薩と対。アジャンタ石窟第一窟。
- ⑬像貌…姿。
- ⑭外金剛部…胎藏界曼荼羅の最外院。外教の神々、鬼神、星宿などの護法神。
- ⑮大覚世尊…偉大な覚者、釈迦牟尼。
- ⑯大智灌頂の地…覚者の奥深いサトリの智慧によって灌頂された境地。
- ⑰三昧耶…「三密」平等。
- ⑱陀羅尼形…陀羅尼の形をとった仏身。
- ⑲佛事を示現…受用身仏の動作を示現する。

②⑩ 語輪…陀羅尼の形をとった仏身。

②⑪ 隨類…相手の機根によつて姿を変えて化導すること。

②⑫ 釋迦三身…「法身」「報身」「応身」。

②⑬ 大日三身…「法身」「受用身」「變化身」。

【私釈】

『大毘盧遮那成佛神變加持經』（『大日經』）「住心品」に説くに、「説法主の大日如来と聽聞衆の菩薩たちの気持ちが一致したある時、大日如来は、自らの加持によつて出現した、広大で堅固な法界の宮殿に住していた。（そこに）堅固な菩提心を持つ密教の菩薩たちがことごとく集つていた。その菩薩たちは、虚空無垢執金剛から金剛手菩薩・秘密主までの十九の執金剛と言う。彼らを代表として、十の仏国土に相当する極めて微細な数の持金剛たちも同席していた。さらに普賢菩薩・文殊菩薩から諸々の大菩薩に至るまで、その前後を囲み、そこで内なるサトリの智慧を説法するのである。（それは）すなわち、過去・現在・未来の「三時」を越えた如来の日々に加持された身・語・意の、「三密」平等を説く法門である（これは、自性身の説法を明かしている）。ある時、かの菩薩たちは普賢菩薩を上首とし、執金剛たちは秘密主（金剛薩埵）を上首とし、大日如来の加持を蒙つたので、彼らは奮い立つてこれ以上にならないほどに莊嚴された仏身を示現した。このように、奮い立つて「三密」平等のこれ以上にならないほどに莊嚴された仏身を示現した（これは、受用身の説法を明かしている）。（然るに、この世間は）大日如来の身・語・意の「三密」から生じたものではない。あらゆる処で生滅をくり返し、相対的な時空の限界もよくわからない。しかし、大日如来のあらゆる身・語・意のはたらきは、あらゆる処で、あらゆる時に、生ある者の世間（有情界）において、真言密教の道筋の教法を説いている（此れ、變化身の説法を明かす）。また、執金剛・普賢菩薩・蓮華手菩薩などの姿に變現して、遍く東西南北から上下の十方世界において、真言密教の本来清浄の道筋の教法を説く（これは、等流身の説法を明かしている。等と言うのは、堅固な蓮華手菩薩を例に挙げ、外金剛部の諸尊も同等に説くと言う意味である。この

經の説く「四種法身」には、豎と横の二つの意味がある。ここでは豎の意味を述べたが、横の意味は文脈からもわかるので、そう知るべきである」と。また、同じく『大日經』「百字果相応品」に説くに、「その時、世尊・毘盧遮那如来が、執金剛や秘密主（金剛薩埵）に告げて言うに、「もし、（あなたが）偉大な世尊・釈迦牟尼の奥深いサトリの智慧によつて灌頂された境地に入るならば、自ら「三密」平等の道筋に住するを見ることが出来る。秘密主よ、偉大な世尊・釈迦牟尼の深いサトリの智慧によつて灌頂されるなら、陀羅尼の形をとつた仏身によつて受用身仏の動作を示現する。その時、大覚・釈迦牟尼は聴衆の機根に随つて諸々の衆生の前に坐り、他受用身仏の動作を行い、「三密」平等の道筋を説いた」と。大日如来が言うに、「秘密主よ、私が陀羅尼の形をとつた語密の仏身の境地を観察するに、広く長く遍く限らない世界に至る清浄な入口に見える。相手の機根（本性）に従つて姿を変え、凡夫・衆生を導びく法界を表示する法門である。あらゆる凡夫・衆生を喜ばせるのである」と。また、「今述べてきた世尊・釈迦牟尼は、限らない虚空の世界に遍満して、諸々の仏国土において受用身仏の動作を示現しているのと同じである」と（この文は、大日如来の「三身」（法身・受用身・變化身）が諸々の世界に遍満して仏身の動作を示現するのは、釈迦牟尼の「三身」（法身・報身・応身）と同じであることを明かしている。（だが）釈迦牟尼の「三身」と大日如来の「三身」とはそれぞれ同じではない。よくよく知っておくべきである）」と。

○『守護經』『大智度論』引証註解段

【原文】

守護國界陀羅尼經云。佛告秘密主言。善男子此陀羅尼者。毘盧遮那世尊色究竟天爲天帝釋及諸天衆已廣宣說。我今於此菩提樹下金剛道場爲諸國王及與汝等略說於此陀羅尼門。

【書き下し】

守護國界陀羅尼經に云わく、「佛、秘密主に告げて言わく、「善男子、此の陀羅尼とは、毘盧遮那世尊、色究竟天に於いて、

天帝釋及び諸天衆の爲に已に廣く宣説す。我、今、此の菩提樹下の金剛道場に於いて、諸々の國王及び汝等の爲に、略して此の陀羅尼門を説く」と。

【註記】

- ①陀羅尼…「オームOm」（松長有慶『訳注 弁頭密二教論』）。
- ②色究竟天…色界の最高天。「他化自在天」。
- ③菩提樹下の金剛道場…釈尊がサトリを開いたブツダガヤの菩提樹の下の金剛座。
- ④陀羅尼門…真言密教。

【私釈】

『守護國界主陀羅尼經』第九に説くに、「仏世尊（釈迦牟尼）が、秘密主（金剛薩埵）に告げて言うに、「善男子よ、この陀羅尼は、世尊・毘盧遮那如来が色究竟天において、帝釈天や諸々の天神のために今まで広く説いたものである。私（釈迦牟尼）は今、この菩提樹下の金剛道場において、諸々の國王やあなた方のために、要略してこの真言密教（陀羅尼門）を説くのである」と。

【原文】

智度論第九云。佛有二種身。一者法性身。二者父母生身。是法性身滿十方虛空無量無邊。色像端政相好莊嚴。無量光明無量音聲。聽法衆亦滿虛空此明衆亦是法性身非生死人所見常出種種身種種名號。種種生處種種方便度衆生。常度一切無須臾息時。如是法性身佛。能度十方衆生受諸罪報者是生身佛。生身佛次第說法如人法。

【書き下し】

智度論の第九に云わく、「佛に二種の身有り。一は法性身^{ほつしよつじん}、二者は父母生身^{ふもしよつじん}なり。是の法性身は十方の虚空に満ちて無量無邊なり。色像端政^{しきざうたんせい}にして相好莊嚴す。無量の光明、無量の音聲あり。聽法の衆も亦た虚空に満つ（此れ、衆も亦た是れ法性身にして、生死の人の所見に非ざるを明かす）。常に種種の身・種種の名號を出し、種種の生處にして種種方便もて衆生を度す。常に一切を度して須臾に息む時無し。是くの如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸々の罪報を受くるを度すは、是れ生身の佛なり。生身の佛は次第に説法すること人の法の如し」と。

【註記】

①法性身…法身。

②父母生身…生身。

③色像端政…姿・かたちが美しく立派。

【私釈】

『大智度論』の第九に説くに、「仏身に二種類があり、一つは法身、一つは父母から生れたこの身（生身）である。この法身は十方の虚空に遍満していて数えきれないほどに際限がない。その姿・かたちは美しく立派で仏としての容姿を整えている。量ることができないほどの光明、数えきれないほどの音声をもっている。（然るに）仏の説法を聞く聴衆もまた法界の虚空に満ちている（これは、聞衆もまた法身であり、生死に輪廻する人間には見ることができない仏身であることを明している）。常にさまざまな仏身やさまざまな仏名で出現し、さまざまな凡夫・衆生の生別に応じ種々の慈悲方便によつて衆生を救済している。常に一切の衆生を救済して一時も休むことがない。以上が法身の仏である。十方の衆生が諸々の罪報を受けるのを

救済するのが、生身の仏である。生身の仏が、通常の世間的な容姿や声で説法するのは、私たち人間の会話と同じである」と。

【原文】

又云。法身佛常放光明常説法。而以罪故不見不聞。譬如日出盲者不見雷霆振地聾者不聞。如是法身常放光明常説法。衆生有無量劫罪垢厚重不見不聞。如明鏡淨水照面則見。垢翳不淨則無所見。如是衆生心清淨則見佛。若心不淨則不見佛。又云。如説密迹金剛經中。佛有三密。身密語密意密。一切諸天人皆不解不知上來經論等文。並是顯密差別法身説法之證也。披覽智者詳而解迷

【書き下し】

又、云わく、「法身佛は、常に光明を放ち常に説法す。而るに、罪を以つての故に見ず、聞かざること、譬えば、日の出れども盲者は見ず、雷霆らいいていの地を振えども聾者は聞かざるが如し。是くの如く、法身は常に光明を放ち常に説法すれども、衆生は無量劫の罪垢に厚重有つて見ず聞かず。明鏡淨水の面を照らせば則ち見、垢翳くえい不淨なれば則ち見る所無きが如し。是くの如く、衆生の心清淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず」と。又、云わく、「密迹金剛經の中に説くが如し。「佛に三密有り。身密・語密・意密なり。一切の諸々の天人は皆、解せず知らず」と（上來の經論等の文は、並びに是れ顯密の差別、法身説法の證なり。披き覽る智者は詳かに迷いを解け）。

【註記】

①雷霆…激しいカミナリ。

②明鏡淨水の面…汚れない鏡や清らかな水の表面。

③垢翳…汚れに覆われている。

④密迹金剛經…『密迹金剛力士經』。菩提流支訳『大宝積經』の第三会「密迹金剛力士会」。

【私釈】

また、説くに、「法身に仏は、常に光明を放ち常に説法している。然るに、凡夫・衆生は我執の罪に染まつてるので、法身の姿が見えず聞くことができない。陽ざしがあつても目が見えない人には見えず、激しいカミナリが大地を振動させても耳が不自由な人には聞こえないのと同じである。このように、法身は常に光明を放ち常に説法するが、凡夫・衆生は数限りない長い時間かかつての多くまた重い我執の垢れがあつて、法身の説法を見ることが聞かぬこともできない。汚れない鏡や清らかな水の表面に照らせば見え、汚れに覆われ不浄であれば見えないうちに、このように、凡夫・衆生の心は清らかであれば仏の説法が見え、心が不浄であれば仏の説法が見えない」と。また、説くに、『密迹金剛力士經』のなかに次のように説いている。「仏には「三密」がある。身密と語密と意密である。天界のあらゆる衆生は、それを理解もできないし知りもしない」と（上述の経論などの引用文は、総じて顕密一教のちがいと法身説法を明かしたものである。この経論を開いて読む学匠は詳しく読み込んで誤解を解くべきである）。

●顕密分際段

【原文】

問。若如所談者。説法身内證智境名曰祕密。自外曰顯。何故釋尊所説經等有祕密藏名乎。又彼尊所説陀羅尼門何藏攝歟

【書き下し】

問う人の言うに、「若し、談ずる所の如くならば、法身の内證智の境を説くを名づけて祕密と曰い、自外を顯と曰う。何んが故に、釋尊説く所の經等に祕密藏の名有るや。又、彼の尊説く所の陀羅尼門を、何の藏に攝するや。

【註記】

①何の藏…「經藏」「律藏」「論藏」「雜藏」「菩薩藏」の「五藏」のうちのどの藏。

【私釈】

問う人が言うに、「もし、あなたが述べた通りだとすれば、法身の内なるサトリの智慧の境地を説くをを密教と言ひ、それ以外を顯教と言うことになるが、ではどうして、世尊・釈迦牟尼（釈尊）が（聞衆に）説く經典に祕密藏（密教）の名が出てくるのだろうか。また、世尊・釈迦牟尼が説く密教（陀羅尼門）を「五藏」のどれにいれればいいのだろうか」と。

【原文】

答。顯密之義重重無數。若以淺望深深則祕密淺略則顯也。所以外道經書亦有祕藏名。如來所說中顯密重重。若以佛說小教望外人說即有深密之名。以大比小亦有顯密。一乘以簡三立祕名。總持擇多名得密號。法身說深奧應化教淺略。所以名祕。所謂祕密且有二義。一衆生祕密。二如來祕密。衆生以無明妄想覆藏本性眞覺故曰衆生自祕。應化說法逗機施藥言不虛故。所以他受用身祕內證而不説其境也。則等覺希夷十地離絕。是名如來祕密。如是祕密名重重無數。今謂祕密者究竟最極法身自境以爲密藏。

【書き下し】

答えて言うに、「顯密の義 重重にして無數なり。若し、淺を以つて深に望めば、深は則ち祕密、淺略は則ち顯なり。所以に外道の經書に亦た祕藏の名有り。如來の所說の中にも顯密重重なり。若し、佛、小教を説くを以つて外人の說に望めば、即ち深密の名有り。大を以つて小に比すれば、亦た顯密有り。一乘は三を簡ぶを以つて祕の名を立つ。總持は多名を擇んで、密の號を得。法身の説は深奥にして應化の教は淺略なり。所以に祕と名づく。謂わゆる祕密に且た二義有り。一つには衆生祕密、二つには如來祕密なり。衆生は無明の妄想を以つて本性の眞覺を覆藏するが故に、衆生自祕と曰う。應化の説法は機に逗つて藥を施す。言、虚しからざるが故に、所以に他受用身は内證を祕して其の境を説かず。則ち等覺も希夷けいし十地も離絶す。是れ如來祕密と名づく。是くの如く、祕密の名、重重無數なり。今、祕密と謂うは、究竟の最極法身の自境を以つて密藏と爲す。

【註記】

- ①小教…小乘。
- ②外人の說…外教・外道。
- ③總持…陀羅尼。眞言は一字に千理を含む。
- ④多名を擇んで…多くの言葉で法を説く顯教と比べて。
- ⑤衆生祕密…本来具有しているサトリを「無明」の迷妄で隠す（秘すること）。
- ⑥如來祕密…応化身が凡夫・衆生に世間通常の言葉で説法し、内なるサトリの境地は秘し、敢えて説かないこと。
- ⑦希夷…奥深くてよくわからない。
- ⑧最極法身の自境…法身自らの内なるサトリの境地。

【私釈】

答えて言うに、「顯密の意味はさまざまにあつて数えきれない。もし、浅い理解と深い理解で言うとなれば、深い理解は密教、浅い理解は顯教である。だから、外道の經論にも密教的な名字があり、如來の所説のなかにも顯と密とがさまざまである。もし、仏が小乗を説いて外教の説と比べれば、小乗を深密と言う。大を小と比べれば、またそこには顯と密がある。一乗は三乗と比べれば秘と言ひ、陀羅尼（總持）は（一字に千理を含み）、多くの言葉で法を説く顯教と比べて、密の名称にふさわしい。法身の説法は奥深く、応化身の教法は浅略である。なので秘と言う。さらに、いわゆる秘密にまた二つの意味がある。一つは衆生秘密、二つは如來秘密である。衆生は、「無明」の迷妄によつて本来のサトリを隠してしまうから、自ら秘する（衆生自秘）と言ひ、応化身の説法は、相手の機根に應じて藥を与えるが如くで、世間の言葉が有効であるから、他受用身は内なるサトリを秘して、敢えてその境地を説かないのである。すなわち「等覺」の段階でも奥深くてよくわからず、「十地」の段階からも遠く離れている。これを如來秘密と言う。このように、秘密の名字はさまざまに数限りない。今、秘密と言うのは、究極の法身の自らのサトリの境地を密藏というのである」と。

【原文】

又應化所説陀羅尼門。雖是同名祕藏。然比法身説權而不實。祕有權實隨應攝而已

【書き下し】

又、應化の説く所の陀羅尼門は、是れ同じく祕藏と名づくと雖も、然も法身の説に比すれば、權にして實ならず。祕に權實有り。應に隨つて攝するのみ」と。

【私釈】

また、応化身が説く陀羅尼の法門は、これを同じく秘藏と言うが、しかし法身の説法と比べれば、仮の言説（仮構）であり如来の真実の言葉ではない。秘には仮と真（権と実）がある。文脈に応じて解釈する必要がある」と。

■あとがき

『二教論』のキーワードは「法身說法」である。「法身」をはじめとする仏身觀はおおむね二種類で、『二教論』の末尾で説かれた、釈迦牟尼仏を「報身」とする「法身」「報身」「応身」の「三身」と、宗祖大師が独自に説く「自性身」「受用身」「変化身」「等流身」の「四種法身」である。

「法身」は、私の知るかぎり、『増一阿含經』などが説く「色身・生身の有限に對する永遠不滅の法身」、あるいは説一切有部が説く「三十七道品・十力・四無所畏・十八不共法」、また大乘では『法華經』が説く「久遠実成の釈迦牟尼仏」などを經て華嚴の「盧舎那仏」へと展開した「法性身」「真如身」である。密教はこの「盧舎那仏」をさらにアップデートして大日如来とし、これにサトリそのものの当体（自性身）と、サトリの智慧を説く活動体（受用身・変化身）を付与したが、宗祖大師はこれを脱構築して自性身・受用身（自受用・他受用）・変化身・等流身の四種法身とした。

宗祖大師が言う「法身說法」とは、具には、自性身が自ら説く「三密」說法、すなわち「三密」加持、そして自受用身が自受法樂のために自分に説く說法、他受用身が「十地」の菩薩のために利他方便として説く說法、變化身が「十地」以前の菩薩や声聞・緣覺・衆生を姿を変えて化導・利益する活動、等流身が、觀音菩薩の三十三身のように、外教の神や鬼神などと同じ姿になって彼らを化導・利益する活動である。ただし、「まえがき」でもふれたが、說法といっても世間日常のコトバ（仮構）ではなく、コトバだけでなく、すべて真実義をそのまま発露したものである。

この「法身說法」については、私などが駄弁を弄するよりも井筒俊彦に明快な名文がある。それを以下に紹介して、この稿の結びとしたい。

新しい知のパラダイム、新しい「エピステーメー」が、全世界的に、切実な要求となりつつある今日、我々東洋人も、己の思想的過去を現代的思想コンテキストの現場に引き出して、そこに、その未来的可能性を探ってみようとする努力

を、少なくとも試みるべきではないだろうか。私がこれから語ろうとしている真言密教も、そのような知的操作に値する、あるいは、それを必要とする、重要な東洋的文化財の一つである。

(略)この点で先ず注意されなければならないことは、この思想体系の全体を支配する根源的に言語哲学的な性格である。(略)真言密教は、要するに真言密教である。「真言」(まことのコトバ)という名称の字義とおりの意味が、そのコトバの哲学としての性格を端的に表明している。この意味ではコトバは決して真言密教の一側面ではない。コトバが全体の中心軸であり、根柢であり、根源であるような一つの特異な東洋的宗教哲学として考えることができる。

(『意味の深みへ』、七 意味分節理論と空海)

真言密教は、千年の長きにわたって、コトバの「深秘」に思いをひそめてきた。コトバの深秘学。この特異な言語哲学は、第一義的には、コトバの常識的、表層的構造に関わらない。表層的構造の奥にひそむ深層構造とその機能とを第一義的な問題とする。人間言語の秘密をその究極の一点まで、それは追及していこうとする。我々の日常生活のレベルで、かまびすしく響動するコトバが、その究極の深層において、そもそもいかなる本性を露呈するであろうか、いかなる機能を発揮するであろうか、それを、このコトバの深秘学は実体験的に探ろうとする。

「存在はコトバである」。あらゆる存在者、あらゆるものがコトバである、つまり存在は存在性そのものにおいて根源的にコトバ的である、ということをごの命題は意味する。一見して明らかのように、こういう命題の形に還元された真言密教は、もはや密教的ではない。宗教的ですらない。「真言」という觀念を、一切の密教的、宗教的色づけを離れて、純粹に哲学的あるいは存在論的な一般命題として提示するにすぎない。そのような純粹に哲学的な思惟のレベルに移置しておいて、その上で「真言」(まことの言葉)ということの意味を考えなおしてみようというのである。

それは、真言密教が、本来的、第一義的に問題とするコトバというものが、我々の普通に理解している言語とは違つて、いわばそれを一段高いレベルに移したものの、つまり異次元の言語であるということである。

そのことの一つの証拠として、私は空海の説く「果分可説」の理念を考える。「果分可説」とは、空海が『弁顕密二教論』のなかで、密教を、すべての顕教から区別する決定的な目じるしとして挙げている重要な思想である。「果分」とは、通俗的な説明では、仏さまがたの悟りの内実ということ。より哲学的なコトバで言えば、意識と存在の究極的絶対の領域、絶対超越の次元である。コトバの表現能力との関連において、普通、仏教では、この次元での体験的事態を、「言語道断」とか「言亡慮絶」とかいう。つまり、コトバの彼方、コトバを越えた世界、人間のコトバをもつてしては叙述することも表現することもできない形而上的体験の世界である、ということだ。

このような顕教的言語観に反対して、空海は「果分可説」を説き、それを真言密教の標識とする。すなわち、コトバを絶対的に超えた（と、顕教が考える）事態を、（密教では）コトバで語ることができる、あるいは、そのような力をもったコトバが、密教的体験としては成立し得る、という。この見地からすれば、従つて、「果分」という絶対意識・絶対存在の領域は、本来的に無言、沈黙の世界ではなくて、この領域にはこの領域なりの、つまり異次元の、コトバが働いている、あるいは働き得る、ということである。

東洋だけではない。西洋でも、ネオ・プラトニズム（新プラトン学派）以来の、いわゆる神秘主義的伝統では、コトバを越えた体験ということが、ほとんど常識として語られる。たしかに、言語脱落は冥想的体験の極限的事態であるように思われる。冥想意識の極所、一切のコトバは脱落し、全ては深々たる沈黙の底に沈みこむ。だが、真言密教は、たやすくこのような見方を肯定しない。そこに「果分可説」的立場がある。悟りの境地はコトバにならないと主張してやまぬ通説に對して、悟りの境地を言語化することを可能にする異次元のコトバの働きを、それは説く。

注意すべきは、悟りの境地を言語化するといっても、人間が人為的に言語化するというのではないということだ。むしろ、悟りの世界そのものの自己言語化のプロセスとしてのコトバを考えているのである。そしてそのプロセスが、また同時に存在世界現出のプロセスでもある、と。このようなレベルで、このような形で、コトバと存在とを根源的に同定する。それが真言密教的言語論の根本的な特徴である。だから、この立場では、最初に掲げた「存在はコトバである」という命題が、そのまま何の問題もなく成立することは当然でなければならない。

「果分可説」と空海が言う、その「果分」に対するものは「因分」である。「因分」とは、すなわち、我々普通の人間の経験的現実の世界。我々が通常「コトバ」とか「言語」とかいう語で意味するものは、「因分」のコトバであって、「果分」のコトバではない。

(略) しかし、他面「果分」と「因分」とが、全く別々に存立していて、両者の間になんのつながりもない、というわけでもない。「果分」のコトバは、たしかに異次元のコトバではあるけれど、それだからといって、普通の人間言語とは似ても似つかぬ記号組織であるのではない。それどころか、普通の人間言語が、そこから自然に展開して来るような根源言語として、空海はそれを構想しているのだ。

「果分」の絶対超越的領域に成立し、そこに働くコトバの異次元性を、空海は「法身說法」という世にも有名なテーゼによつて形象的に提示する。「法身說法」——大日如来そのものの語るコトバ。人間の語るコトバと根本的に違うものであることは想像するに難くない。ちようど、大日如来が普通の人間とはまったく次元を異にする存在であるように。

しかし、それと同時に空海は、法身の語るコトバと人間の語るコトバとの内面的連関性を指摘することを忘れない。「コトバの根本は法身を源泉とする。この絶対的原点から流出し、展じ展じて遂に世流布のコトバ（世間一般に流通している普通の人間のコトバ）となるのだ」と『声字実相義』の一節で彼は言っている。つまり、我々が常識的にコトバと呼び、コトバとして日々使っているものも、根源まで遡つてみれば、大日如来の真言であり、要するに、真言の世俗的展開形態

にすぎない、というのだ。

（『意味の深みへ』 七 意味分節理論と空海）

「ア」は「本不生」の最初の声、すなわち絶対無分節者が分節に向つて動き出す第一歩。従つてそれは、さつき説明したように、意識そのものの生起の兆しであるとともに、存在論的には、万物の始源であり、帰趨でもある。絶対無分節者は、このダイナミックな言語的自己顕現の始点において、大日如来として形象化される。すなわち、「ア」音は大日如来の口から出る最初の声。そしてこの最初の声とともに、意識が生まれ、全存在世界が現出し始めるのだ。

「ア」(अ)は、サンスクリットでは否定を表わす接頭辞である。「非×」、「不×」、「無×」、どんなものをもつてきても、「あらず、あらず」とそれは言う。経験的事物、事象の一切をあますところなく否定する「ア」は、たしかに無的、無化的性格をもつ。経験的事物、事象の虚妄的實在性を否定するのだ。絶対無分節者の無的側面を表示する、と言ってもいい。だが、「ア」音の機能は、存在否定だけにはとどまらない。

空海にとつて、「ア」音は一切の音の始源、従つて意識・存在の始源である。梵字（デーヴァ・ナーガリー）のアルファベット表で、「ア」の文字が一番最初の位置を占めることがそれを暗示する。そしてまた「ア」は、一切の音の根源であるという、まさにそのことによって、一切の語に（すなわち、一切の存在者に）内在する。

すべての子音文字が、梵字の書写システムにおいて、「ア」音を含んだ形（例えば、अがआという形）で常に表記されるということが、「ア」のこの普遍的内在性の標徴である。

「凡そ最初口を開く音に、みな阿の声あり。もし阿の音を離るれば、すなわち一切の言説なし。故に衆声の母となす。（しかるに）凡そ三界の語音は、みな名に依り、名は字に依る。故に悉曇（サンスクリット文字システム）の阿字を衆字の母

となす。まさに知るべし、阿字門真実の義も、亦是の如く、一切の法義の中に遍ぜり」という『大日経疏』の一文は、今ここに述べた「ア」音觀を説いて明快。この思想を同じ『大日経疏』は、もつと簡單明瞭に、「一切の語音を聞く時、すなわち是れ、阿の声を聞くが如く、一切の法（一切の存在者）の生（生起）見る時、すなわち是れ、本不生際を見る」とも表現する。

五大に皆響き有り 十界に言語を具す 六塵悉く文字なり 法身は是れ実相なり

「五大（地・水・火・風・空）、みな響きあり。十界、言語を具す。六塵（色・声・香・味・触・法）はことごとく文字。法身は是れ実相」（『声字実相義』）とは、すなわち、このこと。同じく『声字実相義』の「名の根本は法身を根源となす。彼より流出して、しばらく転じて世流布の言となるのみ」という一文は、空海のこの言語的世界現出思想を要約する。

こうして大日如来のコトバとして展開する存在リアリティーは、その絶対的究極の一点において、「空」であり、この意味で空海の哲学的立場は明らかに龍樹以来の大乗仏教に属しはするけれど、「空」を否定的に捉え、その無的側面を強調する諸派に対して、彼は「空」を肯定的に捉え、その有的側面を強調する。

（略）だから、彼の見る「空」、すなわち「法身」は「有」の充実の極。内に充実しきつた「有」のエネルギーは必然的に外に向って発出しようとする。発出して、いまや一切万有になろうとする。この全存在生起の始点において、「法身」は、空海にとって根源的コトバである。

根源的コトバ、まだまったく分節されていない、絶対無分節のコトバ。「法身」が一切万有を内蔵する「有」の極限的充実であるということは、すなわちそれがあらゆる存在者の意味の意味、全存在の「深秘の意味」であるということ、つまり最も根源的なコトバであるということなのである。

この『二教論』には、伝統教学で問題とされている箇所がしばしばある。これについては、松長有慶博士の「用語釈」に今回も助けられたが、この稿は伝統教学に属する研究書ではないので深追いはしていない。

以上、『二教論』の読了を以って、いわゆる「十卷章」のうち、宗祖大師の著になる『即身成仏義』（二卷）・『声字実相義』（二卷）・『呬字義』（二卷）・『般若心経秘鍵』（二卷）・『弁頭密二教論』（二卷）・『秘藏宝鑰』（三卷）の、六部・九卷を読み終えた。空海密教の主要な原典に直接ふれることで、宗祖大師の密教思想の理解がより深まった思いがする。この年齢で、今さらおそいのであるが、やはり原典を読み宗祖大師の「知」に直接ふれることの大切さを再確認した。

令和七年 皐月

草学道人

長 澤 弘 隆